文學士 高桑駒吉 講述

印度史

24523
東京文社圖書

早稲田大學出版部藏版

東洋文化研究所
東京文社藏

目次

第一編　總說

第一章　國土……一頁
第二章　人民……二一
第三章　非アーリア諸族……二七
第四章　印度に於けるアーリア族……四六
第五章　國名の起源……五一

第二編　古代史

第一期　吠陀時代

第六章　土著との戰爭……五四
第七章　風俗及び文化……六三
第八章　宗教……七一

第二期　史詩時代

225
Ta329i

国立国会図書館
25.3.31

115885

第九章　クル族及びパンチャラ族……八五
第十章　コサラ族キデハ族及びカシ族……九四
第十一章　風俗及び文化……一〇五
第十二章　宗教……一一四
第三期　理論時代
第十三章　インド種族の膨脹……一二五
第十四章　風俗及び文明……一三六
第十五章　科學及び哲學……一四七
第十六章　佛教……一五四
第四期　佛教時代
第十七章　摩揭陀帝國……一六九
第十八章　建築及び技藝……一七九
第十九章　風俗及び法律……一八七
第二十章　科學の進歩……一九六
第五期　ブラナ時代

第二十一章　カノウジ及びウジアイン……二〇三
第二十二章　宗教及び風俗……二一八
第二十三章　建築及び建築術……二三〇
第二十四章　科學及び文學……二三七
第三編　中古史
第一期　イスラム時代　上
第二十五章　初代のイスラム教征服者……二六四
第二十六章　ガズニ朝……二七〇
第二十七章　ゴール朝……二七六
第二十八章　奴隷王朝……二八一
第二十九章　キルジ朝……二八五
第三十章　ツグラク朝……二九〇
第三十一章　サイイド及びロヂ兩王朝……二九五
第三十二章　文學科學言語及び風俗……三〇三
第二期　イスラム時代　下

目次畢

第三十三章　ババル及びフマユン……三一四
第三十四章　アクバル大帝……三一六
第三十五章　ジアハンギル及びシアー・ジアハン……三二八
第三十六章　アウラング・ゼブ……三三五
第三十七章　モグル帝國の末路……三四七
第三十八章　マーラタの興廢……三五六
第三十九章　モグル朝時代の制度、宗教、文學及び社會狀態……三六九

第四編　近世史

第四十章　初代のヨーロッパ殖民地……三八八
第四十一章　イギリス領印度の建設……四〇七
第四十二章　イギリス領印度の固定……四四六
第四十三章　土兵の亂……四七九
第四十四章　イギリス帝國治下の印度……四九〇

印度史

文學士　高桑駒吉述

第一篇　總說

第一章　國土

位置及廣袤　印度は中央亞細亞より南の方印度洋に延長する三角形の大國にして、北方にはヒマラヤ(Himálaya)山脈連亘し、西方の大部はアラビヤ(Arabia)海に、東方の大部はベンガル(Bengal)灣に濱す。山海の自然其全國境を畫むること已に此の如しといへども、其東北及西北の國境には、亞細亞の殘部を是と連結する二箇の門口ありて相對せり。即ち東北には緬甸(Burma)西藏(Tibet)間の臺地あり、西北にはアフガニスタン(Afghánistán)及バルキスタン(Balúchistán)ありて其境をなす、而して是等の通路より其躰裡を異にする人民の二潮流は印度に流れいりぬ。

印度は北緯八度より三十六度に位し、其領土は炎熱燒くが如き赤道附近より遠

く溫帶地方に亘る。現時の首府カルカッタ(Calcutta)は東經八十八度に位す。印度は東西南北共に約八百八十里あり。然れども地形梨果狀の彎曲をなし、其南端コモリン(Comorin)岬に至りて圓錐の狀をなせり。然るに英國人は之に加ふるにベンガル灣の東濱に位する緬甸を以てせしかば、印度の全領土は其面積に於て約七十万平方里、人口に於て二億八千八百万を算するに至れり。故に印度は露西亞を除きて其面積殆ど全歐洲に等しく、人口に於ては寧ろ之に過ぎたりといふべし。

四地方　印度帝國には世界最高の山あり、海面を拔くこと僅に數寸の三角州あり、其間風景を異にし氣候を異にす。故に熱帶の猛獸陰藪より、白雪皚々たる山中の小動物に至るまで自然の產物に滿つ。然れども吾人若し輕氣球に乘りて印度全國を瞰下せば、明白に其四地方より成れるを發見し得べし。即ち第一地方は北に於て亞細亞の殘部より印度を鎖すヒマラヤ山脈を包含し、第二地方はヒマラヤ山麓より南方に延長し、源を是に發する兩大河畔の大平原を包括し、第三地方は此大平原の南端より再び隆起し、高燥なる三面の臺地となりて印度の南半を蔽ひ、第四地方はベンガル灣の東濱に位する緬甸より成れり。

第一地方――ヒマラヤ山地　以上擧げたる四地方の第一はヒマラヤ山及南方に走る其支脈より成る。ヒマラヤは梵語(サンスクリット)の「雪の家」の義にして、東西殆ど相平行せる二箇の山壁を形成し、其外には空虛なる谿谷あり。是等山壁の極南は印度の平原より高きこと約二万尺、其絕頂は世界の最高峯エヴレスト(Everest)となりて高さ二万九千二尺あり。山勢是より傾斜して北方に下り、海面を拔くこと約一万三千尺に減ず。傾斜の背後にはヒマラヤの內脈起り、四時雪を戴く第二の山壁を形成す。二重の山壁の外には谿谷水槽の狀を成し、インドス(Inds)ストレヂ(Sutlej)ブラーマプトラ(Brahmaputra)の三河は其流を此所に集む。是等谿谷の北面より、海面を拔くこと一万六千尺と稱する西藏の臺地起り、かくてヒマラヤ山は亞細亞の殘部より印度を鎖す。印度と西藏との間にある高峯は四時雪を戴き、長さ約二十八里に亘る其大氷源の一は、徐々に其氷塊を下方谿谷に輸す。此荒地は其大商人跡を留めず、軍隊の進むべき道路もなし。然れども大膽なる隊商は身に羊皮を纏ひて高さ一万八千尺の峻嶺を踰ゆるものあり。騾馬及小馬の遺骨は實に其行路を示しつゝあり。歐洲人が其尾を以て緣飾を造る小牡牛は、ヒマラヤにありては貨物

運搬の用をなし、能く其背に重荷を負ひて崎嶇たる山路を蹈ゆ。羊もまた平原附近の諸市場に硼砂の藥を運ぶの用をなし、次いて其毛は剪られ、其肉は食用に供せらる。

ヒマラヤの支脈　ヒマラヤ山は唯に印度の北に二重の山壁を形成するのみならず、其兩端より南方に支脈を出して東北及西北の國境を鞏固にす東北の支脈はナガ(Naga)及パトコイ(Patkoi)といひ、英國の文明的諸地方と上緬甸の蠻族との間に障壁を造れり。然れども其南方に去る所には、ブラーマプトラ河が、アッサム(Assam)の谿に至る水路ありて此障壁を貫けり。西北の國境に於ける支脈はヒマラヤより海に至るまで南に走り、順次サフェド・コー(Safed Koh)、スライマン(Sulaimán)山脈及ハラ(Hálu)山の諸山脈をなす、而して是等の絶頂は一万一千尺あり。然れども西方の障壁はヒマラヤより南方に至る所にて、カイバル(Khaibar)嶺のために貫かる。カイバル嶺の附近にはカブル(Kábul)河ありて印度に流入す。カイバル嶺は其南にあるクラム(Kuram)嶺、デラ・イスマイル・カン(Dera Ismáil Khán)附近のグワラリ(Gwalari)嶺、更に南に位する著名のボラン(Bolán)嶺と共に、印度よりアフガニスタン及バルチスタンに至る門口を形成す。

ヒマラヤの給水　以上述べたるが如く、ヒマラヤ山は外敵を禦ぐ障壁なると共に、印度人民生活の源なり。是等の山脈は水を蓄集して以て炎熱燒くが如き平原に供給す。夏期の間多量の水氣は遠隔なる熱帶地方の海より發散し、やがて水蒸氣となり、六月の候南方より吹ききたる定時風によりて北方に送らる。定時風は印度の全領土を過ぐるに先たち、水蒸氣を北方に驅るを例とす。是等の水蒸氣は時として、印度詩人が大なる白鳥の飛翔に擬せし雲の連續となり、時としてはまた森林の樹木を裂き、村落の家屋を破壞し、田野を水に浸す暴風雨となりて現はる。水氣の雨となりて下らざる者は、遂にヒマラヤを衝きて其進路に躺し、乃ち外面の傾斜に於て雨となり、或は內面の高峯を横ぎらんとして雪となり、結局ヒマラヤを踰えて北するもの殆ど稀なり。故に南にては世界最多量の雨瀧をなして印度大小の河に注ぐも、一たび北して西藏の大平原に至れば、雨滴を見ること甚だ稀なり。

ヒマラヤの產物風景　降雨の多量はヒマラヤの南方傾斜地をして極めて肥沃ならしむ。此傾斜地の上部は灰色の岩石を形成す。然れども其土壤ある所には

森林生ぜり。低濕なる山麓一帶の土地はタライ(Tarái)といひ、熱病の發生すべき陰藪之を蔽ひ、唯蠻族及猛獸の生息するあるのみ。一種の羊齒科植物及竹類は傾斜地の東部を飾り石楠は此所に森林をなして毎春深紅色及淡紅色の花を開き、デオダル(deodar)一名ヒマラヤ檜は蓊鬱として影暗きまでに繁茂せり。樹木の枝は苔、羊齒、花蔦を裝ひ、秋に至れば黃紅雜色の穗は丘陵の下にも美麗なる懸帛(リボン)の狀をなせり。ヒマラヤの重なる產物は木材及木炭なり。大麥及稷は炎熱酷しき谿谷と傾斜地を崩して造れる平地とに生ず。其他の產物には馬鈴薯、其他の植物、及蜂蜜あり。騾馬及小馬は其貨物と共に斷崖絕壁の上に造られたる狹路に彷徨し、騾夫及其妻子はまた自ら松材及圓錐形の穀物藍を運搬す。

山林の亂伐　平原に於ける木材の價格騰貴するにつれて、諸所の山林はヒマラヤ山民の採伐する所となり、禿山雨を留めず、爲めに樹木生ぜざるに至れり。加之、英國より輸入せられたる馬鈴薯の栽培は、其山林をして荒敗更に甚しきを加へしめぬ。山民は其馬鈴薯栽培地を得んがために、樹木を燒き丘陵を崩して平地を造るの法を案じてより、山林の樹木は數年の間に悉く採伐せられ、或は亂軍に斃れた

る勇士の如く地上に朽ち、或は灰白の幹、骸骨の枝、尙ほ山上にたち、また昔日の影を留めざるに至れり。故に靑々たる馬鈴薯の畑地は、其曾て樹木鬱蒼たる林地なりしを表するものとす。一層野蠻なる山地の諸種族は、一層亂暴なる耕作法によりて其收穫を期す。是等の種族は鋤鍬を用ゐず、牛馬を役せず、唯藪地を燒きて間斷なく其種子を植え、全然土地を涸らさずんば已まず。故に是等の種族は決して一所に永住することなく、僅々一二年にして必ず他の藪地に轉じ、此處にもまた土地を涸らして更に他に移るなり。

ヒマラヤの河系　ヒマラヤ山の特徵は其南北兩傾斜地より雨滴を印度平原に送るにあり。是れ即ちヒマラヤ山が二重の山壁を形成し、其外に水槽の如き谿谷あるによるものなること前已に述べたるが如し。蓋し南方の高峯を踰ゆる雨滴すらも、北方の山脊に至りて其進路に窮し、後方の水槽に下ればなり。印度の三大河中其最長流たるインドス及ブラーマプトラは、源を二重の山壁の北に橫はる此水槽に發し、是に次ぐガンガ河(Ganges)のみ其水を南方の傾斜地に集む。

インドス及ストレジ　兩文流ストレヂを有するインドスとブラーマプトラと

は、共に其源を寂寥たる谿谷に發し、其間相距ること甚だ遠からず。此谿谷は高さ一万五千尺の山壁によりて印度より區分せらるるものなり。インドス及ストレは最初に西に流れ、次に南に轉じてヒマラヤの孔口を過ぎ、プンジアブ(Punjab)に至りて小流を會し、遂に印度洋に注ぐ。其全長約八百三十里なり。

ブラーマプトラ　是に反してブラーマプトラ河は東をさしてヒマラヤの後方に流れ、アッサムの東北隅にてヒマラヤの裂目を穿つべき水路を求め、次いで急に西に折れまた南に折れて最後にベンガル灣に達す。其全長は約八百三十里にしてインドス河も同じ。前已に述べたるが如く、インドス、ブラーマプトラの二大河は共に其源をヒマラヤの後方相接近せる谿谷に發し、また殆ど其長さを同うすれども、其河口は約七百里を離れて反對の方向にあり。以上の二大河は共に小山脈を穿ちて平原に出づる前、久しく二重の山壁の間にある水槽に潛み、遂に其北方傾斜地より平原流下す。實にブラーマプトラ河の第一の源は未探檢の地にして、ヒマラヤ山壁の後方約四十五里の流にはサムプ(Sampu)の名あり、其印度平原に出づるに及びて初めてブラーマプトラと呼ばるるのみ。ブラーマプトラは梵語にてブラーマ(Brahma)[神]の子といふ義なり。

ガンガ　ガンガ及其支流ジウムナ(Jumna)は、ヒマラヤの南方傾斜地より其水を集め海に近づくに及びてブラーマプトラ河に合し、網の如き水路に分れてベンガル灣に注ぐ、其全長約七百里なり。

第二地方――河畔平原　ヒマラヤ山より發する河流によりて灌がるる平原は第二地方を形成す。而して此地方は東ベンガル灣より西印度洋に亘り、印度帝國中最も富裕にして最も人口稠密の諸州を包括す。太古より侵略者は其東北及西北の山嶽を踰えて、來り河流に沿ひて順次南方海岸に其先入者を驅逐しぬ。是等河畔の平原に住する人民は現に約一億五千万ありて、其所領にはベンガルの副鎮臺地、アッサム、オウド(Oudh)、西北諸州、プンジアブ、シンド(Sind)、ラジプタナ(Rajputana)及其他の本土諸州あり。インドス河は北印度河畔平原の西面を潤ふし、ブラーマプトラ河は其東面に灌ぎガンガ河及其支流は中部地方を浸して其土地を膏腴ならしむ。

インドス河はプンジアブの五河を會したる後また一の支流を変えず、其左岸よりはラジプタナの大沙漠延長す。ブラーマプトラ河は平原の極東にありて、人畑

稀なるアッサムの谿谷を走り、其沿岸人家稠密の地と稱すべきは、單にガンガ河に近き下流の一部分のみ。然れどもガンガ及其大支流ジャムナは、殆どヒマラヤ山脈と平行して約四百七十里を流れ、源を是に發する無數の小流を合して、北印度の大部分に其水を給す。故に沿岸の人民は是等の河を尊崇して、其田野を豐饒ならしむる恩惠を謝するを忘れず。是を以てガンガ及ジャムナの源は神聖視せられ、アルラハバド(Allahabad)に於ける其會合點は巡詣の巡拜者年々數千に及び、此合流遂に海に往くサガル(Sagar)島には、毎年一月宗教上の大會開かるるに至る。「慈母ガンガ」に浴するは即ち一生の罪を淨むるものにして、一向悪念の印度人は、其屍灰ガンガの流によりて海上に再生すべしと信じて死す。ガンガ河の沿岸には大市府少からず。カルカッタ、パトナ(Patna)、ベナレス(Benares)の如き即ち是なり。ガンガの支流ジャムナの沿岸にはアグラ(Agra)及デリー(Delhi)の諸市府あり。二流の合する所にはアルラハバドあり。

河の作用　印度平原を知らんとせば須らく以上三大河の作用を明確に知らざるべからず。何となれば以上の三大河は最初に土地を造り、次に是をして肥沃ならしめ、最後に多産ならしむればなり。印度平原は古昔人類の未だ世界に現れざるとき、火山力によりて其大部分を形成せられたるものとす。然れども北印度平原の他の部分は、以上三大河の山より運びきたる泥土より成りしものなり。今日に於ても尚ほ此徴候ありて、是に太古土地形成の經過を窺ふことを得べし。ガンガの如きベンガルの河流は、ヒマラヤ山より海に至るの間、明かに二段の流路を有するを見る。即ち第一段に於ては谷底を流れ、兩岸の土地より泥と水とを集め、數多の支流を合せて進めども、其一たび下ベンガルの中部に達するや、爰に第二段の流路を示し、水面は平原と平行の狀となり、遂に數多の水路に分るるの狀、譬へば噴水の指もて突然遮られたるの狀あり、是よりして此新たなる流は各、其左右に無數の小支流を分出す。

ベンガル三角州　是等無數の小支流が相交はり相圍む所はベンガルの三角州を形成す。網の如き流は此廣大なる平地を横ぎりて緩かに流れ、遂には流勢全く衰へて北印度より流下せし砂土を運ぶこと能はざるに至る。故に三角州の緩かなる河流は、其緣に砂土を委して扁桃形の島を造り、河床次第に周圍の平原より高

きに至るを見る。三角州の河流には各〻高き堤防あり。されど雨期に至れば河水堤防を越えて汎濫し、兩岸の低地に其泥土を遺棄す。是によりて下ベンガルの地は毎秋遠隔なるヒマラヤ山地より河流の運びきたる新土壌の上層を得。以上は豐富なる收獲物を絶えず成熟せしむる天然肥料の撒布法なりとす。

河流の土地形成　河流が次第に三角州を下るに從ひ、其流も亦次第に緩慢となり、其河床遂に附近の平原よりも高きに至る。支流の兩面には皆低地若しくは濕地ありて、河水是等の濕地に汎濫し、漸次泥土を以て之を埋む。河水の濕地を衝くものは多量の砂土を含むが故に、時として黄色を呈することあり。而して黄色の河水は數日間濕地を浸し汎濫減ずるに及びて再び其水路に歸す。然れども已に其内に含む砂土を濕地に遺したるを以て暗褐色を帶ぶ。濕地に殘留する泥土は漸次堆積して遂に新土地を形成す。

河口　印度の河流に見るべき最後の光景は、網の如き其支流が、三角州の端に於ける寂寞たる森林及濕地を過ぎて海に入ることとなり。河口は實に土地形成の秘密を暴露する所にして、河流は此處に海水の重さに壓せられ、尚ほ其内に含む砂土を推積す。砂土は堤防若しくは彎曲せる海角の狀をなして水面を抜けり。海流はまた河流のために妨げられて、潮の海岸に推し上げし砂土を堆積す。是に於て河流の運びきたりし砂土は海岸を埋め、海流の推し上げし砂土河口の周圍に島を造り、二重の土地形成法行はる。

河流の灌漑及公路　故に印度の大河は唯に其河床の島及河岸の濕地を埋むるのみならず、堤防、海角及河口の島を造りて新土地を供するものとす。是等の大河は海を排して、漸々に三角州を構成し、已に造れる土地にはまた砂土を遺して之を肥沃ならしむ。流路の低き部分にては、河水の汎濫は自然の灌漑と肥料とをなし、高き部分にては人工の溝渠其水を田野に引けり。加之河は地方の産物を市府及港に運搬する廉價の公路たり。故に河流のベンガル平原に於けるは猶ほ動脈の人體に於けるが如し。

河流の破壞作用　然れども是等の大勢力は時に恐るべき災害を生ぜざるにあらず。印度には年として家畜、穀倉、藁屋、及其屋上に棲む生物を溺らす洪水なきはなし。河水の溝渠によりて田野に引かるる上流地方にては時に熱病を生じ、また

所によりてはレー(Reh)と稱する鹽分の地表其土地を不毛ならしむ。下流に至れば奔流土地の表面を横斷し、其古河床を去る數里の地に新河床を求めつつ流れ、其間中途の土地村落を溺らす。秋に至れば汎濫起りて其沿岸の田野村落を溺らすを例とす。河の土地形成力は新たに島を造りて却て其水路を止め、曾て其沿岸に位せし重要なる市府を高燥にし、また之を頽廢せしめたること屢々なり。河口に於ける昔時の港もまた之に同じく、河及海より推し上げし砂土の造りたる島のために、其地位を變ぜしもの少からず。

北方河畔平原の收穫物及風景　ベンガルの河畔平原にては一年二回の收穫あり、或州にては三回の收穫あり。實に諸地方の田野は其收穫物を產すること一年二回を下らず。小麥其他諸種々の穀物、豌豆、蠶豆、菜種、及青々たる他諸種の收穫物は春に刈らる。早稻は九月に刈り、晩稻及其他の穀物は十一月若しくは十二月に刈るを例とす。十一月若しくは十二月の收穫を終る前に、春の收穫物のために土地を準備すべき時あり。農夫は炎熱燒くが如き五月の數週間を除きて一日の休息を得ず、其間首を擧げ足を蹠てて雲霓を天に望めり。河岸より膏腴なる平原に延長する北方乾燥の諸地方には、泥土より成れる村落散在し、高貴なる樹木之を飾れり。芒果林は春其花を開きて香氣を放ち、夏に至れば累々たる果實を供す。榕樹は其根を連ねて空に懸り、亭々たる菩提樹(pipal)は其葉を交え、綿は大なる紅色の花を着け、酸果及成長迅速なるバブル(babûl)は、收穫物の田野の上に其穗を現せり。河の海岸に近づくに從ひ、棕櫚は一面に繁りつ其風景頗る佳なり。

三角洲の收穫物　ベンガル三角州の眺望は稻田相連る平地にして、之を繞らすに竹、椰子、アレカ(areca)棕櫚の青々たるあり。此地方は人口稠密なれども一見村落の如し。何となれば住民の小舍は皆車前草及他の樹木の影に隱れて見えざればなり。收穫物は下流に至るに從ひて變ず。北にありて主なる穀物は小麥、大麥及ジョアル(joar)バジラ(bajra)の如き稷にして、後者は此地方の主なる食物たり。何となれば北ベンガルにありては、米は唯灌漑の便に富める土地に產し、富者のために專有せらるればなり。是に反して三角州にては、米は其重なる產物にして一般に食用に供せらる。甘蔗、菜種、綿、煙草、印度藍及許多の重貴なる香料並びに染料は南北共に之を產す。茶は平原を圍む丘陵に栽培せらる。然れども其主なる產地は

ドワルス(Dwars)及アッサムなり。阿片罌粟はガンガの中流ベナレス及パトナ近傍に生じ、桑は稍下流の下ベンガルに産す。然るに黄麻は主なる三角州の收穫物にして、河水の汎濫が天然の肥料を撒布するにあらざれば如何なる土地と雖も之を産せず。數地すらも染料となるべき樹脂並に繭を産す。以上擧げたる所にては河畔平原の收穫物盡きたりといふにあらず。されど一々之を列擧するは煩に堪へざれば、爰には其主なるものを擧ぐるのみ。讀者是によりて此地方が、人民の衣食をつくる總ての植物、若しくは諸外國民と貿易すべき諸種の植物に富めることを知るべし。

第三地方――南方臺地　第三地方は印度半島の南半を蔽ふ三面の臺地より成る。此地方は昔時デッカン(Deccan)、またはダクシン(dakshin)(南)と呼ばれ、ベラル(Berar)、マドラス(Madras)及ボムベイ(Bombay)の中部諸州、ニザム(Nizám)、マソレ(Mysore)、シンヂア(Sindhia)、ホルカル(Holkar)及其他の土着領主の領土を包括す。此臺地はガンガ平原の南端より漸次北に隆起し、其東西兩端には二靈山ありて雲間に聳え、其間には約三百七十里の山脈蜒蜿せり。西端の靈山アブ(Abu)はジアイン(Jain)の殿堂あるを以て有名なり。アブはラジプタナ平原より高きこと五千六百五十尺、其狀恰かも海中の島嶼の如し。アラヴルリ(Aravalli)、ヴィンドヤ(Vindhya)、サトプラ(Sátpura)及カイムル山脈は、他の高地と共に順次東に走り、ラジマハル(Rájmahál)丘の名稱を以てガンガ河の谷に接するに至りて已む。中部山地の東端にパラスナト(Párasnáth)山あり、ガンガ平原を拔くこと四千四百尺にして、ジアインの祭典を執行するがためにアブと共に神聖視せらる。

南方臺地の風景　以上擧げたる山脈は印度の中部臺地を安固ならしむる北方の壁柱を形成す。今日に於ては通路あり鐵道ありて是等の山脈を貫けども、もとは南印度と北印度との間に儼乎たる障壁を成し、是を一帝國に接合すると甚だ困難なりき。三角形の南方臺地は森林、山脊、山巓の群集を形成し、諸所に穀物の成熟する谿谷及高原あり、其東西兩面はガト(Ghát)と稱せらる。ガトは堤防を登る階梯若しくは山道に適用せらるゝ語なりとす。東方のガトは山嘴、山脈斷續してマドラスを南に走り、時には內地に退き、山脈と海濱との間に廣野を形成せり。西方のガトは單に山脈と海濱との間に狹隘なる條片をなして、ボムベイ領に大なる海壁

を造り、或は縛壁となりて行客を驚かし、或は海角となりて海中に突出し、眞に巨大なる上陸梯の觀をなせり。此東西兩ガトは印度の極南コモリン岬附近に會して直角をなし、是に於て南方臺地の三面を完成す。內部の高原は雪線以下にありて、其通常の高處二千尺乃至三千尺を越ゆるは稀なり。是等の內最も有名なる丘陵はニルギリ(Nilgiri)(綠山)にして、海面を拔くこと實に七千尺、マドラスの夏の首府ウタカマンド(Utakamand)を包含す。丘陵の最高點はドダベッタ(Dotabetta)峰にしてミソレの南極にあり、其高さ八千七百六十尺なり。

南方臺地の河流　此高地の內部地方に發する水は多く東海岸に流る。北方即ヂンドヤ山嶺の水はガンガ河に注ぎ、ナルバダ(Narbada)河はヂインドヤの南麓に沿ひて流れ、雨期に於ける其水をカムベイ(Cambay)灣に輸す。タプチ(Taptí)河はナルバダ河と殆ど平行して稍南方に流れ、サトプラ丘の水を集めてカムベイ灣に入る。然れども是より南に進むときは、西方のガト隆起して、ボムベイ海岸と內部臺地の河流との間に堅固なる高壁を造れり。故に是間の水は印度を橫斷して東方に進まんがために、丘陵の周圍を迂廻し、中間の谿谷を衝き、ボムベイの海風西方ガトに平す兩のベンガル灣に注ぐに至りて已む。此の如くしてマドラス領の三大河たるゴダヴリ(Godávari)、クリシナ(Kríshna)(一名キストナ(Kistna))及カヴリ(Káveri)は、其源をボムベイ海岸に聳ゆる山嶽に發し、中部の全臺地を過ぎて遂に印度の東海岸なる太洋に入る。

南方臺地の森林　古代の梵語詩人は蓊鬱たる森林が南方臺地を埋めたるを歌へり。實に此地方は今日に於ても尙ほサル(sal)、黑檀、シッス(sissu)、チーク(teak)及其他の喬木に富み、殊にガトには諸種の草木地を蔽うて繁茂し、一種の壯觀を呈するを見る。然れとも耕作の業進むにつれて荊棘は唯山陰に其影を留め、小麥、稷、烟草綿、甘蔗及豆の畑は開墾地を蔽うに至れり。南印度の黑土は其肥沃なること膏を成すほどにして、ガトと海との間に橫はる低地には、有果棕櫚、米及間斷なき收穫物を產し、其富裕下ベンガルにすら匹敵し得べし。されど內部の臺地は甚だ乾燥なるが故に、其住民は種々の灌漑法を行ひ、水を得るに或は泉よりし、或は大槽よりし、或は谿流を扼して造りたる湖よりす。また南北の定時風雨を下す數ヶ月に及べば、臺地の住民は之を貯へて一年間の使用に供す。普通人民の食物は主としてヲ

ヨアル、バジラ及ラギ(ragi)の如き穀なり。輸出品の主なるものは綿及小麥とす。

南方臺地の鑛物　印度の鑛物は主として此三面臺地及是より突出する山嘴に產す。炭鑛は今日ベンガル臺地の東北端及中部諸州の谿谷に於て發掘せらる。鐵鑛及石炭鑛の地層は將來夥しき煉鑛を出すの望あり。銅及其他の金屬は其產額少し。ゴルコンダ(Golconda)の金剛石は昔時より有名なるものなり。砂金は古代より諸所の河床に於て採拾せられたりき。マドラス及ミソレに於ては、目下盛に金を發掘しつつあり。

第四地方――緬甸　緬甸は英國の印度帝國に結合したるものにして、其大部はイラワヂ(Irawadi)の谷及ベンガル灣の東面に沿ふ海岸地より成る。地形南北に長く、西に海を控え、高山脈の脊骨其中央を貫き、東は山を以て支那及暹羅に境す。中央山脈の脊骨はヨマ(Yoma)連山より成り、鬱蒼たる森林之を蔽ひて海岸地とイラワヂの谷とを分てり。河流は北方より南に木材を輸す。多數の曲江は海濱を刻み、全國土は一面に渺茫たる稻田を形成せり。一八八六年まで英領ブルマは三州に分れぬ。アラカン(Arakan)[北方海岸地]、ペグ(Pegu)[中部に於けるイラワヂの鑛地]及テナッサリム(Tenassarim)[イラワヂ三角州の南より低下する海地及び島嶼]即ち是なり。一八八六年上緬甸即ちアヴ(Ave)の古王國は英帝國の併する所となれり。アラカン及ペグには石油坑あり、テナッサリムは錫鑛に富み、其鐵鑛は美麗なる瑞典鐵に同じ。其他少量の金、銅及極めて純良なる白堊を產す。米及木材は緬甸の主なる輸出品にして、米は一般人民の食用に供せらる。

第二章　人民

人民の概觀　印度は二地方に分たる。第一は即ち英領諸州にして第二は土着君主の諸領土なり。全地方の人口は一八九一年に二億八千八百万に上り、羅馬帝國全盛時代の人口に比すれば二倍强に當る。是等土着君主の領土は今日尙ほ全印度の約三分一を占め、其臣民は六千六百万以上に達し、殆ど全印度人民の四分一に當る。故に英領諸州の面積は全印度の三分二にして、其人口は全住民の四分の三即ち二億二千百万以上なりと知るべし。

土着諸君主の領土　土着諸君主は、英領印度總督が其朝廷に遣はせる駐劄使節

の贊助を得て其領土を支配す。是等諸君主の或者は殆ど獨立君主として統治し、他は之に反して其權力小なれども、皆其歳入及軍隊を有する點に於て封建時代の諸侯伯に異らず。其臣民に對しては生殺與奪の權ありと雖も、此間には英政府の封臣たることを承認せし條約ありて其權力を制限せり。英政府は印度の國君として、其諸侯伯が互に攻伐し、若しくは諸外國と同盟することを許さず。若し是等君主にして、其人民を虐ぐるあれば英政府は直に干渉し、之を懲戒し、必要ある場合には廢立を行ふことあり。

英領十二州　英の領土は十二州に分れ、各其知事あり。是等の知事は皆印度中央政府の命を受けて其配下を治む。中央政府には副王の稱號を有する總督あり。總督は冬其朝廷及政府をカルカッタに置き、夏に至れば海面を拔く七千尺のシムラ(Simla)〔ヒマラヤ山にあり〕に移るを例とす。印度總督は英皇の任命にかかり、マドラス及ボムベイの知事を兼ぬ。總督が他諸州の知事を任命するには、大抵印度の英國文官中功績あるものより拔擢す。

印度は僅かに二三の大市街を有するのみ。一八九一年の調査によれば、印度に

ては人口二万以上の市街に住するもの僅かに其二十分一に過ぎず。故に印度は殆ど全く農國にして、所謂市街なるもの多數は、家畜を逐ひ、鋤鍬を把り、牧穫を期する村落の集合なりとす。故に印度には農夫の密集せるを見る。市街若しくは海濱の便に富める地方の附近を除きて、農夫の一平方マイル(四段)に人を越ゆること若しくは一平方里千四百四十人を超ゆる所にては、其土地に產する牧穫物のみを以て食物を辨ぜんとして若し然らば數百万を算ふる印度の農夫は、各自平均一マイルの土地に生活せんとして若闘しつゝあり。此の如き地方にて降雨若し少量に過ぎざるときは、其人民大不幸を見るに至るべし。若し大旱魃あるに於ては餓死するもの數千人に及ぶことのみ。

人口稀薄の地方　印度の或地方にては生活困難なるほど多數の農夫群居すれども、他地方には廣漠なる沃野の尙ほ耕作者を俟てるあり。されど印度にては農夫其所有田地に固着し、家族其數を增すにつれて牧穫物の不足を告ぐるに至るも、尙ほ之を其子孫に傳ふるを例とす。故に印度の農夫にして若し從來棄てて顧みざりし沃野に移らば、其結果必ず政府の全力を擧げて講じつつある飢渴救濟策に

勝るものあらん。

人民の分布　然れども印度の農民が其世襲田地に固着するを以て一概に悉なりとはいふべからず。古代には印度の農民も雖も、大なる困難と危險とを冒して能く他の地方に移住もたりき。當時車を通ずべき道路とては甚だ多からず、且つ其間互に相隔り、多くは軍隊の通路に沿ひて存在せしのみ。其後英國の權力を印度に植ゆる前、土着の諸君主政を失して國内に騒亂起りしとき、是等の道路に盗賊出沒して、旅行することすら危險なるに至れり。加之近代印度人民の分布に與りて力ある汽車及汽船は、土着君主時代には印度に存せず、英領時代に至りて初めて印度に輸入せられたるものなり。今日にては道路、鐵道及河流船の助により、印度の農民は初めて人口過多の一地方より、尚ほ空地に富める他地方に移住するを得るに至れり。されば農民も漸次覺る所あり、現に群を成して東ベンガル、北ベンガル、アッサム及中部諸州の人煙稀なる土地に移住もつつあり。

遊牧的耕作法　印度の山地及國境地方は、借地料を要せざる土地に富めり。山民は數年間、或肥沃なる土地に其住居を定め、薪を掃ひて絶えず牧穫物を植え堅然其土地を涸らすに至りて去りて他に往き、是をして再び森林たらしむ。此の如き地方にては借地料を課せらるることなく、唯漂泊農夫の家族が酋長の保護を受くるの故を以て人頭税を課せらるるのみ。されど住民の增加につれて此遊牧的耕作法止み、新たに規律ある耕作法起れり。緬甸に於て今日尚ほ二種の耕作法を見るも、人口稠密なる印度の平原に於ては漂泊農夫また其影を留めず、其各家族が數世代間一所に定住せるを見る。

人民の四區分　歐洲の學者は從來印度の人民を二種族に分てり。ヒンヅ(Hindu)教徒及ムハムマド(Muhammad)教徒即ち是なり。然れども尚ほ精密に之を研究すれば四種族より成れるを見る。即ち第一は本土人と稱せらるる非アーリア種にして、一八七二年の最初の調査によれば、英領諸州にて約千八百万あり。第二はアーリア(即ち梵語種族)種の苗裔にして、今日ブラーマン(Brahman)及ラジプト(Rajputs)と呼ばれ、一八七二年には約千六百万あり。第三は一般にヒンヅと稱せらるる雜種の人民にして、以上二種族中主に非アーリア種より出て、一八七二年には約一億二千百万あり。第四は一〇〇〇年頃初めて印度に來りしムハムマド教徒に

して、一八七二年には四千五百万以上あり。以上を合算すれば一八七二年に於ける英國管下の人民は二億万に達す。されど其後一八九一年には二千百万を増加せり。此増加は言ふまでもなく以上四種族の繁殖によるものとす。然れども非アーリア種(即ち本土種族)の多數は、過ぐる二十年間に於てセンヅ數に改宗したるため、今やセンヅとして戸籍に錄せらるるに至れり。此四區分は土着君主の領土に於ける六千六百万の人民にもまた適用し得べし。然れども其四種族の人口各、幾何なるやは知る能はず。

有史以前の主なる二種族　前已に述べたる所によりて、印度人民の大根源が非アーリア及アーリア兩種なること明かなり。故に是れより先づ是等古代の人民を明瞭に觀察せざるべからず。今日知り得らるゝ印度最初の狀態は、以上の二種族が互に土地を爭ひしことなり。アーリア種は皮膚美麗なる人民にして、非アーリア種より後に西北の峻嶺を越えて印度に來りたるものとす。而して其自ら稱せしアーリアなる名は、高貴なる血統の義なり。アーリア種は高尚なる言語を用ゐ、好意と權力とを有する諸神を崇拜しき。印度のブラーマン及ラジプト兩種は即ち是より出でたるものとす。非アーリア種はアーリア種に比すれば劣等なる種族にして、古來より印度に永住し、アーリア種の印度に來るに及びて逐はれて山地に遁れ、或は平原に出て奴隷となりしものとす。比較的純粹なる是等二種族の苗裔は、今日に於て其數殆ど相等し、而して主に非アーリア種より出でし中間的種族は印度人民の過半を占む。

第三章　非アーリア諸族

非アーリア族　諸種族より成る印度最古の住者は其族名を有せざるが故に、總じて非アーリア族若しくは本土人と呼ばる。此種族は記錄を殘さず、實に文字若しくは或簡單なる象形文字すらも、此種族間には知られざりき。故に此種族の手に成りしものにて今日に傳はるは、拙劣なる石環、眞直なる圓石及其下の古墳にして、是即ち歐洲原始の人民と等しく死者を埋むるに用ゐたるものとす。是等の墳墓中に發見せらるる遺物によりて、吾人は單に此人種が太古遠遠の時代に、不格好なる土製の皿壺をつくりしこと、戰爭に鐵の武器を用ゐ、銅及金の裝飾を着けたる

ことを知り得るのみ。一層初代の遺物は、實に是等の墳墓建築者が原始種族との關係に於て、唯一の連鎖を成形することを證す。是等の人民以前に、印度には金屬を知らざりし諸種族ありき。是等の種族は北歐に發見せらるるものに類する石斧及他の精巧なる石器を以て狩獵及戰鬪をなせり。されど是等の種族すらも、ナルバダ(Narbada)の谷に碼瑙の小刀及燧石の武器を遺せし蠻族の繼承者なるが如し。かくて所謂本土人が其石器時代に至りて新來アーリア族のために掃蕩せられたるなり。

アーリア族の說述にかゝる非アーリア族　西部及び中部亞細亞より印度に來りし戰勝アーリア族は、印度に住せし諸種族を呼びてダシウス(Dasyus)及ダサス(Dásas)といひき。ダシウスは敵の義にしてダサスは奴隸の義なり。アーリア族は印度に比して寒冷なる北地より來り、其面色の白皙を傲りしが、遂に梵語のヴルナ(Varṇa)(色)なる語は、種族若しくは種姓を意味するに至れり。少くとも三千年乃至四千年前に、ヱダ(Veda)を編みしアーリア族の古詩人は、其尊崇せし諸神を讃して、「ダシウスを殺してアーリア族を保護したり」といひ、「黑種族をアーリア族に歸服せしめたり」といへり。是等の詩人はまたアーリア族の信ぜし、暴風雨の諸神が、獰猛なる牡牛の如く突進して黑種族を打散せし」ことをいへり。加之アーリア族は自ら其美貌を誇りて、本土人の蒙古的面貌を厭へり。ヱダの詩人はダシウス(非アーリア族)の事を記して、無鼻若しくは偃鼻といひ、また自ら其尊崇せし諸神を讃して美鼻神といへり。此後約一千餘年、アレクサンドル(Alexander)大王の印度遠征時代にも、また非アーリア族の亞細亞種族に關して其醜貌を記せしものあり。實にヱダ讃頌は印度の原始種族に對する嘲笑的形容詞に富めり。「献供防害者」、「愚昧なる肉食者」、「生肉食者」、「背律」、「不祀」、「無神」、「無儀式」の如き、以つて其一班を見るべし。後是等の蠻族が森林に遁るるに至りて、アーリア族の詩人及僧侶は之を呼ぶに「妖怪」及「惡魔」を以てし、一層忌はしき文字もて之を描きぬ。是に於て是等種族の古族名ダシウ(Dasyu)(敵)なる語が、惡靈若しくは惡魔を意味するに至りしこと、猶ほ古チュトン(Teuton)語の「敵若しくは怖きもの」(近世獨逸語のファインド(feind))が英語の惡魔(fiend)となりしが如きものあり。

半開の非アーリア族　然れども古印度の非アーリア族が、悉く野蠻なりしとは

いふべからず。富裕なるダシ、ウス(非アーリア族)あり、またエダ讃頌によれば、非アーリア族は七城九十塞を有したりきと。後アーリア族は非アーリア族と同盟せしが、印度の最も強大なる或王國は、當時實に非アーリア國王の支配せし所なり。且つや非アーリア族は宗教上の儀式を拒まず、若しくは來世の祈禱を否まざりき。古代の梵書によれば、非アーリア族は死體を飾るに信物、衣服及裝飾を以てし、是によりて來世に到り得べきを想像したりと。是等の裝飾は青銅、銅及今日石の粗造紀念物下より發掘する金の數片なりとす。アーリア族が南部印度に進みしことを歌へる梵語叙事詩ラマヤナ(Ramayana)には、非アーリア族の一酋長が其種族に關して、「疾きこと風の如く、決して敵に降らず、其面色暗綠の雲に似たり」といひしことを記せり。

現時の非アーリア族　是より印度原始の人民が今日如何にして生存せるかを記さん。非アーリア族はアーリア浸畧者のために其平原を奪はれてより山地に避難せり。是に於て印度は人種の大博物館を形成し、學者をして文化の最低度より最高度に至る諸種族を研究することを得せしむ。此博物館に於ける標本は化石若しくは枯骨と異り、現に生ける諸種族にして、各自其習慣と宗教上の儀式とを有するものなり。

アンダマン島人　最も野蠻なる印度諸種族の内に、孤立的生活を送れるアンダマン島人あり。アンダマン島人は即ちベンガル灣の非アーリア族なり。亞拉比亞人及古歐羅巴の航海者は、此種族を稱して狗面啖人鬼といひき。一八五五年アンダマン島に殖民地を建設せんがために遣はされたる英國の官吏は、裸躰なる喰人鬼の群に遭へり。是等の喰人鬼は、祭日には其身體に塗るに赤土を以てし、朋友の死を悼むときには黑泥を以てす。友情若しくは歡喜を現はすには料理の如き音を發し、また其名はたゝ共通性のもののみにして、出産前に名付けらるるものなれば、男女兩性に適用することを得べし。其神に對する唯一の觀念は、「疾病を撒布する惡靈」といへることなり。アンダマン島人は五年間其箭を雨下して英國の事業を妨害せしも、英國の官吏は殖民地の附近に小舍を構え、是等の蠻族をして雨露を凌ぎ、醫藥及食物を得せしむるの法を講じ、以て漸次之を開發するに力めぬ。

マドラスの山民　アサマライ(Anamalai)山は南部マドラスにありて多數非アー

リア族の避難所なり。長髪蓬々として容貌獰惡なるプリヤル(Puliyar)族は、藪地の産物、鼠、若しくは其他捕獲し得べき小動物を食らうて生活し、平生惡魔を崇拜せり。一定の住所なきムンダヴェル(Mundaver)族は、其家畜を逐ひて深山幽谷の間を徘徊し、洞窟若しくは小茅屋に住す。而して一年間以上一所に定住することなかりし。厚唇短軀のカデル(Reder)[山主]族は、優等種族の遺類にして狩獵を業とし、野蠻なる森林の住民に權力を振ふ。是等の山民の住する小山は巨大なる石の紀念物を以て圍繞せらる。石の紀念物は即ち古非アーリア族が墳墓の上に建てたるものとす。ナイル(Nair)族は昔時戰爭を事とせし西南印度非アーリア族の支族にして、今日尚ほ一妻多夫の古制度を維持せり。此制度に從へば一婦は數夫の妻たることを得るものにして、父の遺產は其子に傳はらず、却て其姉妹の子に頒たるるものとす。マドラス山地と反對の方向にあるヒマラヤ山地の非アーリア族中にもまた此一妻多夫の制度を見ることを得。

ヴィンドヤ山脈の非アーリア族　北印度と南印度とを分てる山脈には多數の蠻族住せり。其内最も著名なるはビル(Bhil)族にして、ナルバダ河の北ウダイプル

udaipur)州より南ボムベー領のカンデシ(Khandesh)に至るヴィンドヤ山に住し、綿羊及山羊の群を逐ひて常に林藪より成れる高地を徘徊し、時には狩獵をなし、若しくは森林に生ずる天然物を得て生活せり。ボンガイ州に於はるビル族は諸所に散在する小舍に住し、其敵をして一擧に全村落を襲擊することを得ざらしむ。若し一家族敵のために捕へらるるときは、其叫聲忽にして殘餘の全家族に警を傳へ、數分時の間に咄壁丘陵に起り、半裸體の蠻族各武器を手にして侵略者を擺蕩せんがために會合す。ビル族は英國の統治以前に遠近の諸村落を刼掠して附近の住民を脅せしかば、其當時の主權者は常に之を虐殺して其刼掠に報いたりき。一八一八年英國の東印度會社はボムベイ領に屬するカンデシ附近の地を占領せり。然れども其第一回の遠征軍はビル族を擊ちて敗北し、兵士の一半は藪地の熱病のために斃れぬ。其後疾かにサー・ジェームス・アウトラム(Sir James Outram)は是等のビル族を服せり。アウトラムはビル族を撫慰して是と交を結び、共に虎狩をなしき。而して其虎狩に絶えず伴ひしビル族の九戰士は、此種族中初めて英國のために戰しなるものにして、此後一八二七年には、ビル族の兵籍に編入せられたるもの六百

に及び能く英政府のために戰ふまで。是等の忠勇なるビル族は、是に至て其附近の住民を劫掠することを廢し、大に英國人の信用を得て、カシヤ支廳に於ける警吏若しくは府廳の番兵に任ぜられぬ。

中部諸州の非アーリア族　中部諸州には非アーリア族多數を占め、地方によりては住民の一半非アーリア族なる所あり。是等の內にて最も重要なるは、多少文明の域に進めるゴンド(Gond)族なりとす。然れども尙ほ森林に住する蠻族ありて狩獵を業とし、中には今日尙ほ石鏃を用ゐるものあり。是等の蠻族は極めて强き弓を有し、足にて之を支へ、手にて之を絞り能く林間に鹿を射殺す。(マリ Mari)族は外國人を見れば草葺の小舍を棄て遁走す。故に曾て土着君主の使節が、主として數地の產物より成る其貢物を收めんがために其住地に至りしとき、慎みて其小舍に入ることをなさず、唯其外にて鼓を鳴らし、忽ち其身を匿せり。是に於てマリ族は皆其小舍より出來り、指定地に其貢物をおきて再び其小舍に潛みたりといふ。

木葉を着するオリッサの小種族　東北のオリッサ(Orissa)進貢州には約一方の小蠻種族ありて、ジュアング(Juang)族若しくはパッタ(Patta)族と呼ばる。蓋し木葉を

着する種族の義なり。此種族の婦女子は二十年前まで身に一布片を着けず、唯其腰の周圍に一束の木葉を結びたる二三の念珠帶を纏ひしのみ。然るに一八七七年、英國の官吏は其一族を召集して說諭する所あり、其婦女子に與ふるに一條の布片を以てせしかば、婦女子は直に之を纏ひ、列をなして英國官吏の前を過ぎ各〻頓首して其恩人を拜し、遂に從來其唯一の衣服たりし木葉を集めて之を燒きたりといふ。

ヒマラヤ種族　印度の北境に進めば、ヒマラヤの傾斜地及山嶺に野蠻なる非アーリア族の多數住するを見ん。アッサム山民の或者は、里數によりて遠近の距離を表することを知らず、唯途に嚙みゆく烟草若しくは檳榔樹の葉の數によりて其旅程の長さを知るのみ。是等の山民は一般に職業を嫌ひ、性質獰惡、身幹短小、而色漆黑にして平生粗食し、昔時にはアッサムの谷に於ける家屋を刼掠して僅かに其食物を得たりき。今日英國人は此種族に與ふるに、毎年布、鋤及穀物を以てし、一種の警吏とし、國境の平和を維持せしむ。アッサム山民の與の名は其昔日の野蠻的生活を證明す。即ち其アカ(Aka)族は二部落に分れ、其名が文字上一は、千箇の籠に食ら

ゴ種族」中は「綿畑に匿伏する盜賊」の義なるが如き是なり。[illegible]一般に[illegible]稍進歩せる非アーリア族中故に是等本土種族の多數は、其進歩發達の程度に於て、三千餘年ヱダ詩人の歌ひしものと今日尚ほ同一の狀態にあるものとす。然れども中には文明の域に進み、充分發達せし社會を造れるものなきにあらず。是等の高等種族は、尚ほ未だ野蠻の狀態を脱せざる他諸種族と共に印度國内至る所に散在せり。されど爰に其内の二種族につきて畧述するに止めん。二種族とは即ちサンタル(Santal)族及カンド(Kandh)族是なり。

サンタル族　サンタル族は下ベンガルに於けるガンガ河畔に接する丘陵に住し、平原の人民とは全然分離して別に其村落を造れり。英國の官吏が初めて調査せしときには、サンタル族は尚ほ未だ狩獵を業とする森林種族の習慣を脱せずと雖も、一たび鋤鍬の用を知りてより熟練なる農夫となれり。其小村落には各、首長ありて支配す。而して此首長は村落創始者の末裔なりと想像せらる。首長の下には副首長及書吏あり、之を輔佐す。小村落の見童は其結婚期に達するまで、各、其首長及副首長の嚴重なる監督を受く。サンタル族は其一族に關してヒンヅ種族の如き殘忍なる區別を知らず。唯其兩親の七子を以て其一族となすのみ。燕飲、狩獵、崇拜には村落を擧げて是に與かり、種族の結合極めて堅固にして、放逐は其唯一の刑罰なり。大罪人は村落の「水及火」より絶ち、遠地に之を棄て、小罪人は種族會議を開きて之を免ず。罪人免ぜらるるときは其族人に對して酒食を饗せざるべからず。

サンタルの禮法　サンタル族は兒女の許嫁を許さず。故に其男女は大抵十五歳より十七歳に至り、兩々自ら其配偶を選擇し得るに及びて初めて婚禮す。婚禮の終に、女子の親戚にては其家の杵にて木炭を碎き、水を是に注ぎて其火を消し、山にて以て從來家族たりし關係を絶つの意を示す。サンタル族は婚女子を尊重し、子なき時の外は二婦を納れず。死者あれば之を燒きて、其頭蓋骨の三片を神河ダモダル(Damodar)に投ずる習なり。

サンタルの宗教　サンタル族はアーリア族なるヱダ詩人の尊崇せしが如き、光明及好意の諸神を知らざりき。況んや全人類を監視する全智全能の一神に於てをや。サンタル族はヒンヅ教徒及ムハムマド教徒以前に其郷地を驅逐せられ、人

問を審することなき强力なる一現體の存在を覺り得ざりき。曾て能辯なる一傳導師が基督教の神の全能を說きしに、一サンタルは是に向ひて、若しさる强者が吾を喰はば如何すべきと問ひしといふ。サンタル族は實に惡鬼地上に充滿せりと信じ、是がために山羊、鶏及雞を犧牲として其害を免るるに力む。サンタル族の信ずる所によれば、世には祖先の幽靈、河の精靈、林の精靈、泉の惡鬼、山の惡鬼、其他目に見るべからざる無數の現體ありて、是に奉仕すること鄭重ならざれば其害を受くと。而してサンタル族は是等の精靈及惡鬼を以て、村落を蔽ふ古木サル(Sal)に住するものとせり。或小村落にては村民あらゆる樹木の周圍に舞踏し、依て以て村落の精靈の住所を逸せざるに力む。

サンタルの歷史　サンタル族は殆ど前世紀の終まで、附近の平原を刼掠して其生を送りしが、英國の支配を受くるに及びて平和なる耕作者となれり。サンタル族と低地のヒンヅ種族との紛爭を止めむがために、英國の官吏は一八三二年石の境界標を建てぬ。然れどもヒンヅ種族の貸金業者は疾かにサンタル族の住地に入込み、爲めに素朴なる山民は瞬時にして負債の淵に沈めり。而かもサンタル族の血族を愛するの心深きや、其住地を去りて他に行くことをなさず、遂に貸金業者の奴隸となるに至る。憐むべきサンタル族は年々貸主に其全收穫物を納れ、自ら其家族を支ふるに必要なる食物のみを收む。父若し死するときは債務は其子に歸す。何となればサンタル族の名譽心は、子をして已むなく父の債務を繼がしむればなり。一八四八年には、負務の到底果すべからざるに失望し、三ヶ村を擧げて數地に遁れたることあり。次いて一八五五年には、三万のサンタル族相率ゐてカルカッタに至り、其負債に關する事情を總督に訴へんがために、其弓矢を携へて發足せり。然るに初數日間は規律を守りしも、長途旅行の間、飢餓にせまりしものは近隣を劫掠して遂に英國の警吏と衝突を起し、發足一週日にして武裝せる叛徒と變じぬ。然れども幸に血を見るに至らずして事平穩に歸し、其哀訴は愼重に聽取せられ、英國官吏の直接的監督の下に簡單なる政治組織を建つることを許されぬ。今日に於てはサンタル族は富裕なる人民なり。然れども其天性の怯懦と迷信とは、是をして一切の新事物を恐るゝに至らしめ、一八八一年には、武器を手にして戶籍の調査を拒みたるものもありき。

カンド族若しくはコンド族　カンド族若しくはコンド(Kondh)族(山民の義)は、人口約十萬を有する強大種族にして、オリッサ海岸より起る斷崖及森林山脈に住す。其政治組織は純然たる家長政治にして、一家族は嚴に父のために支配せらる。父の存命中は其子成人するも財産を有すること能はず、唯其妻子と共に父の家に住し、一家族皆祖母の調理にかゝる普通の食物を食ふのみ。カンド族の首長は通常家長家の長子にして、長子若し其職に堪へざるときは之を廢し、其叔父若しくは弟是に代るものとす。此首長は種族中の故老と協議したる後にあらざれば何事をも處理すること能はず。

カンド族の戰爭及刑罰　一八三五年英國が寛大なる法律を布けるまで、カンド族は殺人犯者を罰するに殘酷を極め、死者の同族男子は、殺人犯者が穀物若しくは家畜を拂ひて謝意を表するにあらざれば、必ず之を殺して以て復讐したりき。人を傷けたるものは其傷の全治するまで之を養はざるべからず。人の物を盜みたるものは必ず之を返し、然らざれば其價を償ふべきものとす。然れども再犯者は種族に放逐せらる。放逐は即ちカンド族の刑罰中最も大なるものなり。爭論は決鬪若しくは武裝團體の交戰によりて決す。時には沸騰せる油を探り、時には燃燒せる鐵を把り、時には蟻蛭若しくは虎趾若しくは蜥蜴の皮にて嚴肅なる誓をなし、是によりて其是非曲直を決することあり。父死して子なければ其所有地は他の男性首長に、頒たる何となれば女子若しくは其力所有地を守ること能はざるものは、一切所有權なければなり。

カンドの農業　カンド族の耕作法は、非アーリア族の漂泊的農業とセンヅ種族の殖民的農業との中間に位する一階級を代表するものなり。カンド族は非アーリア族の如く、薮地を燒きて忽ち其土地を涸し、數年にして他に移るが如きことをなさず、若しくはセンヅ種族の如く、父より子に　へて常に同一土地を耕すが如きことをなさず、土地の漸次涸るるに至りて初めて他に移るものとす。十四年毎に其村落の在所を他に移すは、或カンド殖民地の規則なり。

カンドの强奪結婚　カンド族の結婚は饗宴中暴力を以て其新婦を强奪し去るより成る。男子の父は女子のために相應の價を拂ひ、通常其子より數歲の年長者たる强壯なる女子を撰擇す。故にカンド族の女子は約十四歲、男子は約十歲にし

て結婚の約を成すものとす。妻たるべき女子は、其夫たるべき男子が自已と同拔し得る年齢に達するまで、養父の家に婢として事へ、漸次其夫に對して大權力を振ふに至る。カンド族は妻の承諾を得るにあらざれば、妻の存命中他の女子を納ること能はず。

カンド村落の奴隸。カンド族は單に農業と戰爭とを事とし、他一切の職業を嫌へり。然れどもカンドの各村には、劣等種族の住する一列の茅舍ありて是に附着す。是等の憐むべき劣等種族は土地を所有すること能はず、戰爭に從ふこと能はず、若しくは崇拜に加はること能はず、唯小舍にて賤業に從ひ、鍛工、陶工、織布者、牧畜者、及醸酒者の如き世襲家族のために役せらる。カンド族は是等の劣等種族を厚遇し、饗宴あれば其酒食の一部分を是に分與す。然れども劣等種族は社會に交はることを許されず。カンド族は自ら劣等種族の職業に從ひ、若しくは其調理せる食物を食ふことを以て大恥辱と思へり。是等の劣等種族は、カンド族がアーリア族のために平原を逐はれしとき、途次山中に於て發見せしものにして、蓋し蠻族の殘有者ならんと。

カンド族の人身供養　カンド族が種族神、家族神、其他多數の惡靈及惡鬼を信ずることはサンタル族に同じ。然れども其最大最高の神は地神にして、自然の生產力を代表するものなり。毎年播種期及收獲期に、また隨時の災厄に、地神は人身の供養を要求す。地神に供養すべき犧牲を平原より奪ひきたるは、即ちカンド村落に附着する劣等種族の任務なり。犧牲たることを免れ得るものは唯ブラーマン及カンドの二姓にして、犧牲は古より高價に購ふ定めなり。犧牲の村落に伴はれきたるや、各戸にて之を歡迎し、是に美酒佳肴を饗し、其最後の日まで款待至らざるなし。次いで祭日至るや、嚴肅なる儀式を以て地神に供養す。此時カンド族は犧牲に告げて曰く、「吾等は高價に汝を購へり。吾等に何等の罪なし」と。犧牲の血と肉とは村内の土地に分たる。

英國治下のカンド族　一八三五年カンド族は英國の治下に歸し人身供養の習慣は止みぬ。道路は是に於て其丘陵に通じ、市場は新たに成れり。されど英國の官吏はなるべく其舊來の習慣に干渉せず。カンドは是に至て平和なる富裕種族となれり。

非アーリア族の三族系　本土種族と稱せらるる非アーリア族は、アーリア族の侵略者が三千餘年前已に印度に發見せしものにして、今日尚ほ有史以前に於ける種族の片影として印度に散在するものとす。是等の原始的種族は抑も何れより來れりや。是等の人民には年代記の見るべきものあらず、其傳說の如きも殆ど何等の傳ふべきものなし。然れども其言語より察すれば、其三族系に歸するを見る。即ち第一は東北の峻嶺より印度に來れるチベット・ブルマ族にして、今日尚ほヒマラヤ山麓に住し、第二は同じく東北の峻嶺よりベンガルに來りしと思はるるコラリア (Kolaria) 族にして、主として印度の南半を蔽ふ中部臺地の東北山脈に住し、第三は反對に西北の峻嶺よりインジアに進み來りしと思はるるドラヴィダ (Dravida) 族にして、今日尚ほ印度の南端コモリン岬に至る三面臺地の南部に住するものの是なり。

非アーリア族の性格　非アーリア族は一般に、之を御すること法を得ば、信實、忠義及懇篤なり。山地に住するものは善良なる兵士となすべし。平原に住する盜賊種族も機敏なる警吏となすことを得。マドラスの非アーリア族も兵を出して英國の南印度征服を援けき。また其或者は英國をしてベンガルを略せしめしラッシイ (Plassey) の役に從へり。則勇なるヒマラヤの非アーリア族グルカ (Gurkha) は、今日英國の印度軍隊中最も勇敢なる聯隊に屬し、アフガニスタンより緬甸に及びし近來の戰爭に勇名を轟せり。

非アーリア族の將來　世界諸國に於て、蠻族は太抵優等種族のために鎭壓せられ若しくは殲滅せられつゝあり。メキシコ (Mexico) 及ペルー (Peru) の原始的人民、北亞米利加の印度人、濠太利の本土人及ニュー・ジーランド (New Zealand) の一部分を見て之を知るべし。然れども印度の非アーリア族は英國の配下にありて却て繁榮しつつあり。非アーリア族の住する山地及藪地を開きて造りし山の市場及道路は、非アーリア族に示すに生活の新方法を以てし、一八七二年及一八八一年の戶籍調査は、共に其子孫が他印度諸種族より多數なる證示せり。非アーリア族の富めるものはヒンゾ種族の習慣を採用し、其多數は年ありて敬の信者となり、別にまた基督教徒となるものあり。故に二三世代を經過せば、非アーリア族にも亦其初代の習慣及び儀式を固執するもの極めて少きに至らん。一八八一年及一

八九二年の調査に依れば、各等姓のもの種族中に非アーリア族の多數を含み、純粋なる本土種族の數は前に述べたる一八七三年の調査數かなり多數よりも遙かに減少せるを見る。是れ乎ば本土種族がセルツ種族の社會に交はるに至りしと、半ば一八七二年の種族分類が、一八八一年及一八九二年に於ける調査よりも、本土種族を表明すること充分なりしとに歸するものなり。

第四章　印度に於けるアーリア族

アーリア族の族系　初代に西北より來りて印度原始の人民中に侵入せし強盛なる種族あり。此種族は世界歴史の上に大關係を有するアーリア即ちインド・ゲルマニ系に屬するものにして、ブラーマンラジプト、及び獨逸人、英國民等は共に是より出でたるものとす。此種族の最初の住所は西部亞細亞なりしが如し。西部亞細亞の幕營地よりして、此種族の一支族は東に進み、他は遠く西に進めり。西方支族の一部はアテネス(Athene)及びスパルタ(Sparta)等を開きてギリシア國民となり、他の一部はイタリヤに進みて七丘に市府を創め、よりてローマ帝國の基を開けり。同一種族の遠隔なる殖民は有史以前のイスパニア銀坑を發掘せり。加之古代の英國にもアーリア族の殖民者が樹枝にて編める獨木舟に乘りて漁業をなし、またコルンウオール(Cornwall)の錫坑を發掘せり。此間にアーリア系の一支族は、亞細亞に於けるこの原始的住所より東に進み、有力なる數隊はヒマラヤの峻嶺を踰えてプンジアブに進み、漸次蔓延してブラーマン及びラヂプト等諸族の祖先となれり。

アーリア族の歐亞兩洲初代種族征服　アーリア族の支族は東西共に其土地先有者たる初代住民を壓倒せり。古代歐羅巴の歴史は地中海沿岸に於けるアーリア族殖民地の物語にして、廣義にいふ近世文明とは必竟アーリア西方支族の文明を指すに過ぎざるのみ。印度の歴史は是に反して、印度に殖民せしアーリア東方支族の歴史なりとす。

[illegible]原始的郷地に於けるアーリア族　太古西部亞細亞に在りしアーリア諸部族に關して判明せるもの甚だ少し。學者は歐羅巴及び印度に於けるアーリア苗裔の間に存する言語よりして、太古アーリア族が其家畜と共に草地の高原を徘徊し、時

には獣物の牧畜を業とするが為に長き間一所に滞在せざるを得ざりき。是等初代の諸部族は家畜を飼ふも、穀を知らず、機織裁縫の術に通じ、衣を着ゆ、食物を調理して食ふことを知りき。アーリア族は比較的溫帶地方に在りて勤勉なる生活をなせしが、其東西南支族の郷地を去りて第一に感ぜしものは、寒冷といへる感覺なりしが如し。

歐羅巴及び印度の國語はアーリア語の變形に過ぎず。ギリシア、ローマ、英國、及印度等諸國民の祖先は共に西部亞細亞に住し、同一國語を使用し、同一神祇を崇拜したりき。歐羅巴語及び印度語は一見甚だ異なるが如きも、共に是れアーリア原語の形を變じたるものに過ぎず。家族生活の普通語を見ば殊に其然る所以を知らん。ガンガ、チベル(Tiber)、テームス(Thames)の河畔に於て用ゐらるる父母、兄弟、姉妹及び親族の名稱は、アーリア語たるに於て相同じ。英語の嬢子即ち daughter 及び獨逸語の tochter なる語は、元來アーリア語の dugh より出でたるものにして、サンスクリット語にては duhi(牛乳を搾ること)なり。思ふに daughter なる語は、原始的アーリア族の一家に於て、女子が牛乳を搾りし時代の語形を存するものなる

ん。

歐羅巴及び印度宗教の起原は相同じ。歐羅巴及び印度の古宗教はその起原を同うせり。思ふに是等の宗教は或程度まで神話なりしを、歐羅巴人の祖先が印度人の祖先と共に亞細亞に在りしとき傳へたるものならん。加之吠陀(Veda)の諸神はギリシア及びローマの諸神にして、印度のブラーマンが神をデヴ(deva)といひ、歐羅巴のキリスト教徒が神をデウス(deus)と稱するは皆デヴ(deva)[輝くもの]なる古アーリア語より出でたるものなり、此は更に後章に至りて説明せん。

印度アーリア族の進軍　吠陀讃頌はアーリアの印度支族が東南に進みてその新郷土を開きしことを明かにするものにして、最初の歌謠はアーリア族の尚ほカイバル峠の北に在りしときの事を記し、後代の歌謠はガンガ地方に來りしときの事を記す。アーリア人が東方に征服を進めし次第は、吠陀の書に於て殆ど遺漏なく是を見ることを得べし。プンジアブの五河よりする水の供給は、アーリア人をして半遊牧の古狀態より漸次規律ある農夫の社會を組織するに至らしめき。されば吠陀詩人はアーリア人をして大進歩をなさしめたる是等の河流を讃美して、

「吾等是を聞けり、インドス河は富の惠與者として著るしきを。その水は實に吾等の廣野を肥沃ならしむ」と歌へり。アーリア族はまたヒマラヤ山の西南の峠を踰えて印度にきたり、長き間其南麓に住せしかば、ヒマラヤ山は其記憶に銘すること甚だ深かりき。故に吠陀詩人は是を讃美して「白雪皚々たる山脈、海及び河はその偉大を表す」と歌ひき。印度のアーリア人は決してその北方の鄕土を忘れず。思へらく、彼處には神及び神聖なる唱歌者住み能辯天より人間に下ると。また思へらく、ヒマラヤ山の高處には神及び英雄の樂園ありて仁慈なるもの及び勇敢なるものは長へに此に安息すと。

リグ・ヴェダ・リグ・ヴェダ(Rig-Veda)はブンジアブに於ける初代アーリア殖民地の文學的大紀念物なり。されどその成りし年代に至ては明かならず印度人は、何等の證據なくして、此詩集が世界の初め若しくは少くとも前三〇〇一年頃已に世に存したりきと信ぜり。歐羅巴の學者は天文學的論據よりして、その編輯が前一四〇〇年頃なりしことを推測す。然れども是れとて確實とすべからざるや論なし。故に吾人の今日知り得る所は、吠陀の宗教が前第六世紀に佛教の起りし以前已に久しく世に行はれしといふ一事に過ぎざるのみ。リグ・ヴェダは主として神德を頌せし千十七首の古短詩を輯めたるものにして一万五百八十句を包含せり。此詩集はもとインドス河畔のアーリア人が數多の部族に分れ、時には相攻伐し、時には相連合して在來の黑種族と戰ひしことを述ぶ。

印度に於けるアーリア諸族の活動　に關する詳細及び其風俗習慣は印度古代史の全部を占むるものなるを以て、更に本史に入りて詳述せん。

第五章　國名の起源

印度國名の起源　印度の國名はその西北を流るゝ大河の名信度(シンド)(Sind)即ちインドス河より出でたり。初めアーリア人の南下して信度河の流域に來るや、その河流の大にして海(シンドゥス)(Sindhus)に似たるを以てこれを信度と呼びき。蓋しシンドゥスはサンスクリト語のシアンド(Syand)即ち流るゝなる語根より出でしならん。かくてその河の流域をも信度と稱し、その住民をシンダヴァス(Sindhavas)といひ、また七信度(サプタシンドゥ)(Sapta-Sindhavas)と稱せり。その深流七あるを以てこれを七信度

波斯人の稱呼　古代の波斯人は此サ行の齒音をハ行の喉音に轉じ、センド(Zend)語にてこれをヘンヅ(Hendu)及びハプタ・ヘンヅ(Hapta-Hendu)といひ、またその人民をヒンヅ(Hindhu)、その國をヒンヅスタン(Hindustan)と稱し、ヒンヅスタンとはヒンヅの住所の義なり。

ギリシア人の稱呼　これを波斯人に聞けるギリシア人殊にヘロドトス(Herodotos)はその齒音を轉じて國名をインヂア(India)、河をインドス(Indos)に訛まり人民をインドイ(Indoi)と稱せり。また波斯王ダリオス(Darios)の碑銘中には印度河流域の人民をイヅス(Idhus)と記し、紅海航行記(Periplus Maris Erythoraei)にはシントス(Sinthos)と記せり。

ローマ人の稱呼　ローマの史家プリニウス(Plinius)は「住民はインヅスをシンヅスと稱す(Indus incolis Sindus appelatus)」といひ、またローマの詩人ヴルギリウス(Virgilius)は「印度は象牙を輸す(India mittit ebur)」といへり。

支那人の稱呼　支那人が身毒、申毒、眞定、信度、辛頭、捐毒、賢豆、天竺、天豆、天定、印度等の文字を當てたるは、蓋し波斯人及びギリシア人の國せる中央亞細亞地方より將來せるものならん。即ち身毒、申毒、眞定、信度、辛頭はシンドより出て、捐毒、賢豆はシンドより轉じ、印度はインドに當てたるものなり。然るに古來支那には印度の國號を以て月(Chandora)の義となし或は因陀羅神(Indora)の名より出でたりとする傳說あれども、言語學上根據を有せざる所の誤認なりとす。

印度人の稱呼　古代の印度人は印度全部をバーラタ(Bârata)或はバーラタ・ヴルシア(Vârata Varsha)と稱せり、而してバーラタは月種の王にして、曾て印度の大部分を領せし人の名、ヴルシアは國の義なり。また摩拏法典(Manava Dharmasâstra)中には此國を總稱してアーリア住所(Arya-avartha)といへり。

第二篇　古代史

第一期　吠陀時代（インドス河畔の殖民時代……前二〇〇〇―一四〇〇年）

第六章　土著との戰爭

吠陀時代の歴史はプンジャブ征服の歴史なり、この時代の戰爭につきては、首尾完備せる記錄の徴すべきものなしと雖も、幸にしてリグ・ヴェダのなほ世に存するあり、これによりてプンジャブ征服者の武勇を知るに難からず。これ等の征服者は即ち印度國民の祖先にして、原始的森林を開き、黑面の土著を驅逐して文明を傳播し、世々その領土及び宗教を擴張せり。當時アーリア人は、高尚なる文明、純潔なる宗教及び征服の慾望を抱きてプンジャブに來り、無徑の森林を開き、城塞を毀ち、沼澤を堰めて、美麗なる都市村落を創し、暗黑なる大陸をして文明的種族の住地たるに適せしめ、高潔なる社會及び政府を組織せり。こゝに於て土著はその地位を失ひ、勇をふるひてその城塞に防戰し、或は戰死し、或は僻遠荒蕪の地に遁れて僅にその餘命を繋げり。

雨神因陀羅（Indra）はプンジャブ征服者の崇拜せし軍神にして、その讃頌にはダシュ（Dasiu）或はダサ（Dasa）即ち土著との戰爭に、征服者の冥助をこれに驅りたるもの多し。左の讃頌を見れば當時の戰爭を知るべきものあり。

因陀羅は衆の祈禱を容れ、疾きこと風の如きその伴侶を伴ひ、その電光を從して、地上のダシュ及びシミュー（Simyu）を滅ぼし、その土地をその崇拜者たる白人に分てり。因陀羅は太陽をして光輝を發せしめ、また雨ふらしし。（Rig Veda, I. 100, 18.）

因陀羅はその電光を從し、その勇をふるひて、ダシュの諸都市を破壞し、その意の向ふ所に出沒して、よく妨ぐるものあるなし。嗚、電光の主よ、卿は吾等の讃頌を受け、卿の武器を以てダシュを擊ち、アーリアの勇名を揚げよ。（Rig Veda, I. 103, 3.）

因陀羅は戰爭にその崇拜者たるアーリアを保護す。常にその崇拜者を保護する彼は、あらゆる戰爭にまたこれを保護す。彼はアーリアのために献供を行は

ざる諸種族を征服す。彼は黑面の敵を皮剝ぎ、これを殺し、これを灰にす。彼は有害殘忍なる諸種族を燒殺す。

(Rig Veda, I. 130, 8.)

噫、敵の殄滅者よ、かの掠奪隊の首領を一括し、卿の廣き足を以て彼等を壓殺せよ。卿の足は廣し。

噫、因陀羅よ、かの掠奪隊を殄滅せよ。彼等を廣大醜穢なる無底坑に投ぜよ。

噫、因陀羅よ、卿は三たび掠奪隊を殄滅せり。民こゝに於て卿の偉勳を讃美す。然れどもこれ卿の武勇に於て何かあらん。

(Rig Veda, I. 133, 2-4.)

噫、因陀羅よ、リシ(Rishi)即ち僧侶はなほ卿の武勳を讃美す。卿は多數の掠奪者を滅ぼして戰爭を終結せしめたり。卿は神を崇拜せざる敵の諸都市を破壞せり。卿は神を崇拜せざる敵の武器を挫けり。

(Rig Veda, I. 174, 7,8.)

以上の讃頌を見れば、アーリアとダシウとはその宗教及び宗教的儀式を異にし、兩者の敵意、これがために益激烈を加へたるが如し。アーリア人はもと自然の光明神を信じ、日毎に天空、太陽、火及び暴風雨に獻供を行ひ、その征服地に必ずその崇拜と崇拜的儀式とを傳へたり。然るにプンジャブのダシウはこの種の神を信せず、この種の獻供を行はず。アーリア人の信仰に從へば、この不信仰は即ちその滅亡を招きたる主因なりとす。アーリア人は屢々その軍神に祈禱し誠意誠心不信仰者の殄滅に冥助を與へんことを乞へり。

リグ・ヴェダの讃頌には、狡猾なる蠻族の名稱諸所に散見す。當時これ等の蠻族は勇をふるひてアーリア人に抗し、平生城塞若しくは沼澤に潛み、時にその巢窟をいでてアーリア殖民者の財寶を掠奪せり。

クヤヴ(Kuyava)は他の富の香を嗅ぎてこれを掠奪す。彼等は水に生活し、その清淨を汚瀆す。彼等の妻妾は河流に浴す。彼等願はくはシファ(Sifa)河の水底に溺れんことを。

アユ(Ayu)は知るべからざる城塞の水に生活す。彼等は沿々たる河流の間に築く。アンジャシ(Anjasi)クリシ(Kulisi)、ヰラパトニ(Virapatni)の諸河は、その水を以て彼等を保護す。

(Rig Veda, I. 104, 3, 4.)

疾きこと風の如きクリシナ(Krishna)は、一万の軍隊を率ゐてアンスマチ(Ausumati)河岸にあり。賢なる因陀羅は、この酋長を罰せんがためにその掠奪隊を殄

滅せり。

因陀羅いはく、吾は疾きこと風の如きクリシナを見き。彼は雲にかくるゝ日の如く、アンスマチ河の附近に潜めり。噫マルッよ、吾は汝の戰に加はり彼を滅ぼさんことを願ふと。

疾きこと風の如きクリシナは、時に日の雲を出づるが如く、アンスマチ河岸に現れたり。因陀羅はブリハスパチ (Brihaspati) をひきてその同盟となし、輕捷不信仰の軍隊を殄滅せり。 (Rig Veda, VIII, 96, 13-15.)

以上の讃頌によりて畧ぼ當時の戰爭を想見することを得べし。この戰爭に、黑面の戰士はアーリア人のために破られ、その家族を率ゐて無徑の森林及び沼澤に遁れ、遂に美麗なる村落に住するアーリア殖民の富を聞き、忽然鯨波をあげてその村落を襲ひ、その財寶を掠めて忽然その影を隱せり。アーリア殖民はこの種の襲擊に堪ゆること能はず、乃ち、荊棘を拓き、河流を渡りて、屢々遠征を企て、巢窟を擊ちてこれを滅ぼし、森林を化して耕土となし、沼澤を埋めて殖民地を創し、漸次東方に進みてプンジャブの全部に殖民せり。

當時土著の最も恐れたるものは、アーリア人の使役せる軍馬なりしが如し。これ恰もアメリカのインド人が、イスパニア人の軍馬を見て驚きおそれ、戟をすてゝ遁れたるに似たり。ダヂクラ (Dadhikrā) (神聖なる軍馬の義)の讃頌はこれを語して甚だ興味あり。

民の盜賊のためにその衣服を奪はれて呼ぶが如く、敵はダヂクラを見て呼號す。鳥の飢えたる鷹の飛下せるを見て鳴くが如く、敵は財寶、家畜及び食物を求めて疾走するダヂクラを見て呼號す。

敵は馳驅蹂躪電光の如きダヂクラを恐る。彼は一千の敵を走らすれば、意氣益旺にして制すべからざるに至る。 (Rig Veda, IV. 38, 5, 8.)

軍鼓もまた土著の甚だ恐れたる所なり。

軍鼓高く響きて戰機の熟せるを報ず。吾等の諸將は馬に跨りて指揮せり。噫、因陀羅よ、兵車にたちて戰ふ吾等の戰士をして勝利を得せしめよ。 (Rig Veda, VI. 47.)

他の讃頌には、當時征服者の用ゐたる武器を記するものあり。これ甚だ歴史的價

値を有するものとす。

戰近づけば戰士鎧を着けて進み、雲の如く現はる、戰士よ、卿等の生命をして亡びざらしめよ、勝利を得せしめよ。卿等の鎧をして卿等を保護せしめよ。

吾等は弓を以て家畜を獲ん。吾等は弓を以て勝利を獲ん。吾等は弓を以て勇猛倨傲なる敵を征服せん。弓よ願はくは敵の計畧を破らんことを。吾等は弓を以て吾等の征服をあらゆる方面に及ぼさん。

弓を絞ればその絃は弓手の耳に接近す。絃は彼に慰藉の語を囁き、また音をなして矢を抱くこと、恰かも愛婦のその子を抱くに似たり。

箙は親の如く、矢はその子の如し。箙は音をなして戰士の背にあり、戰に矢を給してその敵を征服す。

老錬なる兵車の御者はその車上にたち、その欲する所にその馬を驅る。驅は後にありて馬を制す。彼等の光榮を歌へ。

馬はその蹄を以て砂塵をあげ、屢々高く嘶き、その兵車をひきて戰場に疾走す。

彼等は退くことなく、その蹄に掠奪を事とする敵を蹂躙す。(Big Veda, VI. 75.)

アーリア人は兵車を驅り、尖端に鹿角若しくは鐵を用ゐし矢を負ひ、鎧を着け、奮戰して土蕃を擊退せり。他の讃頌によれば兜、楯、投槍、斧及び劍も、また當時アーリア戰士の用ゐたる所なるが如し。而してこれ等の戰士は、啻だに土蕃戰爭に戰ひたるのみならず、また屢々その種族間の戰爭に從ひ、兵車、馬、鎧、矢、投槍によりて戰ひたること、ホメロスの歌へるトロイ戰爭に似たるものあり。勇敢なるアーリア人は、絶えず土蕃と戰ひしも、その間、その種類及び酋長、互に權力を爭ひて嫉視反目し、紛爭絶えず。故にその全く土蕃を征服し、若しくは驅逐して外患なきに及びては、その紛爭益激甚を致し、種族は種族と爭ひ、部落は部落と戰へり。リグ・ヴェダによれば、當時印度の十王、その兵を合せて大英雄スダス(Sudás)を擊ち、却てその破る所となれりといふ。これを以て、スダスの朝廷の僧侶、白衣のトリツ(Tritsu)或はヴシシタ(Vasishtha)は、常にその大王の戰勝を誇り、その紀念日に祝していはく、

噫、指導者因陀羅及び婆樓那(Varuna)よ、卿の崇拜者は卿の冥助に依賴し、家畜を獲んがために、武裝して東方に進めり。因陀羅及び婆樓那よ、卿の敵ダサ或はアーリアを撲滅してスダスを保護せよ。

衆その旗を翻して戰ふ所、戰の吾等に利ならざる所、衆の天空を望みて戰慄する所、噫、因陀羅及び婆樓那よ、時に吾等を助け、吾等を慰めよ。

噫、因陀羅及び婆樓那よ、地極兵塵に沒し、叫喚天に達す。敵軍今や近づけり。噫、常に吾等の祈禱に聽く因陀羅及び婆樓那よ、近く來りて吾等を保護せよ。

噫、因陀羅及び婆樓那よ、卿は頑强なるベダ (Bheda) を滅ぼしてスダスを救へり。卿はトリツの祈禱に聽けり。彼等僧侶の求むる所、戰に果實を結べり。

噫、因陀羅及び婆樓那よ、敵の武器は四面より吾等を攻擊す。敵は掠奪者を以て吾等を圍み、吾等を攻擊す。卿は兩種の富の主なり。戰に當りて吾等を救へ。

兩軍は戰に當りて富を因陀羅及び婆樓那に請へり。然れどもこの戰に、卿は十王の攻擊を受くるスダス及びトリツを保護せり。

噫、因陀羅及び婆樓那よ、獻供を行はざる十王は、假令その兵を合はするもスダスを破ること能はず。

因陀羅及び婆樓那よ、卿は十王のスダスを圍めるとき、白衣のトリツ、假髮を着け供物を捧げ、讃頌を歌ひて卿を崇拜せるとき、スダスに剛勇を授けたり。

因陀羅は戰に敵を滅ぼし、婆樓那は敬虔なる吾等の儀式を保護す。吾等は讃頌を歌ひて卿に祈願す。噫、因陀羅及び婆樓那よ、吾等に幸福を授けよ。

因陀羅、婆樓那、蜜多羅 (Mitra) 及びアーリアマン (Aryaman) の、吾等は富と廣屋とを與へんことを。アヂチ (Aditi) の光、吾等に害なからんことを。吾等は神聖なるサヂトリ (Savitri) の讃頌を誦す。

(Rig Veda, VII. 83.)

第七章　風俗及び文化

アーリア人は、到る處森林を闢きて耕作に從へり。農業は實に古より印度の主要なる產業にして、征服者の自らアーリアと稱したるも、またその意、耕作者たるを表はせるに外ならずといふ。左に擧ぐる短歌は耕作に關する讃頌にして、アーリア最古の牧歌と稱せらる。

吾等は田野の王と共にこの野を耕さん。彼願はくは吾等の馬に力を添へんことを。かくて吾等を幸福ならしめんことを。

噫、田野の王よ、吾等に牝牛の乳を與ふるが如く、清美新鮮なる多量の雨を與へよ。

水の王よ、願はくは吾等を幸福ならしめんことを。
禾穀よ、吾等に甘からんことを。天空、中空及び雨露の美ならんことを。田野の王の吾等に恩惠を垂れんことを。吾等は敵に害せらるゝことなく、彼と共にあらん。
牡牛をして樂しく勞働せしめよ。農夫をして樂しく勞役せしめよ。鋤をして樂しく動かしめよ。牽紐を樂しく束ねよ。刺針を樂しく強ねよ。
嗟、スナ (Suna) 及びシラ (Sira) よ、この讃頌を受けよ。卿の天空に生ぜる雨をふらしてこの地を潤はせ。
嗟、多幸なるシタ (Sita) (畦)よ、來れ、吾等は卿に祈禱す。卿は吾等に富及び豐かなる禾穀を與へよ。
因陀羅はシタに厚からんことを。プシアン (Púshan) は彼女を導かんことを。
彼女は多量の水を得て、吾等に年々穀物を與へんことを。
鋤頭をして樂しく土壤を覆さしめよ。農夫をして樂しく牡牛を逐はしめよ。
雨神をして甘雨をふらして地を潤ふさしめよ。嗟、スナ及びシラよ、吾等に幸福を與へよ。

(Rig Veda, IV. 57.)

これ等の古歌を見れば、質朴なる古代の印度農民が、喜びて耕作に從ひしことを知るに難からず。
然れども、廣漠たるヴィジャブの地、河流に乏しく、灌渠の類を鑿ちて田野に灌ぐにあらざれば、五穀を植うるに由なし。これリグ・エダにこの種の方法を說ける所以なり。牧地また甚だ廣く、その會長は許多の家畜を有し、戰士及び詩人はその繁殖を神に禱れり。社會はなほ幼稚にして、階級の區別甚だ明かならず、平時廣漠なる土地と許多の家畜とを有せる會長は、戰時にはその部下を率ゐて出陣し、戰勝ちて家にかへるに及び、その爐邊に恭しく供物をさゝげて、その尊崇する神を祭れり。
最古の記錄及び傳說によるに、アーリア諸國民は、その文化未だ進まざる時、概ねその狀態を同うし、その家族は農耕及び牧畜によりて生活し、その社會は階級の區別明かならず、その壯丁は悉く戰士となり、その會長はその部下を率ゐて戰に臨み、戰終ればまたその部下と共に耕作に從ひたるが如し。以上はリグ・エダに現はれたる古代生活の狀態なり。

當時田野の主なる產物は、小麥及び大麥にして、米はその未だ知らざりし所なり。されど肉食は盛に行はれ、牡牛及び牡羊の肉は屢々献供に用ゐられたり。馬はまたその好んで食らひたる所なり。されど後世に至りては、たゞ國王の祭祀に用ゐられたるのみ。ソマ（soma）の液汁は當時の好飲料にして、常に献供に用ゐられしが、リグ・エダの詩人の如きは、口を極めてその德を頌し、遂にはこれを以て神とするに至れり。

簡單なる技藝は、當時已にアーリア殖民者の間に發達せり。殖民者は木材を以て家屋を建築し、また衣服を織りて皮膚をおほひ、且つ金屬細工に通ぜり。その武器及び種々の裝飾を見れば、その技藝の進歩を知るに難からず。

甲冑、投槍、矢及び槍につきては前已に述べたり。リグ・エダの讃頌によれば、三千の戰士武裝せることありきといふ。また他の讃頌には頸飾、腕飾、脚眼飾、黃金の胸當及び冠につきて記せるものあり。これによりてこれを見れば、その金屬細工は著しく進歩したるが如し。

建築術の進歩もまた見るべきものあり。讃頌に所謂千柱の第を以て想見すべし。然れども彫刻術は發達せず。蓋し當時偶像を崇拜せざりしが故に、彫刻術の必要なかりしなるべし。

社會組織は單純なる家長制度にして、一家族の父はその家を支配し、その子孫はその妻子と共に父の家にあり、皆土地及び家畜を有せり。敬虔なる家族にありては、皆その家内に聖火を點じ、その婦女子はソマ酒及びその他の供物を調達し、讃頌を歌ひて天空、中空及び地の善神を祭り、これに藉りて健康、子孫及び富を授けんことを以てす。家族内の献供には、妻はその夫と共にその儀式に與かりしが、當時の讃頌にして、女流の手に成れりと稱せらるゝものなほ今日に存す。

この時代には、婦女子は自由にして、社會上の地位を奪はれ、或は幽閉せらるゝが如きことなし。青春の女子は皆その夫を選べり。されど、その父母のこれに干渉するは論を俟たず。リグ・エダによるに、細心勤勉の妻、よく家政を整理し、毎朝その家族を起して、その業務に勵ましめたるものありといふ。嫁せずして家に留まる女子は、父の財產を讓與せらる。寡婦はもとより再婚を妨げず。

婚姻の儀式は宜しきに適し、新婦新郎は死に至るまで苦樂を共にすべきを約す。

左にこれに關する讃頌を擧げん。

(新婦及び新郎に告ぐ)卿等共にこゝに住せよ、別るゝことなかれ。種々の滋味を賞せよ、卿等の家庭に子孫と共に幸福を享けよ。

(新婦新郎いはく)プラジャパチ(Prajāpati)吾等に子を授けんことを、アーリアマン吾等をして偕老同穴の契を全うせしめんことを。

(新婦に告ぐ)噫新婦よ、幸に卿の夫の家族たれ。吾等の僕婢、吾等の家畜に幸福を與へよ。

卿はその眼に恋をあらはすことなかれ、卿の夫の幸福に仕へよ、吾等の家畜に幸福を與へよ。卿の心樂まんことを、卿の美光を敬たんことを。勇敢なる子の母たれ、神に敬虔なれ。吾等の僕婢、吾等の家畜に幸福を與へよ。

噫、因陀羅よ、この淑女をして多幸ならしめ、德ある子の母たらしめよ。彼女をして十子を擧げ、その夫と共に十一人たらしめよ。

(新婦に告ぐ)卿はその夫の父母の上に好影響を及ぼし、その夫の兄弟姉妹の上に女王たらんことを。

(新婦新郎いはく)万神よ吾等の心を一にせんことを、マタリスヴン(Mātarisvan)、グトリ(Dhātri)及び言說の女神よ、吾等を同體ならしめんことを。(Rig Veda, X. 85, 42-47.)

以上の讃頌を見れば、古代印度の家族制度を知るに難からず。當時、女子の嫁ぎて新に夫の家族に屬するものは、必ず適切なる敎訓を受けたるが如し。僕婢及び家畜は夫の家族に屬するものなるが故に、新婦は常に意をその幸福に注がざるべからず。平生恐怒を愼み、欣然としてその夫の幸福を計るに務め、またその家族の崇拜する神を尊崇せざるべからず。常に溫良貞淑を旨とし、その好影響をその夫の父母に及ぼし、また一家の女王として、その夫の兄弟姉妹を制御し、且つ死に至るまでその夫と共棲し、實際の女君主としてその家族の尊敬を受くること、古代の賢婦人の如くならざるべからず。これ即ち新婦の服膺すべき敎訓なり。

當時一夫多妻の印度に行はれたることは、他の古代諸國に異ならず。然れども、これたゞ國王及び酋長に止まり、普通人民は一婦を以て滿足したるが如し。男子はその父の財産を繼ぎ、父若し男子なきときは、その女の生める男子、若しくは他の

男子を殺ひ女子とす。[illegible]

葬送の儀式は簡単にして初め土葬一般に行はれたるも、幾許ならずして火葬行はるゝに至れり。これに關する讃頌は甚だ興味に富み、來世の希望が死者の臨終を照したることを明かにす。[illegible]

噫、死者よ吾等の祖先の跡を追ひ、彼等の行ける所に行け。閻摩(Yama)及び婆樓那の二王は獻供を喜べり。行きて彼等に謁せよ。[illegible]

その幸福なる天上に行き、吾等の祖先に混ぜよ。閻摩に謁し、汝の德行の報酬を得よ。罪を去りて汝の家に到れ。[illegible]

噫、幻影よ、この所をすてゝ遠く去れ。祖先は死者のために居所を準備せり。その所には暗黑なる夜なく、水は洗浄として流れ、光明は普く照せり。閻摩は死者のためにこの所を割愛す。[illegible] (Rig-Veda, X. 14, 7-9.)

冥府及びその刑罰に關する記事はリグ・ヴェダに見るべからず。

(Dieterich, [illegible])

第八章　宗教

吠陀時代の印度の宗教は自然力崇拜なり。プンジャブのアーリア人は、勇敢にして活動を好み、自然の愛すべきもの、畏ぶべきものを尊び、珊瑚玉の如き天空を望みては、デウ(Dyu)と呼びてこれを崇拜せり。デウはギリシアのゼウス(Zeus)、ローマのユピトル(Jupiter)に同じ。晝の天空を密多羅(Mitra)といふ、ゼント(Zend)語のミトラ(Mithra)に當る。夜の天空を婆樓那といふ、ギリシアのオウラノス(Ouranos)にも當る。かくの如く、古代のアーリア諸國民が一般に天空の神を崇拜したるを以て見れば、その崇拜風にその原住地に行はれ、デウ、密多羅、婆樓那等の名その由來久しきを知るに足る。[illegible]

然れども、プンジャブ征服者の最も尊崇したるものは、雨をふらす天空の神因陀羅なり。印度にては、禾穀の豊饒一に雨に待つを以て、因陀羅の漸次第一位の神となりしも怪むに足らず。その傳說に從へば、因陀羅は勇敢なる神にして、その崇拜者に雨を與へんがために、ヴリトラ(Vritra)と稱する雲と戰ひ、また早晨の光を世界

に恢復せんがために、暗黒の悪鬼パニ(Pani)と戰へりと。而して暴風の神摩魯多(Marute)は、そのヴリトラとの戰に、因陀羅を助くるものとせらる。蓋し雨季の驟雨には、暴風起り、雷鳴轟くこと多ければなり。かくの如く勇敢にして恩惠深き神は、自らアーリア人の喜ぶ所なり。その土著との戰爭に、絶えず冥助を請ひ、土地、財寶、家畜及び子孫を授けんことを願りしも怪むに足らず。

因陀羅とヴリトラとの戰爭を記述せる詩を讀めば、勇敢質朴なる古代印度人の精神を想見することを得。

吾等は雷神因陀羅の勇敢なる行爲を歌ふ。彼はアヒ(Ahi)(雲)を滅ぼし、雨をふらし、山谷の水を流れしめたり。

インドラは山上に横はれるアヒを殺し、トヴシトリ(Tvashtri)は彼のために千里の電光をつくれり。牝牛の熱心にその子を追うて走るが如く、水は奔放海に流れたり。

猛烈牡牛の如き因陀羅は、ソマの液汁を痛飲せり、彼は三たび捧げられたるソマの神酒を暴飲せり。時に彼は電光を從して年長のアヒを殺せり。卿は年長のアヒを殺して、巧みなる設計者の計畫を破れり。卿は太陽早晨及び天空を清明ならしめて、敵その影を留めず。

因陀羅はその破壞力の强き電光を從して、漠々たるヴリトラ(雲)を殺し、その手足を斷てり。こゝに於てアヒは地に仆れ、樹身の斧鉞に倒れたるに似たり。河の崩壞せる堤防を越えて氾濫するが如く、旅々たる水は伏屍を越えて奔騰す。生けるとき、その力によりて水をとゞめしヴリトラは亡び、アヒはこゝに於て水底に沒す。

(Rig Ved, I, 32.)

正義を司る天空の神婆樓那に寄せたる讃頌を以て、以上の讃頌に對照すれば、印度人が天空に種々の名稱を附して、これを崇拜したるを知るに足る。

嚆、婆樓那よ、吾は切に吾が罪を知らんとして卿に問ふ。吾はこれを問はんが爲めに學者の許にゆけり、學者は皆吾に告げていはく、婆樓那は卿を喜ばずと。

嚆、婆樓那よ、吾いかなる罪を犯したるがために、卿は卿の朋友、卿の崇拜者たる吾を滅ぼさんとするか。嚆、無上の權力を有する卿よ、吾に告ぐるにその理由を以てし、吾をして疾かに、頓首再拜卿に近づくことを得せしめよ。

噫婆樓那よ、祖先の罪より吾等を救へ。吾等の犯せし罪より吾等を救へ。噫、尊貴なる婆樓那よ、ヴシシタを救ふこと、繩に繋ぎたる犢を放つが如く、盜みたる動物を食へる盜賊を釋すが如くせよ。

噫婆樓那よ、この罪は皆吾等の好んて犯せるにあらず。過失或は酒狂、恐怒或は賭博、或はまた不注意の罪を生ぜるのみ。加之兄は弟を誑せり。罪また吾等の夢に生ず。

吾は罪を免かれて、吾等の願望を成就せしめ、また吾等を助くる婆樓那神の奴隷たらん。吾等は無智なり、アーリア神吾等に智識を授けんことを。賢神吾等の祈禱を受け、吾等に富を授けんことを。 (Rig Veda, VII. 86.)

天空に次ぎて古代印度人の崇拜したるものは太陽なり。アヂチは無窮なる天空の光にして、その子アヂチア (Ádityа) は月を異にする太陽なり。スリア (Súrya) はギリシアのヘリオス (Helios)、ラテンのソル (Sol)、ゲルマニのチル (Tyr) に當り、最も通俗なる太陽の名とす。サヰトリまたその別名なり。かの神聖なる讃頌ガヤトリ (Gáyatri) は、即ちサヰトリに寄せらるものにして、今日なほ敬虔なる全印度の婆羅門、毎朝これを誦するを怠らずといふ。

吾等は吾等の敬虔なる儀式を導く、神聖なるサヰトリの光を默思す。 (Rig Veda, III. 62, 10.)

質朴なるプシアプの牧畜者は、その移住に、太陽を以てその守護神とせり。プシアン (Pushan) 即ちこれなり。

噫、プシアンよ、吾等を助けて吾等の旅行を終えしめ、一切の危險を除去せよ。噫、雲の子よ、卿吾等の先導たれ。

噫、プシアンよ、卿は吾等を誑し、吾等を擊ち、吾等を掠め、吾等に害を加ふるものを道より除去せよ。

卿は旅行を妨ぐる狡猾なる盜賊を驅逐せよ。

吾等を導き、旅行を妨ぐる敵をして吾等を害することを能はざらしめよ。吾等を導き、平穏愉快なる道を行かしめよ。噫、プシアンよ、この旅行に吾等を安全ならしむる方法を案ぜよ。

吾等を導き、綠草離々たる愉快なる路にいてしめよ、その地願はくは炎熱烈しか

らざらんことを。噫、ヴシアンよ、その旅行に吾等を安全ならしむる方法を案ぜよ。 (Rig Veda, I. 42.)

ヴシヌ (Vishnu) もまたその時代の太陽の名なり。されど後の神話に於ては守成神の名たり。日出、日中及び日沒は、ヴシヌの天空を過ぐる三態なりとせらる。

アグニ (Agni) は火なり。印度にては、神を祭るに必ず火に供物を捧ぐるが故に、アグニは僧侶の神とせらる。然れどもリグ・ヴェダによるに、アグニはまた電光及び太陽の火にして、その住所は天上にあり。古代の賢者ブリグス (Bhrigus)、初めて天にアグニを發見し、最古の献供者アタルヴン (Atharvan) 及びアンギラス (Angiras)、その種族の保護者として、この世界にその座を設けたりといふ。

ヴユ (Vâyu) は風なり。暴風雨の神マルタは、ヴユに比して多く尊崇せられたるが如し。その因陀羅を助けてヴリトラと戰ひたることは前記に述べたり。マルタの父ルドラ (Rudra) は雷神にして、後の神話の破壞神なり。

ソマ酒また常に献供に用ゐらるゝの故を以て、神として崇拜せらる。新醸者の神とせられて、ブラーマナスパチ (Brahmanaspati) と稱せらるゝも、その理またこれに同じ。婆羅門は即ち後の神話の創造神なり。

以上は吠陀時代の諸神中、その最も重要なるものなり。然れどもなほ雙生の神朝及び夕あり。思ふに古代のアーリア人は、明暗より自らこの思想を得たるならん。雙生のアスヰン (Asvin) の父をヴィヴスヴト (Vivasvat) といふ、天空なり。母をサラニウ (Saranyu) といふ、黎明なり。古傳説によれば、サラニウはその雙生の子を擧ぐるに先ち、ヴィヴスヴトの家をいでたりといふ。ギリシアの古傳説またこれに似たるものあり。曰く、エリニス (Erinnys) はその情人の家を脱して、アレイオン (Areion) 及びデスポイナ (Despoina) を擧げたりと。この根源的思想は、紅色の女神(黎明及び薄暮)その姿を隠して、光明及び暗黑生れたりといふにあり。

然れどもリグ・ヴェダのアスヰンは、已にその原始的性格を失ひ、懇ろに病者を看護する醫神たり。雙生の神ヤマ及びヤミ (Yami) も、またリグ・ヴェダに於ては別種の神となれり。ヤミにつきては聞く所甚だ少しと雖も、ヤマに至ては冥界の君主として、死者の王として、その名大に顯はる。傳説によれば、善人は死してヤマの傍に到り、水洸洋として流れ、光明長へに照らすその王國に生活すといふ。ヤマ及びソマ

の讃頌を見れば、未來生活に關する吠陀時代の思想を知ることを得べし。

供物を調へてギヴスゲトの子閻摩を崇拜せよ。万人死して彼の許に至る。彼は善人を幸福の王國に拉す。彼は衆のために道を開拓す。

閻摩は初めて吾等のために道を發見せり。この道再び亡ぶことなからん。生けるものは皆その行爲に從ひ、吾等の祖先の跡を追はん。 (Rig Veda, X. 14.)

流るゝソマよ、吾を天上の不死の住所、光明長へに照す所に拉せよ。ソマよ、因陀羅のために流れよ。

吾を閻摩の王たる所、天門のある所、大河の流るゝ所に拉せよ。吾をその所に拉し、吾をして不死ならしめよ。ソマよ、因陀羅のために流れよ。

吾を第三天のある所、天空の上、光明長へに照す第三王國のある所、逍遥意のまゝなる所に拉せよ。吾をその所に拉し、吾をして不死ならしめよ。ソマよ、因陀羅のために流れよ。

吾を万望の充さるゝ所、プラドマ (Pradhima) の住する所、珍味及び滿足のある所に拉せよ。吾をその所に拉し、吾をして不死ならしめよ。ソマよ、因陀羅のために流れよ。

吾を歡樂喜悅のある所、万種の切望充さるゝ所に拉せよ。吾をその所に拉し、吾をして不死ならしめよ。ソマよ、因陀羅のために流れよ。 (Rig Veda, XI, 113.)

リグ・エダには、黎明の女神ウシャス (Ushas) 及び河の女神薩羅娑縛底 (Sarasvati 即ち大辯才天女) を除きて、女神の特殊なる一性格を有するものなし。黎明の女神ウシャスは、リグ・エダの諸神中最も愛すべきものにして、その讃頌は、古代世界の詩歌中最も清新の趣味に富むと稱せらる。リグ・エダによれば、ウシャスは光明爍灼千里を照す黎明にして、その住所明かならず。年少美貌、身に白衣を纏ひ、遠くその車を驅りて世界にきたり、燦爛たる光彩を四邊に亂射す。天空の女、財寶の女王にして、その用意、恰かも思慮周密なる女君主の、毎朝その家族を起してその業に勵ましむるに似たり。されどその妖艶、なほその母の命に從ひて、粧を凝せる新婦の如きものありと稱せらる。 (Rig Veda, I, 30, 21; I, 48, 7; I. 124, 4; I. 123. 11.) 以て古代印度人の、熱帶の朝の清新を愛したるを見るべし。

ホメロス時代のギリシア人は、その可憐なるエオス (Eos) に對して、その感情を

これに同うせり。然れどもこれ決して怪むべきにあらず。何となればエオスとウシャスとは同語にして、その他ギリシアにて黎明の義なるアルギノリス (Aurgynoris)、ダフネ (Daphne)、アテナ (Athena) 及びエリニス (Erinis) は、吠陀のアルジニ (Arjuni)、ダハナ (Dahana)、アハナ (Ahana) 及びサラニウ (Saranin) に通ずればなり。これによりてこれを見れば、印度及びギリシアのアーリア人は、共に女神の概念及び名稱を原始的アーリア人より得たること疑なし。

然れども、薩羅娑縛底に至ては純然たる印度の女神にして、プンジャブの河名なり。或はいふ、インドス河なりと。その河岸は宗教的儀式を擧げ、神聖なる讃頌を歌ひたるを以て神聖となれり。故に思想自然の發達により、讃頌或は傳說の女神となり、今日に至る。

以上述ぶる所によりて、吠陀時代の印度諸神とホメロス時代のギリシア諸神とは、其性質に大なる相違あることを見るべし。印度人の神の概念は、ギリシア人の神の概念に比して原始的アーリア人の自然崇拜に近きこと、其サンスクリット語の、ギリシア語に比して根源的アーリア語に近きに異ならず。ホメロス時代のギリシアに於てはその諸神皆已に顯著なる箇性を有し、その歷史、その性格、その行爲、截然として別あり、自然の勢力及び顯現と見るべきもの殆どあるなし、然るに、吠陀時代の印度諸神はこれに反して、特殊の性格或は歷史を有せず。そのヂウを以てギリシアのゼウスに比するに、一層明瞭に天空を表はし、そのアハナ及びダハナは、ギリシアのアテナ及びダフネに比すれば、黎明の意義を表明すること一層明白なり。

從に印度の神の概念は、ギリシアに比すればその根源を離れず、ギリシアの神の概念は、印度に比すれば大に發達し、自然崇拜の範圍より万神教の範圍に移れるを見る。思ふに印度人のギリシア人に比して早く一神の概念に達したるは、その原因この相違にあるならん。自然力の崇拜より自然神の概念に達するは、容易なる階梯なり。然れども、その諸神已に截然たる性格及び歷史を有するギリシアにありては、一神の概念に達すること、道理上容易にあらず。ホメロス時代のギリシア人が、印度人の已に吠陀時代に認めし最高神の崇拜を起すこと能はざりしはこれによる。

リグ・エダの後篇には、印度人が、諸神の名を解釋して一大神の別名なりとせるも

のあり。一大神とは、讃頌に萬物の父或は萬物の創造者といふもの即ちこれなり。

万物の創造者は偉大なり。彼は万物を造り。万物を保つ。彼は万物の上にあり、万物を觀る。彼は十星座の彼方にあり。これ賢者のいふ所、而して賢者は彼の許に至りてその願望を成就す。

生命を與へたる彼、創造者なる彼、この世界に於て知らざる所なき彼、彼は一にして諸神の名を有す。すべてのものは彼を知らんことを願ふ。(Rig Veda, X. 82.)

この讃頌は古代に於て、三千餘年間、印度の眞宗教たりし一神教の精神を明かにせるものなり。されど、普通人民の諸神を崇拜したるは言を俟たず。更に最高神に對する讃頌を擧げて、最古の印度一神教を知らしめん。

世界の初め、黄金卵あり。彼は生れて万物の王たり。彼はこの天空と地とを定め、各々その所を得せしめたり。吾等の供物をさゝげて崇拜すべき神、彼を措いて誰ぞや。

彼は生命と氣力とを與へたり。彼の意志は万神の奉ずる所なり。彼の影は不死なり。彼の奴隷は死なり。吾等の供物をさゝげて崇拜すべき神、彼を措いて誰ぞや。

彼はその權力によりて、能く見、能く動く一切生物の唯一の王なり。彼は一切の二足動物及び四足動物の王なり。吾等の供物をさゝげて崇拜すべき神、彼を措いて誰ぞや。

彼はこの天空と地とを定め、各々その所を得せしめたり。彼は天と最高の天とを建てたり。彼は中空を測りてその限界を定めたり。吾等の供物をさゝげて崇拜すべき神、彼を措いて誰ぞや。

彼によりて鳴動の天空と地とは定れり。光明の天空と地とは彼を全知全能の神とす。彼の扶助によりて太陽天に昇り、光輝を發す。吾等の供物をさゝげて崇拜すべき神、彼を措いて誰ぞや。(Rig Veda, X. 121.)

これによりてこれを見れば、ブンジャブ征服者の宗教は進歩的宗教にして、自然の崇拜より自然の神の崇拜に進みたるものなり。初めたゞ黎明若しくは暴風雨を讃せし征服者が、遂に万物の創造者を認むるに至りたるは、これ明かに人心自然の發達を示すものとす。

されど、當時この高尚なる思想を有したるものは、實に少數の有識者に過ぎず、多數の人民に至てはなほその好愛する諸神を崇拜し、酒を灌ぎ、餅を供へてこれに祈願せり。故に當時神殿及び僧侶と稱すべきものあるなく、敬虔なる家長は各〻その家に聖火を點じ、その諸神に健康、禾穀、家畜及び子孫を長けんことを禱りたるのみ。されど、國王及び酋長は、その權威を示さんがために、万金を抛ちて宗教的献供を行ひ、僧侶の家族を扶持してその儀式を司ちしめしが、その後、この種の僧侶、世々その職業を傳へ、その家族讃頌を編み、或は唱んじ、また儀式を行ふ事巧なるを以て顯るゝに至れり。諸種の讃頌は、即ちこの種の家族の、世々記憶によりて傳へたるものにして、最古の讃頌リグ・ヴェダの今日に存するも、また實にこの敬虔なる習慣による。

以上述ぶるが如く、印度には世々僧侶を職業とする家族ありて、主侯の報酬及び人民の尊敬を受けたれども、當時この種の家族と普通人民との間には、世襲的區別の見るべきものなし。實にこの時代に存せし唯一の區別は、征服者と被征服者、印度人と土著アーリア人と、ダシュ人との區別のみ。アーリア人は皆平等にして、ブランジャブの家長はその讃頌を編み、その敬を擎ち、その田野を耕せり。婆羅門(Brahman)刹帝利(Kshattriya)吠舎(Vaisya)の區別の如きは後代の社會的現象のみ。

第二期　史詩時代（ガンガ河畔の印度諸王國……前一四〇〇—一〇〇〇年）

第九章　クル族及びパンチャラ族

アーリア人は、インドス河よりストレッヂ、サラスヴチ兩河に至る廣漠なる土地を征服し、その後東の方ガンガ河畔に移住せしが、その移住者年と共に增加し、美麗なる都府村落、遂にその河岸に現はれて、その富、その文明、ブランジャブを後塵するに至れり。吠陀時代には、アーリア人の鄉地はブランジャブにして、その讃頌またガンガ河岸の僻地を說くもの稀なり。然れども史詩時代に至りては、ガンガ河畔は有名なる印度諸王國の鄉地にして、その文學またブランジャブの强盛を說くものなし。

ブランジャブよりガンガ河畔に移住せし殖民者中、その最も有名なるものをクル(Kuru)族及びパンチャラ(Panchâla)族とす。クル族はもとバラタ(Bhârata)族と稱し、スダスの戰爭にその名を顯はせしが、その後、相率ゐて東方に移住し、遂に前第十四世紀に及びて、ガンガ河の上流に一强王國を創め、バラタ族或はクル族と稱せり。

クルはもとその國王の名にいづといふ。その首府ハスチナプラ（Hastinápura）はガンガ河畔にあり。

パンチァラ族またプンジァブを去りてクル族の南に移れり。リグ・エダに所謂パンチァジァナ（Pancha jana）或はパンチァクリシチ（Pancha Krishti）は、プンジァブ、インド種族の一部を指せるものにして、その苗裔ガンガ河畔に殖民せるもの、これをパンチァラ族といふ、即ち五種族の義なり。パンチァラ族已にガンガ河畔に移りて、前第十四世紀に一強王國を創め、有名なる首府カンピリア（Kámpilya）をひらけり。

その他のアーリア種族にして、ガンガ河の上流及びジァムナ河沿岸の地に移れるものにヤダヴ（Yadava）族あり、マトシア（Matsya）族あり、スラセナ（Surasena）族あり。これ等は皆マハバラタ戰爭に與りたるを以てその名世に顯はる。

クル族とパンチァラ族とは、多年對峙して平和なる生活をなし、夙に文明の域に進めり。その諸王は諸派の學者を朝廷にあつめてその說を聞き、その僧侶は國王のために精密なる獻供を行ひ、その學問及び功勞に應じて報酬を得、その學者はまた弟子をひいてその敎育に從へり。これ等の學者はこれをグル（Guru）といふ、即ち

敎師の義なり。當時、印度の男子は皆その父母の膝下を辭してグルの門に至り、多年その家に寄寓して、その室を掃ひ、その食を路に乞ひ、この間に吠陀及び他の古學を學び、然る後、近世の大學に比すべきパリシァド（Parishad）に轉じ、學成るに及びて家にかへり、妻を迎へ、初めて一家を管理す。

婚姻の際には神火を點ず。而して敬虔なる印度人は皆その家に火をともし、その神前に神酒及び供物を捧ぐ。吠陀の讃頌はなほ獻供の際に誦せられ、ガンガ及びジァムナ河畔のアーリア殖民者は、悉くその宗敎、習慣儀式及び國語を同うせり。

この時代のアーリア種族は、各、その社會を異にするも、その國語、宗敎、文明及び風俗を同うし、その狀頗るペロポンネソス（Peloponnesos）役前のギリシア諸都市に似たるものあり。その相互の關係は、一方に於て甚だ親密なるものありしも、また他方に於ては圓滑を缺き、敵意を挾みたることすらあり。その學校は互に盛大を競ひ、クル、パンチァラ兩王國のパリシァドは、最も多數の遊學生を收容せりといふ。この間諸種族はその武備を怠らず、王族及び武士の子弟は幼にして武藝を學び、弓、矢、劍、投槍及び投環（Chakra）に熟せり。而して種族間の嫉妬は屢々破裂して爭鬪となる

り、前第十三世紀には、かのペルポンネソス役に比すべき激戰起り、北部インド種族の名あるもの皆これに加はり、前古未曾有の慘劇を演ぜり。有名なる叙事詩マハバラタは、即ちこの戰爭を歌ひたるものとす。されど、然るとこれ寓意譚或は神話の類にして、據て以て事の眞相を知るべからず。案ずるに、この戰爭は當時の大種族たるクル族とパンチャラ族との戰なり。されど、マハバラタの主動者はこの二種族にあらずして、パンヅ (Pándu) の五子パンチャ・パンダヴ (Pancha Pándava) 及びその共有の妻たるパンチャラ王の女なりとす。この夫妻に關する寓意譚は、マハバラタの骨子なれども、その起原に至ては議論紛々歸着する所を知らず、たゞその神話なるの一事明かなるのみ。

マハバラタに所謂パンダヴは、パンチャラ族をして干戈を執らしめたる一種族なるべし。而してマハバラタにパンヅの五子、パンチャラ王の女を娶れりといふは、假りて以てこの二種族の同盟をいへるならん。一妻多夫は古來より印度に行はれず。そのパンチャラ王の女の五夫を有したりといふが如きは、單に比喩にとゞまるのみ。且つ思ふに、この叙事詩は、クルとパンチャラ二種族の戰爭後、パンダヴの諸王の最上權

を行使せる時、この戰爭に關する歌曲、傳說及び記憶に據りて編纂せられたるものならん。かくの如く想像すれば、パンダヴ族の祖先が、この戰爭の主動者となれるもまた怪むに足らず。而してパンダヴ族の祖先は、もとクル族に何等の關係なかりしも、作者のこれを以てその諸王子の從兄弟とせるは、後世これをして簒奪者の譏を免れしめんがためのみ。以てその用意を見るべし。

以上述ぶる所によりてこれを見れば、マハバラタは毫も戰爭の眞相を傳へず。然れどもまた據て以て當時の狀態を知るべきものあり。左にその梗概を叙する所以なり。

クル王に二子あり、長子をドリタラシトラ (Dhritarâshtra) といふ、生まれて盲目なり。次子をパンヅといふ、パスチナプラの王位を繼ぐ。パンヅに五子あり、幼よりその師ドロナ (Drona) に就きて武藝を學びしが、その長子イウヂシチラ (Yudhishthira) は、好戰士とならずして却て宗教的學問を好み、最も正義の念に富めり。次子ビマ (Bhima) は容貌魁偉にして膂力衆に超え、第三子アルジャナ (Arjuna) はその武藝天に數なく、マハバラタの眞主動者なり。第四子ナクラ (Nakula) は悍馬を御するの

術に長じ、第五子サハデヴ (Sahadeva) は天文學に通ぜり、而してこの五子は、幼よりその從兄弟の嫉む所なりき。

一日、クルの諸王子、その武を較べんとして廣濶なる地に柵を繞らしその準備全く成る。貴族のその技を見んとするもの、盛裝じてその場に會し、盲目なるドリタラシトラまたその席にあり、その妻及びパンヅの寡婦は、貴女の前面にその座を占め、クルの民またその敬愛せる王子の妙技を見んとして、來り集まるもの擧げて數ふべからず。諸王子は劍と棒とを以て、戰ひ、且つ嚴格なる方法によりてその射術を試む。パンヅの第三子アルジュナ遂に衆に克ちて、歎呼聲裡にその師ドロナを拜し、こゝにその妙技を終れり。ドリタラシトラの百子これを見て大に嫉み、その後パンヅの長子イウヂシヂラの選ばれて王位に登るに及び、遂に起ちて叛旗を翻へせり。盲目なるドリタラシトラは齢已に傾きてその子に屈從し、王位をこれに與へてパンヅの五子を追放せり。

この時恰も檄を印度諸國に傳ふるものあり、曰く、パンチャラ國の王女、スワヤムヴラ (Swayan-vara) は較武によりてその配を定むべし、而してその配たるべきものは、彌弩をひき、轉環を貫きて竿上の金魚の眼球を射らざるべからずと。四方の戰士これを聞いてその選に與らんとし、期に及びてその首府カンピリアに集るもの多し。王女は手に當日の勝利者に與ふる花環を持しその兄弟と共に式場に臨めり。來集の戰士奮うてその技を試みたれども、能くその目的を達するものなし。時に無名の一戰士あり、進みてその弓を把り、一發巧に金魚の眼球を射る。來集の戰士これを見て甚だ喜ばず、異論忽ち四方より起れり。こゝに於て無名の戰士、その假裝を脱して告げていはく、予はパンヅの第三子アルジュナなりと。王女は遂にアルジュナの手に歸せり。

アルジュナ已に王女を得て、その兄弟と共にその母の許に至り、告ぐるに、武を較べて賞品を得たることを以てす。然れども母その何たるを知らずしていはく、汝等これを分てよと。五子その命に背くこと能はずして王女を共有の妻となし、パンチャラ王國と同盟を結べり。クル王ドリタラシトラそれを見て、その百子と王位を爭奪せんとを憂ひ、乃ちその王國を分ちて、ハスチナプラ及び重要の都市村落をその子に與へ、ジュムナ河畔の森林をパンダヴに與ふ。パンダヴは森林を闢き近世の

デリーの地に新首府インドラプラスタ (Indraprastha) を創建せり。

この後パンダヴは四方を征服し、その長子イウヂシチラは近隣諸國の侯伯を招きて盛なる戴冠式を擧行す。この時ヤダヴ王クリシナ (Kurishna)、チェヂ (Chedi) 王シスパラ (Sisupala) と爭うてこれを殺し、爾後長くパンダヴの同盟者たり。されど現存の叙事詩には、クリシナを以てパンダヴの權利を保護せんとする神の化身となせり。

インドラプラスタの新王イウヂシチラは、正義を愛したれども賭博に耽けるの惡癖あり一日ドリタラシトラの長子と賭して、その王國、財寶及び家族を失ふ。ドリタラシトラの長子乃ちその家族を以て奴隷となさんとし、パンチャラ王女のこれを拒むに及びて、暴力を以てこれに臨み、まさに流血の慘劇を演ぜんとせしが、時恰も老ドリタラシトラのその室にきたりてこれを制するありて僅に事なきを得たり。パンダヴは幸にして奴隷たるの辱を免れたれども、その新王國を失ひ、ドリタラシトラに將來を約して紛爭その局を結べり。その約にいはく、パンダヴは十二年間その王國を去り、その後一年間任意の地に潛むべし、而してドリタラシトラの諸子この最後の一年間にその所在を發見すること能はざる時は、パンダヴにその王國を還附すべしと。

パンダヴはその妻と相携へてその王國を去り、諸方に流寓すること前後十二年、然る後姿を變じてギラタ (Virâta) 王に仕ふ。その妻また王妃の侍婢としてその朝廷にあり。然るに王妃の同胞、偶まその侍婢の容色を見てこれを挑む。ビマ探知して密かにこれを殺せり。

家畜掠奪は當時にありて通常の事たり。而してハスチナプラの諸王子またギラタ王の家畜を掠む。時にアルジャナ、ギラタ王の朝廷にあり、これを聞きて忍ぶ能はず、奮然起ちてその家畜を恢復し、忽ち諸王子の發見する所となれり。然れどもこの時、パンダヴのドリタラシトラに約せる潛伏の期盡きたるかは明かならず、故を以て次いで起れる戰爭の是非を說くこと難し。

パンダヴは公然その王國の還附を要求せり。然れども、クルの諸王子これを拒みて戰備を修む。こゝに於て、全印度の國民は擧げてこれに參し、かれに黨せざればこれに通じ、兩黨デリーの北方クルクシェトラ (Kurukshetra) の野に戰ふこと十八

日、クル軍大敗してその戰士悉く陣沒し、イヴ、ヂシチラ乃ちその王位に登れり。

以上はマハバラタの梗概にして、その所說、叙事詩時代の風俗を明かにするもの多し。當時印度の年少王子は夙に武藝を學び、較武を樂み、貴女のこれを見んとするもの、公然その場に臨みてその技を賞せり。女子は妙齡にして婚を結び、その容色遠近に鳴る王女にありては、四方の戰士を會してその配を定むるを異とせず。國民間の嫉妬は屢々悲慘なる戰爭を惹起せしも、嚴格なる武士道ありて族鬪の慘酷を制限せり。且つこの叙事詩によりて見るに、ガンガ河畔のアーリア種族はブンジャブの祖先に比して遙に文明の域に進み、その諸王は廣大なる領土を有し、風俗は醇化し、智識は發達し、宗教的儀式は精密となり、社會的規定は高尚となり、戰術また大に進歩せり。吠陀時代の武勇は漸く衰へたれども、ブンジャブ祖先の活動に見るべき國民的生活の氣力に至ては、なほ未だ亡びざるものあり。

第十章　コサラ族、ヂデハ族、及びカシ族

クル・パンチャラの諸種族、ガンガ河の上流沿岸に殖民せる時、その他のアーリア諸種族、更に東方に進みてその下流沿岸に殖民せるものあり。而してその殖民者の著名なるものをコサラ(Kosala)族、ヂデハ(Videha)族及びカシ(Kási)族とす。傳へいふ、コサラ族の祖先はブンジャブのスダス戰爭に戰ひたりと。この種族今やその僧侶トリツ[ヴシシタ]と共に東方に進みて、ガンガ河よりガンダク(Gandak)河に至る一帶の地をその有となし、こゝに強大なる一王國を創め、祖先傳來の宗教、制度、國語、學問及び技藝を移植せり。アヨドヤ(Ayodhyá)即ちオウド(Oudh)はその首府なり。

ヂデハ族はガンダク河を渡りて更らに東方に進み、ガンガ河の北方、今のチルト(Tirhút)の地に殖民せり。その古傳說によれば、その祖マダヴ、ヂデハ(Madava Videha)、その僧侶ガウタマ(Gautama)と共に、山河千里、ブンジャブのサラスヴチ河畔よりケルトに來り、アグニ神の言によりて、その住所のガンダク河東にあるを知り、遂にこゝに殖民せりといふ。この地は當時低濕にして耕作に適せざりしも、勤勉なる殖民者は沼澤を乾し、森林を燒きてその耕地を擴張し、新に首府ミチラ(Mithilá)を創建せり。

カシ族またこの時代の殖民者にして、西方より來りてガンガ河畔に移住し有名なる首府カシ即ちベナレスを創建せり、實に印度第一の聖市なり。

古今何れの殖民者を問はず、皆その母國の制度を尊崇すること、殆ど迷信に類するものあるは動かすべからざる事實なり。ガンガ河畔のアーリア殖民者またかくの如く、その祖先の宗教及び宗教的儀式を尊重し、これあるを以て自ら蠻族と異なる所以なりと信ぜり。當時、殖民者の周圍には文明の域に進まざる土蕃あり、殖民者その間に介在して、その傳來の制度を固執せしが、その後、漸次諸方を征服してその領土を擴張し、且つこの間に一種の文明を發展して、優にブンジャブの母國を凌駕するに及ても、なほその祖先の宗教を棄てず、却つて益、その形式に拘泥して、またその精神の如何を問はず、遂には一種の新宗教を見るに至れり。

以上の事實を知るは、當時印度風俗の上に來れる變化を知るに必要なり。ガンガ河畔の殖民者は、前已に述べたるが如く、ブンジャブに於て崇拜せる神を崇拜し、且つ吠陀の祈禱を用ゐたれども、その献供の儀式に至てはまた昔日の如く簡單ならず。頗細なる儀式は悉く深遠なる意味を生じ、崇拜に關する行爲は悉く神聖となり、吠陀の宗教的精神已に亡べり。その國王はブンジャブの酋長に比して富裕廣漠なる王國に君臨し、おのづから献供の儀式をして浮誇に流れしめたり。僧侶また一種の階級を造るに至り、献供の儀式を複雜にして、容易に他の行ふべからざるに至らしむるを利益とせしは怪むに足らず。加ふるに、ガンガ下流沿岸の住民は、自然の勢力に化せられて、その祖先の粗豪質朴を失ひ、溫順にして奢侈を好むの民となり、おのづから浮誇華美なる儀式を愛するに至れり。こゝに於て、冥々の間に印度宗教の精神に變化を來し、自然の勢力を歎美して、これを祭るに火に供物を捧げたる吠陀時代の精神衰へ、專らその意を献供の形式に注ぐに至れり。故に敘事詩時代にありて僧俗の腐心したる所は、崇拜の精神にあらずしてその形式にあり。而してこの形式は即ちこの時代の宗教なり。

吠陀の讃頌は史詩時代に至りて初めて分類せられたり。蓋し時代の要求に從へるなり。而して讃頌の全部はこれをリグ・エダといひ、その一部、古來より献供の際に歌はれたるものを編纂してサマ・エダ (Sáma Veda) といふ。別にヤジュル・エダ (Yajur Veda) あり、僧侶のために編纂したるものにして、特殊なる献供の儀式を記す。

以上はガンガ河畔に行はれたる三種の吠陀なれども、その後、アタルヴ・エダ(Atharva Veda)の編纂せらるゝに及びて、合せて四種の吠陀を見るに至れり。而してこれ等の吠陀の編纂せられたるは、クル・パンチャラ戰爭以前に屬す。

然れども吠陀はこの時代の唯一の宗教文學にあらず。その獨斷的註釋は夙に世に現はれ、却つてその本文よりも重要視せらるゝに至れり。この註釋を總稱してブラーマナ(Brâhmana)といふ。實に當時の文學の重要なるものなれと、一般に乾燥無味の譏を免れず。

されどこの時代の思慮ある諸王は、僧侶の訓話註釋を事としてその學を街ふの風あるを見、心甚だこれを喜ばず、その儀式をこれに委ねつゝも、自ら靈魂及び宇宙の本體につきて沈思默考せり。若し古代インドの史上最も奇なるものを求めば國王と僧侶とのこの對抗ならん。而してこの對抗より生ぜるウパニシャド(Upanishad)は、古代の印度に於て最も清新健全なる思想を表はせるものといふも不可なし。

當時この新思想を喚起するに與りて最も力ありしものを、ギデハ及びカシの諸王とす。キデハ王ジャナカ(Janaka)は、當時第一流の賢者にして、深く宗教的學問に通じ、その朝廷には一代の學者を網羅せり。かの白ヤジャル・エダ及びその註釋は、その僧侶ヤジナヴルキア(Yâjnavalkya)の編纂せる所なりといふ。然れどもヤジナヴァルキアはその朝廷に於ける唯一の名僧にあらず、ガンガ河畔の學者は、悉くヴィデハにきたりてジャナカ王の恩惠に浴せり。有名なる學問の保護者、カシ王アジャタサトル(Ajâtasatru)すら、これを見て敬じていはく、萬民ジャナカを以てその保護者なりとし、爭ふてその朝廷に至ると。以てその名望盛なるを見るべし。

ジャナカ及びアジャタサトルの名はウパニシャドに存す。然れども、ウパニシャドに關しては後章に說く所あるべきを以て、今こゝに贅せず。たゞこゝにはその古傳說二三を引用して、當時諸王が、宗教の眞味をその僧侶に說きたるを示さん。

ギデハ王ジャナカ一日ヤジナヴルキア以下三人の僧侶に會し、宗教上の問題を論じてこれを屈す。ヤジナヴルキア乃ち王に從ひて眞理を學べり。カシの僧侶バラキ(Bâlâki)、常にその學を誇る。然るに一日その王アジャタサトルに議論を挑み、遂にその破する所となりて默然またいはず。アジャタサトルこれに告げていはく、

卿何の知る所ぞ、眞理を知るものは萬物の創造者たる神のみならんと。

僧侶スヴェタケッ(Svetaketu)、パンチアラの集會にのぞみ、國王ジャイヴァリ(Jaivali)と輪じて遂に屈し、悵然として眞理をこれに學ぶ。王これがために眞理を說き、然る後告げていはく、婆羅門にしてこの智識を得たるもの、實に卿を以て初となす、故にその智識は、從來世界に於て剛帝利の專有したる所なりと。

以上はウパニシャドに存する古傳說の一部にして、僧侶、武士等の階級が、恰も後世の種味を形成せる頃、この兩階級の間に爭論の起れるを示し、且つ武士が、ウパニシャドに見るべき印度一神敎の基をひらきたることを明かにするものとす。而してギデハ王ジャナカは、これ等の武士中最も熱心なる討究者なり、その名の後世に尊敬せらるゝまた故なしとせず。

然れども印度の民なほジャナカ、ギデハ及びコサラ等の名を記するは、一はその名の國民的叙事詩ラマヤナ(Rámáyana)に散見するによる。實に印度人は、今日なほマハバラタ及びラマヤナを愛讀し、これによりて、その祖先のガンガ河畔に發展せる文明を追想す。ラマヤナの所說が事實に基けりといふは疑はし。然れども

れを讀まば當時の風俗及習慣を知るに難からず。左にその梗概を述べん。

コサラ王ダサラタ(Dasaratha)に寵妃あり、カウサリア(Kausalyá)、カイケイ(Kaikeyi)及びスミトラ(Sumitra)といふ。カウサリアは長子ラマ(Ráma)を擧げ、カイケイはバラタ(Bharata)を、スミトラはラクシマナ(Lakshmana)及びサトルグナ(Satrughna)を擧げたり。以上の王子は當時の習慣に從ひ、文武二道を學びしが、その長子ラマは眞摯敬虔にして、且つ武術に長ぜり。この後、父王ダサラタ老衰して政に倦み、ラマをイウヴラジャ(Yuvaraja)と定む。然るにその寵妃カイケイ、その子バラタをして政を執らしめんとし、老王に說きてその議を翻せり。

これより先き、ラマは戰士の大會に臨みて强弩をひき、悉く來集の戰士に克ちて、ギデハ王ジャナカの女シタ(Sita)を得たり。コサラの民これを祝せんとし、その首府アヨドヤに於ては、その準備已に成るあり。然るに、この時恰もカイケイの朱唇老王の心を動かし、その子バラタをイウヴラジャとなし、且つ十四年間ラマを追放するに決せり。

孝順なるラマはその父の命に從ひ、その妻シタ及び異母弟ラクシマナと共にア

115885

ヨドヤを去れり。市民これを見てその不幸を悲み、歔欷流涕するもの多し。この後幾許もなく、老王ダサラタ死するに及び、バラタはラマを索めて荒野に至り、これに懇請するに、國王としてアヨドヤにかへらんことを以てす。然れども、ラマは父の死を以てその約を破るを欲せず、乃ちバラタに說いていはく、卿は歸りて國王たるべしと。

ラマは十三年間その妻及び異母弟と共にダンダカ (Dándaka) の森林に徨ひ、またゴダヴリ (Godavari) の流を溯りてその水源地に至れり。當時南印度の全部には非アーリア種の土蕃住するあり。詩中の猿猴羆熊は即ちこの土蕃を指せるものとす。ランカ (Lanka) 即ちセイロン (Ceylon) の非アーリア種に至ては、作者これを妖と怪せり。

ランカの妖怪王ラヴナ (Rávana) はシタの美を聞き、ラマの在らざるに乘じてこれをその國に掠め去る。ラマその小舍にかへりて初めてその妻の在らざるを知り、百方これを索めて遂にその情報を得、乃ち南印度の蠻族と同盟し、ランカに渡りてこれを恢復せんとし、岩石を海峽に移して橋梁となし、進みてランカの都市を圍めり。ラヴナその國を解かんとして屢々部下の酋長を遣せしも、戰ふ毎に敗れて命を殞さゞるものなし。こゝに於て、ラヴナ自らその兵を率ゐ出でゝラマの軍と戰ひて遂にその殺す所となる。この時シタその身を火中に投じて傷を負はず、よりて以てその貞操を全うせるを證せり。

故國を出でゝ十四年の後、ラマ及びシタはアヨドヤにかへり、その王位に登れり。然れどもその民シタの貞操を疑ひ、容易にこれを信ぜず。ラマこれを見て遂に可憐なるシタを追放に處せり。

シタ已に寃を被ふりてアヨドヤを去り、賢者ヴルミキ (Valmiki) の隱栖に赴きて雙子を擧げ、ラヴ (Lava) 及びクサ (Kusa) と名づく。雙子長じて武藝に達し、勇敢任俠なり。ヴルミキはラマヤナの詩を編み、雙子に敎うるにその父ラマクの功業を以てせり。

ラマはその最上權を表示せんがために、有名なる馬祭を擧行せり。偶〻一頭の馬祭場を逸するものあり。然れどもラマの怒に觸れんことを恐れてこれを留むるものなし。馬は遂にヴルミキの隱栖を過ぎんとして、ラヴ及びクサの捕ふる所

となれり。ラマの親兵これを見て馬を還さんことを求む。ラヴ及びクサ應ぜず。こゝに於て、ラマ自らその隱栖に來りて、勇敢なる二男子の己の功業を歌ふを聞き、遂にその子なるを知りてこれを抱き、潸然として泣けり。然れども、コサラの民なほシタを疑ひ、その貞節を信ぜず。憐むべきシタは冤を被ふりて遂に地に歸せり。シタはリグ・エダの農神にして畦を代表す。ラマヤナの作者がこれを以て地に出で地に歸れりとせるは、蓋しこれに基けるなり。然れども、今日に於ては印度の民この比喩を知らず、一般にシタを以て理想的女子となし、その溫良、その貞節、その不幸のまた世に見るべからざるを追想して、その子に名くるにシタの名を以てするを憚かるに至る。而して印度女子のこの傳說を聞くもの、皆シタを以てその摸範とすること、印度男子のラマを以て摸範とするに異ならず。要するにマハバラタは英雄詩にしてラマヤナは敎訓詩なり。而してこの二大叙事詩が、インド國民の品性を陶冶したるの功は、聖書がキリスト敎國民を感化したるの功に比して劣ることなし。

第十一章　風俗及び文化

ガンガ河畔の印度國民の狀態、その王國の繁榮、その學問の興隆、その宗敎的儀式の發達、その生活の進步につきては前章に述べたり。この時代に土著との戰爭はその局を結び、外敵の來りてその領土を侵し、或はその文明の發達を妨ぐるものなく、印度の諸種族今やジュムナ河畔よりガンダク河畔に蔓延して、またその周圍に別種の世界を有せず。北には巍峩たるヒマラヤ山あり、南には蔚蔥たる森林及びヰンドヤ山あり、東にはベンガルあれども未だ發見せられず、西にはブンジャブの同族ありて外敵の侵略を防げり。故にクル、パンチャラ、コサラ、ヰデハ、その他ガンガ河畔の諸種族は、當時全く世界より隔離して、古今に類例なき孤立的生活をなし、その王國を以て世界とし、また他に文明的宗敎、宗敎的儀式、國語及び學問あるを知らず思へらく、人類とは吾等インド人の謂なり、文明世界の社會的法律とは吾等の風俗の謂なりと。されば、その風俗習慣及び法律の確立、古今東西にその比を見ざるに至れるもまた怪しむに足らず。

アーリア種の印度人は、吠陀時代に絶えず土著と戰ひ、そのこれを征服してより多年これと社會的交際を絶ち、征服者と被征服者との間には、截然たる區別を設けてその混和を忌避せり。印度の都市村落に階級の別起れるは、實にこれを以て嚆矢となす。

アーリア種非アーリア種の別は、叙事詩時代に至りてもつづからアーリア種階級の別を生ぜり。印度の宗教的儀式が叙事詩時代に至りて精密となり、ガンガ河畔の諸王その華美を競うてその權勢を誇るに及びその儀式を掌る僧侶の、一階級をつくりて世に尊敬せらるるに至りたるは怪むに足らず。この後、僧侶は專心一意これ等の儀式を學び、遂にこれを能くするもの、僧侶に限るの觀を呈するに至る。而して、子孫代々その職を繼ぎて普通人民と區別を生ずるに及び、その階級以外の男女と婚を結ぶを以て、その品位を傷くるものなりとするの風を生じ自ら普通人民よりその妻を娶るも、その家に生れたる女子をば、決して他の階級の男子に許さず。この習慣漸次確立して、僧侶は遂にブラーマンといへる、階級をつくるに至れり。

剎帝利の起れるまたこれに類するものあり。吠陀時代には、國王は名ある戰士にして、戰時には部下の衆を率ゐて戰ひ、平時にはその土地を耕し、その家畜を牧しその生活毫も他の人民に異らざりしが、叙事詩時代に至りては廣大なる領土を有し、壯麗華美なる宮廷に起臥し、配下の民、これを尊敬することまた昔日の比にあらず。而して、その歳月を經て兩者の別益〻顯著なるに及び、その女子の、他の階級の男子と婚を結ぶを以て理に戻るものとするに至り、所謂剎帝利の一階級を生ぜり。されど、戰士にして普通人民の女を娶るの風はやまず。

アーリア種の人民は當時なほギサ(Visa)の古名を有し、所謂吠奢(Vaisya)の一階級を造れり。而してアーリア種のために征服せられたる非アーリア種の土著はこの時已にアーリア化して、その文明的生活を學び、その文明的國語を用ゐたれども、なほその輕侮を免るゝこと能はず、その社會にありて戍陀羅(Sûdra)といへる最劣等の一階級を造れり。

以上は印度社會の四階級にして、世にこれを種姓といふ。而してこの種の區別は他の諸國民に於てもまた見ることを得べしと雖も、その制度の鞏固なる思ふに印

度の如きはあらざるべし。ヨーロッパに於ては、僧侶、貴族、平民の三階級、中世の社會を形成し、その狀インドの婆羅門、刹帝利及び吠奢に似たるものありしも、その僧侶は終生娶らず、普通人民の才學あるもの多くその職を繼げり。武士また喜んで他の階級より勇敢なる戰士を迎え、硬直なる平民は戰場に於て、國會に於て、その由自及び特權のために戰ひ、漸次權力と富とを得て、遂に階級の別を撤するに至れり。されそのインドの階級に異る所以なりとす。印度に於ては、今より實に百年前まで近世文明の影響を受けず、古代種姓の別は、その形をかえてなほその社會に存じ外來の客をしてその奇に一驚を喫せしむるものあり。

以上述べたるが如く、アーリア種の印度人は、史詩時代に至りて三階級に分れたれども、依然アーリア種共通の特權を享有し、その宗教的學問を學びその宗教的儀式を行へり。その男子は幼にして父母の膝下を辭し、數年間グルの家に寓して吠陀及びその他の學問を學び、その俊秀なるものは更にパリシャド及びその他の學校に赴けり。當時クル或はパンチャラの學生にして笈を負ひて、ギデハ或はカシの有名なる學校に遊ぶもの少からざりきといふ。ガンガ河畔の諸種族は互に相對峙し、時には干戈を動ぜしことなきにあらざれども、その學校、その僧院、その僧侶及び教師は常に世の尊敬を受け、その學問を以てその家族の名を知られたるものには吠陀時代のヴシシタ、ギスワミトラ(Viswámitra)及びガウタマの子孫あり。學者の有名なるものに至ては諸國の朝廷に招かれ、その學問に應じて報酬を得たりき。ギデハ王ジャナカは、即ち當時の學者の保護者中最も有名なるものにして、その朝廷の大集會を記せるブリハダラニアカ・ウパニシャド(Brihadáranyaka Upanishad)の記事は、よくこの時代の風俗を明かにするものあり、左にこれを引用せん。

ギデハ王ジャナカ神を祭り、僧侶に贈る所多し、クル及びパンチャラの婆羅門また來りてこれに會せり。王その學殖を知らんとし、乃ち一千頭の牝牛を柵内に放ち、その角に結ぶに黄金のバダ(Pada)十箇を以てし、從容として來集の僧侶に告げていはく、卿等婆羅門の最も賢なるものをしてこの牝牛を柵外に逐はしめよと。來集の婆羅門よくこれに應ずるものなし。然るにその朝廷の僧侶ヤジナヴルキア、その一弟子に命じてこれに當らしむ。弟子答へていはく噫沙門の光榮これに過ぎずと、由てこれを柵外に逐へり。來集の婆羅門これを見て憤怒し、乃ち難問を發し

てヤジナヴルキアを苦めんとせしも、遂にこれを屈することを能はず。時に博學の一淑女またその席に列するものあり、起ちてヤジナヴルキアに問ていはく、妾はカシ或はヰデハの戰士が、その弓を絞り、その牛に二箇の鏃を結べる矢を把りて戰場に臨めるが如く、二箇の問を以て貴僧と戰はんとす、貴僧幸に答ふる所あれと。ヤジナヴルキア快諾し、その問に答へてこれを屈す、集會はこゝに於てその學問の第一なるを承認せり。

以上の記事は當時の風俗及び女子の社會的地位を明かにす。實に古代印度に於ては、女子はその運動を束縛せらるゝことなく、自由にその時代の學問を學び、献供に與かり、集會に臨み、正當なる影響をその社會に及ぼせり。公平なる史家は、必ずや印度女子の社會的地位の、ギリシア及びローマの女子の地位に比して勝るものありしを認むるならん。

男子は學成るに及びて妻を迎え、一家を成し、その爐に聖火を點じ、日毎に供物をこれに捧ぐ。これを以て、敬虔なる印度人の家には聖火長へに滅することなし。この外四季の祭祀あり家族の事情に從ひて行ふ種々の儀式あり、後章に於てこれを說くべし。當時國王及び富豪は華美なる儀式を喜びたれども、敬虔なる印度人は、その貧富に論なく、吠陀時代の習慣に從ひて、その家の爐邊に簡單なる儀式を行ひ、偶像の崇拜及び神殿の創建を知らざりき。

旅客欵待は宗教的義務の一なり。而して宗教的義務の精神を說きて懇切なるものをタイチリヤカ・ウパニシャド (Taittiriyaka Upánishad) とす。いはく

眞實を語れ。卿の義務を果せよ。吠陀を學ぶことを忘るなかれ。卿の師に報いたる後妻を迎え子を擧げよ。眞實を遂するなかれ。義務を離るゝなかれ。有益なるものを忘るゝなかれ。偉大を忘るゝなかれ。吠陀の敎を忘るゝなかれ。

神及び祖先を祭ることを忘るゝなかれ。卿の母をして神の如く尊からしめよ。卿の父をして神の如く尊からしめよ。清淨なる行爲は尊敬せらるべし。吾等の行ひたる善業は卿のために尊敬せらるべし。

富者の富は金銀、寶玉、車馬、奴隸、家屋、土地及び家畜等より成る。而して印度人は當時已に金、銀、錫、鉛及び鐵の用を知り、また象を馴らしこれを使役し、車馬及び女子の

奴隷と共に贈物となしたりといふ。米、小麥、大麥及びその他の穀物は當時の食物にして牛乳また好んでその食物調理に用ゐたる所なり。牝牛の肉またその食卓にのぼり、一種の酒は獻供に用ゐられたりき。

古代印度の女子が、その影響を社會に及ぼせること、前已にこれを述べたり。現に印度に行はるゝ幼女結婚の弊風の如きは、決して古代の習慣にあらず、マハバラタ及びラマヤナによるも、王侯の女妙齡に達して初めて婚を結びたること明かなり。寡婦の再婚嚴禁もまた後代の習慣にして、古代には再婚に關する儀式ありしも今傳はらず。血族結婚は三代至乃四代の間は禁ずるを例とせり。

古代の印度人は吠陀を學ぶことを以てその最も重要なる義務とし、また吠陀を以てその學ぶべき學問の全部を包括すとなせり。されば、科學の初めて印度に起るに及び、吠陀の附錄視せられたるは怪むに足らず。實に印度に於ては、宗教的儀式研究のためにその智識發達し、科學發見せらるゝに至れりといふも決して過言にあらざるべし。蓋し獻供の時間を定むるの必要は、天文の觀測を刺激し、僧侶はこの必要に迫まられて連夜太陰のナクシャトラ (Nakshatra) 〔星宿〕 の圈内を過ぐるの狀を觀察し連日太陽の南北に循環するの狀を觀視するに至れるならん。而して聲音學の研究また、獻供の定式に一字の發音を誤るも神怒を招くとせられたるに起り、文法及び字學は神聖なる原文の正解に必要とせられ、哲學と神學との結合またその釋のために研究せられたるならん。

以上はガンガ河畔の諸學校に於て學ばれたる科學にして、その宗教的儀式の研究に端を發したることは、印度史上甚だ重要なる事實にして、その宗教と密接なる關係を有する一切の科學は、外國移植のものにあらず、實に印度固有の產物なりき。

初歩の天文學は吠陀時代に已に世に存せしも、その大に發達したるは史詩時代にありとす。印度の天文學者は一年を十二ヶ月に分ち、太陰曆と太陽曆とを調和せんがために、毎五年に閏をおき、且つ太陰の經過する二十八宿を觀測して、一々これに名稱を付し、また太陽の赤道通過を觀察して至點の位置を明かにせり。至點の位置を觀測せるは、吠陀の編纂完成せる時なりといふ。故に一部の數學者はこれによりてその編纂を前一一八一年なりと算せり。

文法、字學及び聲音學はまた祈禱に必要なるものとして、史詩時代に意を用ゐて

研究せらるゝに至れり。これなほ獻供の時間を定むる必要より、天體の觀測せらるゝに至りたるが如し。倫理、論理またその意を用ゐて研究したる所なり。數學に至ては印度の科學中最も有名なるものにして、史詩時代に大に發達し、大小種々の祭壇を築くの法は、幾何學の基をひらけり。

この時代の法律はなほ粗野にして、火驗の法を認めたりき。眞理を發見するは實に當時の法律の目的にして、法律は即ち印度諸種族の見て以て眞理としたる所なり。ブリハダラニアカウパニシャドにいはく、若しこゝにこれ眞理なりと宣言するものあらば、衆これを以て法律を宣言せりといふ、若して法律を宣言するものあらば、衆これを以て眞理を宣言せりといふ、兩者は必竟一なりと以て古代印度人の法律觀を見るべし。

第十二章　宗教

史詩時代には印度宗教の精神漸次變化せり。蓋しその富增加し、その文明發達し、その生活また容易なるより、民漸く獻供の華美を喜ぶの風土を生じ、世襲僧侶の階級またこれに乘じてその利益を計りしがためなり。こゝに於て、その崇拜者は崇拜の眞對象たる神を忘れ、專らその意を儀式の精緻、祭壇の構造、供養の時間、祈禱の發音等に注ぎ、吠陀時代の精神また見るべからざるに至れり。

一國民の文學はその國民心情の反映なり。印度國民の宗教形式に流れて、その宗教文學の生氣を失へるまた怪むに足らず。史詩時代の大著述と稱せらるゝかのブラーマナは、たゞ區々の儀式に一々理由を附し、原文に獨斷的解釋を加へ、形式違背者の受くべき責罰を說き崇拜者の儀容を定むると詳かなるのみ、その間また吠陀讃頌の熱心を見ること能はず。要するに、ブラーマナは人民の妄信屈從と僧侶の專權とを現はすものとす。

されど、ブラーマナの古傳說にして興味あるものなきにあらず。而してその最も學者間に喧傳せらるゝものを、舊約全書の洪水の記事に類するものとす。

人類の祖先マヌ(Manu)一日その手を河流に洗ふ。時に魚あり、來りてマヌに謂ていはく、予を飼へ、予は卿を救はんと。マヌ乃ちこれを飼ふ。魚またマヌに告げていはく、この年必ず洪水あらん、卿宜しく舟を造りて予に從ふべしと。果然

洪水は來れり。マヌ直にその造れる舟に掉し、魚を放ちてその後に隨ひ、遂に北方の山巓に達してその舟を樹幹に繫ぎ、洪水の去るに及びて山を下れり。洪水は萬物を滅ぼし、この世界に生殘するものたゞマヌあるのみ。(Satapatha Brahmana)

プラーマナの古傳說には、リグ・ヱダの比喩變じて神話となれるものあり、かのプラジャパチ (Prajápati) が、その女を誘惑して宇宙を造れりといふは、太陽と黎明の女神とに關するリグ・ヱダの比喩の變形せるものとす。前第五世紀の頃、クマリラ (Kumárila) この神話を解釋していはく、造物主プラジャパチは太陽にして、萬物を保護するが故にこの名あり。その女ウシャス (Ushas) は黎明なり。而してプラジャパチのウシャスを愛したりといふは、これ太陽の昇天黎明に次ぐを意味するのみと。

他のプラーマナにはまた世界創造に關する記事あり。タイチリヤカ・ブラーマナ (Taittiriyaka Brahmana) によるに、原初に水世界をおほひ、その表面に蓮の葉を見るのみ。プラジャパチ乃ち野猪の姿をなして深く水底に潛み、土を造りてこれを布き固むるに砂礫を以てせり。これ即ち地球なりと。

サタパタ・ブラーマナ (Satapatha Brâhmana) によれば、神とその敵アスラ (Asura) とは共にプラジャパチよりいでて、その權力を爭ふや、地ために蓮の葉の如く震動せりといふ。且つこのブラーマナによるに、プラジャパチ初めて世界に生れ、鳥類及び爬蟲類を造りしも、食物なきがために悉く死せり。こゝに於て新に哺乳類の乳房を造り、被造物初めてその生を全うすることを得たりと。

吠陀時代の印度人は、自然の崇拜より自然神の崇拜に移り、「世界の初、神ひとりあり、宇宙の全部その手に成れり」といへる思想に達せり。史詩時代の印度人はこの思想を受けて神の宇宙を造りたる方法に關して種々の推測をなし、更に不可思議の神を知らんとして熱心に勉むる所あり。而してこの傾向を現せるものはウパニシャドなり。ウパニシャドは世界の文學中最も有名なる一著述なりとす。

宇宙靈魂の思想はウパニシャドの哲學の骨子なり。而してこの思想は、一般に所謂一神敎とは稍その趣を異にす。蓋し他の諸國民の一神敎は、神と万物とを區別すれども、ウパニシャドに於ては神を以て宇宙の本體となし、万物を以てその一部となし、万物より出でゝ神に歸るとすればなり。

ウパニシャドの哲學は、可憐なるサチアカマ(Satyakáma)の自然より學びたる眞理なり。サチアカマは奴隸の子にしてその父を知らず、稍長ずるに及び、當時の習慣に從ひてグルの門に至るや、グルコレに問ふにその家族を以てす。サチアカマ實を以て答へていはく、師よ、予は予の父を知らず、予曾て予の母に問へるに、母告げていはく、若うして婢たりしとき卿を孕めり、卿の父に至てはその誰なるやを知らずと。グルこれを聞きてその率直を喜び、その門に入ることを許せり。

サチアカマは當時の習慣に從ひてその師の家僕となり、出でゝその家畜を守れり。この間絶えず自然の現象に注意し、夕に牝牛をその小舍に逐ひ、薪を集めて火を焚き、その四邊に飛ぶ禽鳥を見て眞理を學べり。その師驚きて問うていはく卿は神を知るが如し、誰かまた卿にこれを敎えたると。サチアカマ答ふるに自然より得たるを以てす。而してその自然より得たる眞理なるものは、宇宙これ神なりとらふにあり。(Chhandogya Upanishad)

ウパニシャドの哲學はまた禎學ヤジナヴルキアのその妻マイトレイ(Maitreyi)に敎えたる眞理なり。ヤジナヴルキアそのその妻に與ふるに種々の財寶を以てす、而かも妻悉くこれを拒みて、その生涯の不死なちんことを願ふ。ヤジナヴルキアその希望の高尚なるを聞きて大に喜び、乃ちこれに敎ゆるに、宇宙靈魂の存在を以てせり。(Brihadaranyaka Upanishad)

ウパニシャドには宇宙靈魂を說くこと極めて懇切にしてその簡約、莊重、熟誠は後人の口吻に似ざるものあり。

その肉體は精靈、その形狀は光明、その思想は眞理、その性質は在らざるなくまた見るべからざる潤氣の如き智者、彼より一切の云爲、一切の願望、一切の芳香及び佳味の來る智者、一切を包括し、決して語ることなくまた驚かされたることなき智者。

彼は穀粒よりも小なる、麥粒よりも小なる、芥子の種子或は加拿利葡萄の仁よりも小なる、吾が心の靈魂なり。彼はまた地よりも大なる、天空よりも大なる、上天よりも大なる、吾が心の靈魂なり。

一切の云爲、一切の願望、一切の芳香及び佳味の由て來る彼、一切を包括し、決して語ることなくまた驚かさるゝことなき彼、彼は吾が心の靈魂にして神なり。吾

こゝを去らば渠に呑すべし。(Chandogya Upanishad)

ウパニシャドの哲學を說けるものに巧妙なる百比喩あり。宇宙靈魂は蜂の造かに樹木より集めきたりて成せる蜜の如し、河の遠く流れきたりてその形を沒する海の如し、鹽分の已に見るべからざる鹽水の如しと。

弟子問うていはく、誰かこれを欲して心動き、命を手足に傳ふるや、誰かこれに命じて呼吸生するや、誰かこれを欲して吾等言語を發するや、いかなる神かまた命を目或は耳に傳ふるや。

敎師答へていはく、そのものたる耳の耳なり、心の心なり、言語の言語なり、呼吸の呼吸なり、目の目なり……そのものたる言語を以て表はすべからず、然れども言語これによりて表はさる……そのものたる心を以て考ふべからず、然れども心これによりて考ふ……そのものたる目を以て見るべからず、然れども目これによりて見る……そのものたる耳を以て聽くべからず、然れども耳これによりて聽く……そのものたる呼吸を以て呼吸すべからず、然れども呼吸これによりて呼吸す、そのものたる神のみ、そのものたる民こゝに崇拜する神にあらず。(Kena Upanishad)

以上述べたる所によりて、古代の賢者が、無意味の儀式及び庶民の崇拜せる神の極格を脫し、別に高尙なる宗敎を起して、所謂心の心、呼吸の呼吸を理解せんとしたることを知るべし。[脚] 而してこの事たる、實に三千年前の印度人が、熱心に不可思議の神を知るに勉めたることを證するものにして、敬虔なる當時の思想家の想像せる神は、古來の神と稍その趣を異にし、無形無象、獨立自在の靈魂なりき。

一切の光明を抱き、その形見るべからず、その體毀るべからず、淸淨無垢にして惡に觸れざる靈魂、賢明、普遍、獨立、自存の豫見者、彼は長へに萬物の方向を定めて誤ることなし。(Isa Upanishad)

インド人の神の性質を知るに勉めたること已にかくの如し。而してその結果たるウパニシャドは、世界の人類がその創造者を理解せんとして成せる最古の著述として千歲に傳ふるに足る。

宇宙靈魂の說は前に述べたり。されど、他の新思想にしてまたウパニシャドに散見するものあり、靈魂輪廻の說これなり。印度以外の諸國民は靈魂の復活を信ぜ

しも、印度國民はその過去幷びに未來に存することを信ぜり。而して始めてこの思想を說けるものをウパニシャドとす。

靈魂輪廻の說たる、靈魂がその行爲の善惡に從ひて、種々の肉體に寓し、然る後その不完全を脫して遂に神に合すといふにあり。ウシタキ・ウパニシャド(Roushitaki Upanishad)にはく、彼はその行爲に從ひ、その智識に應じ、或は昆蟲或は魚介、或は禽鳥、或は獅子、或は野猪、或は虎、或は蛇、或は人、或はその他のものと生ると。而してこの靈魂は種々の世界を經て清淨となり遂に神に合すといふ。

靈魂輪廻の說は實に印度人初めて唱へたる所にして、古代諸國民の輪廻說はこれを採りたるに過ぎず。而して印度人のこれを說明するや、巧妙なる比喩を以てしたるもの多し。かの靈魂の輪廻を以て、毛虫の繭あり繭に移るに比し、また金の金匠の手を經てその形を變ずるに比したるが如きこれなり。而して靈魂の不完全を去りて遂に神に合するは、前已に述べたるが如し。ブリハダラニアカ・ウパニシャドにはく、死者の肉體の地に橫はるは、ほゞ蛇殼の蟻塔に橫はるが如し、然れども肉體を離れたる不死の精靈は神なり光明なりと。

世界の創造はまた古代賢者の腦髓を攪亂せり。チャンドギア・ウパニシャドによるに自存の靈魂は初め雞卵の狀をなし、三分して天地を生ぜりといふ。されど別にまたその說く所によれば、魂靈火を生じ、火水を生じ、水地を生ぜりと。

アイタレヤ・アラニヤカ(Aitareya Aranyaka)には宇宙の原質を論じ、リグ・ヱダ及びユダヤの創世記に於けるが如く、これを以て水となせり。

ブリハダラニアカ・ウパニシャドによるに、自存の靈魂は男女の兩性となり、万物これより成れりといふ。

死はまた生と共に當時の賢者の不可思議とせる所なり。古傳說によるに賢者ナチケタス(Nachiketas)死に求むるやその神秘を漏さんことを以てす。然れども死これを欲せずして謂ていはく、

百歲の子孫を欲するか、家畜、黃金、象及び馬を欲するか、卿これを擇べ。地を廣く劃してこれに住し、卿の望むが如き許多の收穫を得て生活せんと欲するか、卿これを擇べ。

卿若しこれに等しきものを得んと思はゞ、富と壽とを擇べ。ナチケタスよ、全地

球の王たれ。吾卿をして万望を成就せしめん。

衆人の達すること難き願望と雖も、卿欲するものあらばこれを求めよ。四輪車、に駕し、樂器を手にせる美小女の如きは、實に衆の得べからざるもの、吾卿に與ふるものに伴ふのみ。たゞ死につきては、また吾に問ふこと勿れと。

然れども、ナチケタスいはく、嗚、死よ、卿の盲ふ所のものゝ如きは永續明日を越さず何となればこれ五感を損ずればなり。一生なほ短し、況んや一日をや。卿その馬を留めよ、卿のために舞踏と音樂とを留めよと。

死は敬虔なるナチケタスに迫られて、遂にその大秘密たる印度一神教の根本思想を說けり。いはく、

その靈魂の默思によりて靈魂を認識する賢者……神の如き賢者、彼は實に悲喜の情を脫す。

これを聞き、これを悟れるもの、一切悲喜の情を脫して、聰明なる本體に達せるもの彼は歡喜の理由を有するが故に歡喜す。嗚、ナチケタスよ、吾は神の家の開かれたるを信ずと。(Katha Upanishad)

史詩時代の印度人が、神、靈魂、生、及び死の神秘を學ぶに勉めたることかくの如し。而してその思想たる空想を変ゆること多く、且つ巧妙なる比喩及び古傳說の形をなせりと雖もその眞理を探らんとするの熱心に至ては實に驚かざる能はず。獨逸の大哲學者シオペン・ハウエル、曾てウパニシドを激賞していはく、その文章はみな深遠獨創及び莊嚴なる思想を表はし、高尙、神聖、熱烈なる精神全篇を貫けり。吾等を繞る印度の空氣及び獨創的思想……これ予の生涯の慰藉なりき。思ふにまた死の慰藉ならんと。

第三期　理論時代（印度種族の膨張　一〇〇〇—三二〇年前）

第十三章　インド種族の膨脹

印度のアーリア種は吠陀時代にパンジャブの土著を征服して、インドス河及びその支流沿岸の地に殖民し、史詩時代に至りて、ベハル(Behar)に至るガンガ河の流域に强大なる諸王國を創建せり。然るに理論時代には、その勢力をヒマラヤ山より海に至る全土に及ぼし、その文明文化及び宗教を印度大陸に擴張せり。この時代

を一つに哲學時代といふは、その文學の性質によりて名づけたるものとす。

ヰデハ人は、叙事詩時代にチルヒ即ち北部ベハルにその王國を創建し、その後マ摩揭陀(Magadha)即ち南部ベハルに殖民せり。この地方の土民は慓悍にして戰を好み、新文化に接して頓にその勢力を伸べ、漸次摩揭陀を以て印度最強の王國となせり。

マハバラタ戰爭の頃には、組織兒曼なる戰士ジャラサンダ(Jarasandha)摩揭陀に君臨せりといふ。印度の記錄には、ジャラサンダの後二十八王ありて統治せることを記す。然れどもなほその名を擧ぐるのみ、且つその眞僞に至ては容易に知るべからず。

前六〇〇年の頃、シスナガ(Sisunāga)摩揭陀に新王朝をひらき、始めてその地に首都ナガを創建せり。シスナガより四世の王頻毘沙羅(Bimbisāra)賢明にしておく衆を愛し、在位前五三七年より四八五年に至る。かのサキヤ(Sākya)族の大聖釋迦摩佛陀(Gautama Buddha)が世界三大宗教の一たる佛教を說きしは實にこの時代なり。故に王の世は印度及び世界の史上長くに朽ちることなかるべし。

傳ふる所によるに、頻毘沙羅王はその子阿闍世(Ajātasatru)のために殺されたりといふ。阿闍世王は前四八五年より四五三年に至るまで摩揭陀に君臨し、大にその領土を擴めたり。當時アンガ(Anga)即ち東部ベハルは摩揭陀の所領なりしが、王はコサラ及び他の古代諸種族を征服して、更にその權力を西部及び北部ベハルに植え、またヒマラヤ山を越えて北部ベハルにきたれるツラン種のヴァジ(Vajji)を防がんがために、波吒釐子城(Pāṭaliputra)即ちパトナ(Patna)の都市を創建せり。

阿闍世王の後四王を經てシスナガ王朝亡ぶ、實に前三七〇年の頃なり。シスナガ王朝の後、ナンダ(Nanda)及びその八子王位に登り、その統治約五十年に及ぶ。かのアレクサンドル大王のプンジャブ侵略は、この王朝最後の王の世にあり。大王の兵を率ゐてプンジャブにきたるや、印度の野心家に旃達羅笈多(Chandragupta)といへるものあり、ナンダのためにその國を逐はれて、欵を大王に通じ、その陣營に客となれり。然れども、その後大王の不興を蒙りてその陣營を遁れ、大王の死後、プンジャブの戰士をその麾下に集めて、前三二〇年の頃、一新王朝を創建し、始めて北部印度の全部を統一し、印度の史上に一新期節をひらけり。理論時代は實にこの新王朝を

以て終を告ぐるものとす。

摩揭陀の數百年間强盛を極むるに當りて、周圍の諸王國またその影響を被ふらざる能はず。アンガは即ち摩揭陀の直轄に屬し、ヴンガ(Vanga)即ち東部ベンガル、羯陵伽(kalinga)即ち南部ベンガルまたこの時代に印度文明の曙光に接し、第四世紀の終には、これ等の地に强大なる諸王國を見るに至れり。

グジラト(Gujrat)は夙にアーリア人の殖民したる所にして、かのクリシナの古傳說によるもマハバラタ戰爭時代の種族の一部、ジャムナ河畔を去りてこの地にきたりたること明かなり。而して前第四世紀には、この地方の强國民となるものにスラシトラ(Surashtra)人あり、マルワ(Malwa)また夙にインド化しウジャイン(Ujain)の諸王國また理論時代の文明國中に數ふべし。

印度殖民の波はまたギンドヤ山を越え、强大なる案度羅(Andhra)王國、ナルバダ(Narbada)キストナ(kistna)兩河の間に興り、近世のアマラヴチ(Amarávati)附近にその首府を置けり。案度羅朝はアーリア人の文明を採用し、その國內に學校を設けて學問を興隆せり。この時代にデカン(Dekhan)に生れしアパスタムバ(A'pastamba)は、北部印度のガウタマ或はヴシシタとその名を齊うす。

アーリア人の文明はまたキストナ河外の地に及び、チョラ(Chola)、チェラ(Chera)パンディア(Pandya)の三王國、印度の南部に興り、數百年間相鬩ぎて存在せり。北部の人民にして極南のパンディアを訪へるもの、海路グジラトより來れるアーリア人を以て初めとすといふ。

この後、印度の商業家はセイロン島の象牙及び眞珠に富ひを知ふ、遂にこの地にきたれり。前第五世紀に摩揭陀王シンハヴァ(Sinhavahu)の子ヴィジャヤ(Vijaya)その故國を逐はれて海路この島にきたり、土民を征服して一王國を創建せりと傳ふ。

以上述ぶる所によりて、アーリア人の文明が印度の全土に及べるを知るべし。

實に前第四世紀はアーリア種族の勢力を振ひたる時代にして、强大なるアーリア諸王國、或はその文化及び宗教を採用せる他の王國、印度の各地に存在しその影響を受けざるものたゝ沙漠及び荒野あるのみ。

旅達羅寔多が、前三二〇年の頃、摩揭陀の王位に登りたることは前已に述べたり。當時ギリシア人メガステネス(Megasthenes)シリア(Syria)のギリシア王セレウコス

(Seleucus)の使節として摩揭陀の首府にあり(前三一七年)筆を執りてその見聞せる所を記せり。而しかもその記事はまた當時の印度人の勢力を知るべきものあり。その記事によるに、摩揭陀はガンジスよりベハルに至る北部印度を領し、その王旃達羅笈多は常備軍として歩兵六十万、騎兵三万、象九千を有したりといふ、以てその富の莫大なるを知るべし。摩揭陀の東にはベンガル及びオリッサありて諸王國に分れ、その西南には案度羅朝その領内に外壁を繞せる都市三十を建て、歩兵十万、騎兵二千、象千を有せり。西に於てはまたグジラトのサウラシトラ(Saurashtra)最も勢力を有し、歩兵十五万、騎兵五千、象千六百を有し、その海岸の首府は海上貿易の大市場たり。セイロンもまた已にメガステネスの知れる所にして、その地、金、眞珠及び象を以て顯れたりといふ。

紀元前第十二世紀にインドス及びガンガ河の流域を限とせし印度諸王國の狀態を以て、前第四世紀に印度の全土を包括せし諸王國の狀態に比すれば、理論時代數百年間に於ける政治上の變遷を知るに難からず。

アーリア殖民及び征服者の、政爲の氣象に富めるは實に驚くべきものあり。理論時代の初には印度はなほ未知の大陸なりしに、その終には全くその狀態を一變せる、その種族の有爲なるにあらざるよりはかくの如くなるを得じ。廣漠たる印度の地、民の住居するに足るもの約四十餘萬方里、而かもその史詩時代に探檢せられたるは僅かに四萬方里に過ぎず。數百年間、ヂンジャブの土著と戰ひし剛勇無双の戰士ガンガ河の流域を下りて強大なる文明的諸王國を創建せしその子孫は、その代にその領土を擴めたること決して鮮小にあらず、然れどもこれたゞ印度の一部にその指を染めたるのみ。その殖民せるガンガ及びインドス河の流域は、印度にありて最も肥沃なる土地なりと言ふべしてもなし、然れども當時印度の大部なほ探檢せられず、アーリア種の文化或は宗教を知らざる蠻族その地に踞せり。かの史詩時代の詩人がこれ等の蠻族を記述するに當りて、猿猴、熊、妖怪の類となせるは、たゞその想像によれるのみ。

印度の大部に踞せる蠻族を征服し、或は少くともその部落と接觸し、これを文明の域に導きて、その國土を印度王國に併せたるは理論時代にあり。教化は難し征服は易し。されど、理論時代のアーリア人は、その征服する所、必ず文明、製造及び

平和的技藝を傳べ、その行く所、必ずサンスクリット語、ヒダの儀式、印度の宗教を擴め、その移住する所、必ず學校を設立してその法律、宗教及び學問を敎え、その殖民する所、必ず土民を教化してアーリヤ諸王國を創建せり。これを以て、前第四世紀には、ベンガル及びカリンガに諸王國興り、スラシトラまたインド諸王國中武勇を以て鳴れり。案度羅人は有名なる學校を設立して學問を敎え、バンヂア人、チェラ人及びテミル人、またカンチ(Kanchi)及びその他の古代諸都市に於て印度の學問を修め、印度大聯合の一部と為れり。而してこれ理論時代の特色にして、アーリア人が曾だに兵力を以て印度の全土を征服せるのみなず、またその宗教及び文明を布けるを實にこれを以て初とす。

ヴンヂャブ及びガンガ河流域のアーリヤ人は、力めてその地方の土著を驅逐或は殺戮せり。現今北部の印度人は、殆んど純粹なるアーリア種族なるはこれによる。然れども土著の殺戮或は驅逐は、印度の如き大陸に於ては實に容易の業にあらず、これを以て、理論時代のアーリヤ殖民者はその方針を更め力めてこれを文明化せり。現今ベンガル及び南部印度の民族が概して非アーリア種の子孫なるも、その宗教、國語及び文明に於て、古代のアーリア殖民者と異るなきはこれによる。漁獵を業とするベンガル濕地のカイバルタ(Kaibarta)チャンダラ(Chandála)の諸種族は、淺かにアーリア人の技藝、言語及び宗教を學び、アーリア移住者の下にありて平和なる生活をなせり。移住者の子孫は、今日に至るまでベンガルの優等種姓を形成す。南部に於てはアーリア移住者の數なほ少く、その土著はアーリア人の宗教を採用してその種族中より僧侶を出せり。故にアーリア種の遺血は、ガンガ河の流域を去るに從ひて漸くその粹純を減ずるものとす。

古代印度の學者はこの差別に注目し、これを表はすにその一法の筆法を以てせり。左に前第六世紀の頃に在世せしバウダヤナ(Baudhâyana)の記事を引用して當時の狀態を明かにせん。

世域はデゥムナ、ガンガ河間の地を以てアーリア種の土地なりといふ。

アヴンチ(マルワ)、アンガ(東部ベハル)、摩揭陀(南部ベハル)、スラシトラ(グゥラスト)、デカン、ウパヴリト(Upávrité)、シンド(Sindh)の住民及びサウヴィラ(Sauvira)人は雜種なり。

アラッタ (A'ratta) 人(プンジャブ)、カラスカラ (karaskara) 人(南部印度)、プンドラ (Pundra) 人(北部ベンガル)、サウヰラ人(南部プンジャブ)、ヴンガ人(東部ベンガル)、羯陵伽人(南部ベンガル及びオリッサ)、或はプラヌナ (Pránúna) 人を訪へるものは献供を行ふべし。

これによりてこれを見るに、バウダヤナは印度を三區に分ち、その住民の血統によりてその所見を異にせること明かなり。ガンガ河流域の純粹なるアーリア人民は即ちその最も尊敬したる所にして、南部ベハル、東部ベハル、南部プンジャブシンド、ジラト、マルワ及びデカンこれに次ぐ。蓋しこれ等の地方は史詩時代に印度人の殖民したる所にして、純粹なるアーリア種の血液を混ずれはなり。されど、ベンガル、オリッサ及び南部印度に至ては、當時未た全くアーリア化するに至らず、僅かにアーリア種の血液を混ぜるのみ。これ即ちこれ等の地方を過くるものゝ、献供を行ひてその不淨を攘ふ所以なりとす。

摩揭陀人、アンガ人ベンガル人、スラシトラ人、デカンの案度羅人及びキストナ河南の諸種族は、皆これ古代の非アーリア國民にしてアーリア種の征服者及び殖民者よりその宗教及び文明を學び、漸次その血液を混合せり。故を以てサラスヴチ河畔に於て編まれ、ハスチナプラ (Hastinapura) 及びミチラ (Mithila) に於て歌はれたるサンスクリット語の讃頌は、アマラヴチ及びカンチに於ても歌はれ、ジュムナ及びサラユ (Sarayu) 河畔に於て行はれたる吠陀の儀式は、ゴダヴリ及びキストナ河畔に於ても行はるゝに至れり。かくて印度の全部はアーリア人の世界となり、被征服者は皆征服者の言語を用ゐ、征服者の儀式を行ひ、征服者の宗教を信じその影響を受けざるもの、たゞ無人の荒野あるのみ。

印度の統一已にかくの如くなるが故に、アレクサンドルス王以前の印度を以て大王死後のギリシアに比するは必ずしも當らずとせず。ギリシアはなほガンガ河の流域の如く、文化及び宗教の發生地なり。マケドニア (Macedonia) 人はなほ摩揭陀人の如く、その征服せる國民よりその文化を學べり。印度に於てもまたギリシアに於ても、遠國の民皆同じくその文明の光明に接せり。イタリア、シチリア、エジプト、シリア、ペルシア及びバクトリアの諸國民が、ギリシアの宗教を奉じ、ギリシアの彫刻を模倣し、ギリシアの哲學を學び、ギリシアの國語を用ゐたるは恰かも印

度諸國民のアーリア人の文化を學び、その宗教を奉じたるに似たり。されど歴史上の類似はこれに止まらず。アジア及びヨーロッパにその跡を絶てるヤハシア文明のその果實をヨーロッパ諸國に結べる、またガンガ河畔のアーリア文明の二千餘年印度諸國に發達したるに似たるものあり、而してカムビリア(Kambilya)及び阿踰陀(Ayodhya)に行はれたるアーリア語の、今日なほボムベイ及びベンガルに於て修めらるゝは、恰かもギリシヤの語のオクスフォルド、パリ及びベルリンの諸大學に於て學ばるゝに似たり。

第十四章　風俗及び文明

アーリア殖民者の大陸に蔓延し、その習慣及び儀式を他の諸國民に傳ふるやその綱領を編纂するの必要を生ぜり。當時、その學問を教ゆるには暗誦の法によりたるが故に、アーリア化せる印度の諸國民は教師の由を以て教を、弟子の由を以て學ぶべき一種の文體を作らんとし、その文章を省略するに腐心せり。實に當時の操觚者は極端より極端に走り、散漫冗長なる史詩時代のグランタを廢して、スートラ(Sútra)即ち理論時代の格言を作れり。而してその格言の簡約なる、往々註釋なくして理解すること能はざるものあり。

理論時代の學者は、精細なる吠陀の献供の儀式を省略して、實際に通ずるスラウタ・スートラ(Srauta Sútra)となし、また家庭の儀式及び季節の祝祭の定律を約してグリーヤ・スートラ(Gríhya Sútra)となし、最後にその民法、刑法及び社會法を編纂してダルマ・スートラ(Dharma Sútra)となせり。而して以上三種のスートラは、當時の風俗及び習慣を明かにすること多し。

スラウタ・スートラに定めたる吠陀の儀式は、その種類甚だ多し、然れども當時の學者がウタマはこれを分ちて十四種となせり。こゝにはこれを詳述するの要なきを以てその一二を擧げんに、男子はその業成るに及びて妻を迎へ、一家を成し、初めて聖火を點ず、その儀式をアグニアダナ(Agnidhána)といふ。聖火を點ずるには一般に摩擦を以てし新夫婦これを守りて曉に至る。而して敬虔なる印度人は、その死に至るまで火を滅することなく、祭祀は必ず供物をこれに捧ぐ。また朝夕火に牛乳を捧ぐる儀式あり、これ吠陀の儀式中最も簡單なるものにして、アグニホト

ラ(Agnihotra)といふ。

グリーヤスートラに定めたる家庭の儀式もまたその種類甚だ多し然れども、ウタマはこれを分ちて七種となせり。而してその最も主なるものスラッダ(Sráddha)といふ、時を定めて祖先の靈を祭るの謂ひなり。祖先の靈を祭るものはアルギアなり、「曾祖父よこれ卿のアルギアなり」「祖父よこれ卿のアルギアなり」「父よこれ卿のアルギアなり」等の語を以てし、また學德高き婆羅門をその家に請じて祖先の代表者となし、これに贈るに薰香、飾環、衣服の類を以てす。餘の儀式は一般に季節の祝祭にして重要ならず。當時滿月及び新月の夜に行ふ儀式あり、蛇の怒を解かんがために雨季に行ふ儀式あり、晩秋五穀の成熟を俟ちて行ふ儀式あり、而して初冬の收穫を祝する儀式には種々の菓子類を造りてこれを分配す。

以上七種の儀式の外に純然たる家庭的儀式あり。ガウタマはこれを分ちて十九種となせしがその中また興味あるものなきにあらず。妻懷姙すれば、その夫はこれがために三種の儀式を行ひ、子生るゝか、或はその子齒を生ずる時はまた三種の儀式を行ふ。男子長じて學に就くや出家の儀式あり、次いで薙髮の儀式あり。出家の儀式によりて、男子はそのグル即ち教師の家に寓し、吠陀及びその他の學問を修む。吠陀を學ぶに當りて行ふ儀式また四種あり、業成れば乃ち婚姻の儀式を擧げて一家を成す。重大なる家長の義務は實にこの時代に始まるものにして、これがために定められたる日々の儀式五種あり、神、祖先、人間、精靈及び最高現體に供物を捧ぐることとこれなり。而して敬虔なる印度の家長は、日々その食卓に就くに先だちて、これ等の儀式を行ふを例とす。

十四種の吠陀の儀式、七種のグリーヤの儀式、十九種の家庭の儀式は、古代印度の四十種の聖禮にして、その目的甚だ明瞭なり。敬虔なる印度人は、ヒマラヤ山よりコモリン岬に至るまで、同一の儀式を行ひ、同一の習慣を守り、敬虔清淨、無私の實例を示すを要す。而して尊貴なるガウタマは、四十種の聖禮を記述せる後、異の德の更に重んずべきを說きて昇天の道を示せり。

これ等四十種の聖禮によりてその不淨を去るも、その靈魂八德を缺くものは神に合すること能はざるべく、將た天に達すること能はざるべし。

實に四十種の聖禮の一部によりてその不淨を去るもその靈魂を備ふるものは神に合して天に住することを得べし。

この時代の他の學者ヴシシタもまたいふ、

吠陀は善行なきものを淸淨にせず、彼は六種のアンガ(Aṅga)を學ぶともその益なし。神聖なる經文はかゝる人を棄つ、なほ鳥の羽翼を生ずるに及びてその巢を棄つるが如し。

妻の美が富者を喜ばしめざるが如く、吠陀また六種のアンガ及び獻供と共に善行なきものに幸福を授けず。

種々の經文は、己を處するに虛僞を以てするものを罪より救はず、然れども僞を知らんとして、意を用ゐてその二語を學ぶものを淸淨にすること、なほアスヰヤの月の雲の如し。

これ等は神聖なる經文及び儀式を排して淸淨無垢の生活の學ぶべきを敎えたる佛敎に達する階段に過ぎず。佛敎につきては後章に於てこれを述べん。

スラウタ・スートラ及びグリーヤ・スートラに定めたる儀式は、前に述べたり。而して刑法及び民法を記せるダルマ・スートラは、最もよく當時の社會狀態を明かにす。蓋しその定むる所、犯罪者の種姓に從ひて刑の執行を異にすればなり。

當時重罪とせられたるもの四種乃至五種あり、これを犯すものは一般に死刑に處せらる。婆羅門を殺せるもの、グルの寢室を冒せるもの、精酒を飲めるもの婆羅門の金銀を盜めるもの、これ所謂當時の重罪犯なり。而して婆羅門若しこの一を犯せば、その額上に烙印せられ、國外に放逐せらる。これ婆羅門を殺すの法なきによるなり。されど、他の種姓に屬するものは死刑に處せらる。

輕罪の刑罰またこの種の區別あり。高等なる種姓に加へたる戍陀羅はその手足を斷たる。されど、この種の法律の不平等は印度に限らず、征服者と被征服者、自由民と奴隸、貴族と平民、領主と農奴、白人黑奴の、その法律を同うせざる古今皆然り豈に獨り古代印度の被征服者たる戍陀羅を虐遇するに於てのみこれを怪まんや。

盜賊捕はるれば重罪を以て問はる然れども國王は特赦の權を有す。農工はその職業を保護せられ、土地及び製造品に關する犯罪は嚴に處罰せらる。

この時代の民法は、田地の貸借、家畜の未穀に加へたる損害賠償、財產及び金利に

闕して規定す。財産を得るにはその道八つあり、相續によりて得るもの、購買によりて得るもの、夫の贈與によりて得るもの、通常の贈與によりて得るもの、抵當によりて得るもの、獻供の報謝として得るもの、組合の配當によりて得るもの、勞働の報酬として得るもの即ちこれなり。金利は抵當ある場合には年一割五分の比にして、その元金と額を同うするに及びて止む。然れども無抵當の場合にはその比多く、元金の六倍乃至八倍たることを得。

この種の精密なる規定を見れば、印度立法家の用意を知るに足る。されどその最も意を用ゐたるものを相續法とす。嗣子の出生は印度人の見て以てその幸福とし、併せてその宗教上の一義務としたる所なり、蓋し嗣子なければ祖先の靈を祭ることと能はざればなり。古代印度人の結婚によりて擧げたるもの、外、別に相續者を認むるに至れるまた故なきにあらず。

家に相續者なき時は他人の子弟を養ふことを得。夫若し實子或は養子を遺さずして死する時は、その妻これがために相續者を立つることを得。夫はその妻の結婚前に擧げたる子を、その結婚後に認むることあり、或は父に男子なき場合、その女の擧げたる子を以て相續者となすことあり。

以上の相續者はみな古代印度立法家の認めたる所なり。されど、反動は遂にして來れり。ダルマ・スートラ最後の編者たるアパスタンバは、その先輩の定めたる諸種の法律を排斥し、相續者と認むべきもの、その妻の生子に限ることを宣言せり。故に近代の印度人は、その妻の生子或はその養子のみを認む。

一夫多妻の風は古代印度に行はれたれども奬勵せられず、特に男子を擧ぐるために許されたるのみ。アパスタンバいはく、若しその妻にして宗教的義務を行ふに足り、且つ生子あらば、その夫たるものは別に妻を迎ふることを能はずと。これに反して、女子はその夫の精神錯亂せる場合、虚弱なる場合、その階級を失ひたる場合或は死したる場合には再婚することを得。

婚姻には、父はその女を盛裝せしめて祭壇に伴ひ、僧侶これがために火に供物を捧げ、且つ或儀式を行ひて、然る後その夫と共棲せしむ。これ通常の儀式なれども、印度の立法家は、當時行はれたる他の儀式をも悉くその法典に記せり。當時下級の人民間には、その女子を以て家畜或は金錢に代ふるの習慣ありしが、印度の立法

家はこれを正當視し、また純然たる戀愛結婚を承認せり。刹帝利種は屢〻戰に勝ちてその新婦を强奪し、印度化せる土著また腕力によりてその妻を得たり。印度の立法家この習慣を非とし、アーリア種の印度人に勸むるに清淨なる儀式を以てしたるに拘はらず、その法典に悉くこれを認めたるは、蓋し當時の習慣を盡ん能はざりしにいでたるのみ。

血族結婚は印度立法家の嚴禁したる所にして、その男女は四代方至六代婚を結ぶと能はず。古代印度の女子は妙齡にして結婚せり、而してタンジョの定めたる所によれば、處女は長じて三年間その家に在らざるべからず。殘酷なるサチ(Sati)の儀式は後代の習慣にして、理論時代の印度人は一般にこれを知らず。蓋しこれ古代印度の自殺の一種にして、その外見を飾るに過ぎざるのみ。古代印度の男子は、憂愁苦悶堪へがたきに至りて世界を悲觀し、自殺を行ひたることあり、非アリヤ種の女子またその夫の火葬場に身を投じて焚死せることあり、然れども、女子焚死の習慣は一般に印度人の知らざりし所にして、古代のダルマ・スートラは固より言及せるもの

てもなく、基督紀元後に編纂せられたる後代の印度法典またこれを認めたるものあらず。

社會の法律を定むることかくの如く周到なるダルマ・スートラは、またその種姓に關して洗獸を守るの理由なし。印度種族の膨脹は、その風俗を博ふるためにその網領の編纂を促し、またこれに婆羅門、刹帝利、吠奢、戍陀羅以外の新種族に接觸するの機會を與へたり。スートラの編者がその種姓の原則を以て新種族の起源を說明するに力めたるはこれによる。而してその原則の包括的なる新種族の印度化するに及び、これによりて以て印度社會の新階級を造るに至れるを見て知るべし。

アンバシタ(Ambashtha)人、ウグラ(Ugra)人、ニシャダ(Nishada)人、マガダ人、ヴァイデハカ(Vaidehaka)人、ククタカ(Kukkutaka)人、チャンダラ(Chandala)人、すべて印度文明を採用せる土著は、各自印度の種姓を形成せり。而してダルマ・スートラにはその種姓の名稱とその義務とを列擧せるものあり。

然れども、スートラの編者の信ずる所によれば、世界の初婆羅門、刹帝利、吠奢、戍陀羅の四階級あり、この四階級雜婚して新種族を生ぜりといふ。これ恰かも第五世

紀のギリシアの一僧侶が、フン族を以てパルチア(Parthia)の女を娶れるローマ貴族の苗裔なりとし、また第十三世紀の一僧侶が、モンゴル人を以てアラビアにおいて未開の世に信ぜらるゝも、一般智識の進歩するに從ひて、一笑にだも値ひせざるものとす。たゞ印度に於ては、智識の普及長く束縛せられたるが故に、笑ふべき理論時代の僧侶の臆測、無智無學なる人民に信ぜられたるのみ。

理論時代のダルマ・スートラによるに、婆羅門、刹帝利の女と婚してアンバシタ人を生じ、刹帝利、戍陀羅の女と婚してウグラ人を生じ、婆羅門、戍陀羅の女と婚してニシャダ人を生じ、戍陀羅、吠奢の女と婚してマガダ人を生じ、戍陀羅、婆羅門の女と婚してチャンダラ人を生ぜりといふ。今ベンガルのチャンダラ人は、その俗勤勉にして、魚を捕へ、舟を漕ぎ、穀物を植え、アーリア文明の影響を受けて全く印度化せり。他の土著またかくの如く、その印度社會の分子となるに及び、各自その階級を造りて、印度の種族的階級こゝに成れり。

されど、近代印度の職業的階級は理論時代に成れるにあらず。理論時代にありては、陶工、織工、鐵工、金工、金商及び香料商皆、古代の吠奢に屬せり。而して吠奢の子孫にこの種の區別を生じ、遂に近代の職業的階級を造るに至りたるは、外國降服より來れる墮落の結果のみ。古代の印度人はもとよりこの種の區別を知らず。

第十五章　科學及び哲學

理論時代の印度人は、唯にその意を法律の編纂のみならず、また科學及び哲學の研究に注ぎ、その成功更に驚くべきものあり。蓋しその山河千里、遠くガンガ河畔の故郷をいでて、未知の諸國民を征服教化せる敢爲の氣象は、またその科學及び哲學の研究に成功せしめたるものとす。印度以外の諸國に於ては、科學の研究近代に至りて初めて完全の域に達せり、偶〻古代に於てその發達稱すべきものなきにあらずと雖も、その發明的才能を發揮して後代に恩惠を垂れたるもの、思ふに理論時代の印度人の如きはあらざるべし。

印度人は、發音及び作文の法を正すことを以て宗教的儀式の執行に必要なりとせしが、これその他の諸國に先んじて、文法の研究印度に發達したる所以なりとす。

その大文法家パニニ(Pāṇini)の時代につきては、議論紛々たりと雖も、その前第七世紀或は第八世紀に在世せしこと疑なきが如し。パニニはまた先輩を有せしも、その大著述の完全なる、先輩の著述をして悉くその光を失ふに至らしめたり。ヨーロッパに於ては第十九世紀に至りて、初めて數万のアーリヤ語を解すべき語源を發見せるも、パニニ及びその先輩は、當時已にサンスクリット語につきてこの發見をなせり。而してその法則の完全なる、後人またこれに加ふる能はず。

祭壇の建築また古代印度人の意を用ゐたる所にして、その幾何學の發達を促せるは前已に述べたり。その最古の方式は史時時代に成れること疑なしと雖も、これを集めてスルヴ・ストラ(Sulva Sūtra)に大成せるは實に理論時代にありとす。その最古の祭壇は74プルシャ(purusha)即ち平方形なり。また圓形及び三角形の祭壇あり、その74プルシャの面積を有するに於て平方形の祭壇に異る所なし。而して圓形の祭壇を建築するには、一平方プルシャをその面積に加へ、また三角形の祭壇に於ては、その形狀を變更するとなくして、二平方のプルシャを加ふ。他の建築法に於てはまた、平方形を以て與へられたる二箇或は二箇以上の平方形に等しくし、或は與へられたる二箇の平方形の差に等しくするもの、長方形を變じて平方形となし、平方形を變じて長方形となすもの、三角形を以て與へられたる平方形或は長方形に等しくするもの、圓形を以て與へられたる平方形に等しくするものあり。而してその法の幾何學の智識を要するに至ては論なきのみ。

世多くは幾何學を以てギリシアの科學なりとし、紀元前第六世紀にピタゴラス(Pythagoras)初めてその法則を發見せりと稱す。然れどもスルヴ・ストラの成れるはピタゴラス以前にして、史詩時代の方式はまたスルヴ・ストラ以前にあり。故にフォン・シュラーデル(Von Schrader)及びその他の學者が、ピタゴラスを以てその幾何學の智識并びに他の思想を印度に得たりとせるは當れるが如し。

數學に於ける印度人の發明は、幾何學の發明に比して一般に承認せらる。かのギリシア人及びローマ人の知らざりし十進法は、實に印度人の發明せる所なり。而して十進法を印度人に學びて、更にヨーロッパに傳へたるものをアラビア人とす。

理論時代に於ける天文學の進歩は、不幸にして知るを能はず、これ當時の著述の完全なる後代の著述のためにその地位を奪はれたるによる。バラサラ(Parāśara)

及びガルガ(Garga)は印度最古の大天文學者にして、前者は史詩時代に在世せりと稱せらる、然れどもその著述として今日に存するものは、前一〇〇年或は二〇〇年に成れるもの、その眞僞もとより疑ふべしとす。

醫學は夙に印度に發達せり。而してワイズ博士(Dr. Wise)は醫學の父ヒポクラテスガ(Hippocrates)が、その醫藥の原料を印度に得たりとを暗せり。前第四世紀にアレクサンドル大王の印度を侵すや、その醫師の堪能なるを見てこれをその陣營に留め、ギリシア醫師の治すると能はざる患者を托したりといふ。醫學は印度にてアユルヴェダ(A'yurveda)と稱せらる。然れどもこれに關する古代の著述は傳はらず、而して今日世に存する最古の醫書にして、チャラカ(Charaka)及びススルタ(Susruta)の作と稱せらるゝものは、基督紀元前の著述を以て目すべからざるが如し。

然れども理論時代にありて最も進歩せるものは心理學及び論理學なり。前第七世紀の頃に起れる迦比羅(Kapila)の僧佉(Sánkhya)哲學は、リス・デヴィズ(Rhys Davids)の說によれば、記錄に存する最古の哲學系統にして、ショペンハウエル(Schopenhauer)及びハルトマン(Hartmann)の獨逸哲學とその論據を同うしその異なる所たゞ方式の精粗に過ぎずといふ。果して然らば實にこの後二千五百年間、心理學上新機軸をいだしたるものなしといふも過言にあらじ。

迦比羅の哲學系統はこゝに述ぶること能はず。然れどもその心理作用に關する說は精密なるを以てその要點を擧げんに、インドリヤ(indriya)はたゞ印象を感受し、マナス(manas)はこれを知覺す。故に音響耳にきたるも、知覺存ずるにあらざれば、これを知ると能はず。アハンカラ(Ahankára)は印象を區別して自己のものとし、ブッヂ(buddhi)はこれを識別して思想を形成し、思想遂にアトマン(atman)の用をなすといふ。これヨーロッパ哲學の感覺印象を感受して次にこれを知覺し、自覺これを區別して自己のものとし、智力これを綴じて概念或は判斷となし、判斷遂に靈魂に訴ふといふに等し。印度の註釋者またこれを解していはく、村落稅を村民に徵して縣知事に納め、縣知事これを大臣に納め、大臣これを集めて國王の用に供するが如く、感覺は外界の印象を感受してこれを自覺に移し、自覺はこれを智力に移し、智力はこれを集めてその君主たる靈魂の用に供すと。言ふ所頗る妥當なりといふべし。

迦比羅また物質及び靈魂の不滅を信じ、靈魂の完全なる智識を得て解脱するとて、肉體と離るゝことなきを主張せり。その靈魂の輪廻を信じたる點に於ては、ウパニシャドか筆者に異ならざれども、神は哲學的證明を以て知るべからずとなせしが故に、その哲學は不可知說となれり。

不可知的哲學は印度人の滿足する所にあらず、これパタンジャリ(Patanjali)の瑜迦(Yoga)哲學起れる所以なり。瑜迦哲學は、心理學派としては發明せる所少けれども、究意解脱の手段として、神の默示にその心力を集中すべきを勸說す。されどその流を汲むもの漸次墮落し、遂に妖術を以て思想界を腐敗せしむるに至れり。

迦比羅の死後百年乃至二百年にして、ニアヤ(Nyaya)の祖ガウタマ(Gautama)世にいでたり。ニアヤは印度の論理學派にして、その目的主として所證と能證とを明かにするあり。而してその三段論法が推理の發達を促せることは注目に値ひす。左にその一例を擧げん。

(一)丘に火あり
(二)煙揚がるが故に
(三)煙揚る所には火あり、厨房の如し
(四)丘に煙揚れり
(五)故に火あり

印度の三段論法は五段より成る、若しその最初の二段若しくは最後の二段を省略すれば、アリストテレス(Aristoteles)の完全なる三段論法とならん。これによりてこれを見れば論理の學たる、初めて印度に發達し、他の諸種の科學の如く、ギリシアに傳はりて完全となりたるにあらざるか。

カナダ(Kanáda)はガウタマの後、微分子哲學の一派衛世師(Vaisesika)をひらけり、而してその原理とする所は、万物の本體は微分子の集合なりといふにあり。その說にいはく、微分子は不生不滅なり、万物の生滅は微分子の集合と分離とによると。

以上四派の哲學は印度の守舊派を驚殺せり。古代の信仰及び儀式に泥むものは、これを見て事態容易ならずとなし、乃ちその信仰及び儀式と調和する二派の哲學を起せり、ミマンサ(Mimánsa)派及びヴェダンタ(Vedánta)派即ちこれなり。前者は古代ヴェダの儀式を主張し、後者はウパニシャドの宇宙靈魂の信仰を主張するものとす。

而して爾後二千有餘年、迦比羅、カウタマ、カナダの哲學は、たゞ少數の學者によりて修めらるゝのみ、多數の印度國民に至ては依然宇宙靈魂を信じ、万物これより出でゝこれに歸るとせり。

第十六章　佛教

印度人の發見にして世界にその影響を及ぼせるものは、その哲學及び科學のみにあらず。實にその智識的發見はギリシア人にいたりて完全を致し、ヨーロッパの諸國民に恩惠を垂れたること論なしと雖も、前第六世紀にガウタマ佛陀（Gautama Buddha）の說ける高尙なる宗教に至ては、アジアの諸國民を統一してその信者となし、その影響更に大なるものあり。その信者今日に於ては五億万、實に世界人口の三分の一を占むと稱せらる。

摩揭陀王國の印度に興隆せる時、サキアと稱する無名の一種族、その北西のロヒニ（Rohini）河畔に住せり。當時摩揭陀、憍薩羅の兩王國、互にその權力を爭ひて嫉視反目し、また他を願るの遑あらず。サキア族乃ちその間に介在して、僅にその獨立を維持せり。ガウタマはもとその王族の名なり、故にその王子シッダルタ（Siddhártha）（悉多）またガウタマと呼ばれ、或はその族名をとりて釋迦と呼ばる。而してまた佛教の教祖としては佛陀の名あり、覺者の義なり。

釋迦若うしてその家をいで、その妻子をすて、諸方に流寓してその食を路に乞ひ、衆生濟度の道を求む。印度教の儀式に無辜の犧牲を殺すを見てその感情を害し、その哲學を學びて安心を得ず、また數年間その難行苦行を試みてその無益なるを悟り、沈思默考、遂にその切に求むる眞理を發見し、自修博愛を以てその宗教の生命とせり。

釋迦は前五五七年を以てカピラヴスツに生まれ、前五二二年を以て初めてその信仰をペナレスに說き、少數の歸依者を得て摩揭陀に赴きしが、その王頻比沙羅喜びてこれを迎ふ。この間、釋迦その食を路に乞ひ、遂るゝが如き慈悲を以てその高尙なる教を說けり。遠近の民これを聞いてその德を慕ひ、來りてその弟子となるもの漸く多し。當時釋迦は黎明に起きて精神を修養し、或はその弟子と問答を試み、次いでこれを率ゐて市街に向ふ。その名聲漸く印度に布き、國王その前に膝を

屈するに及べるも、なほ日々托鉢を手にし、街路に出でゝ戸毎にその食を乞ひ、而かも低首靜立、何等の求むることなく、默然として一片の食物のその鉢に投ぜらるゝを俟てりと。

今や數千の民はその家を脱し、その階級及び一切現世の財寶を棄てゝ僧侶となり、女子またその髪を斷ちてその門に入るもの漸く多く、これがために僧院樹林に建立せらるゝに至れり。宗教的乞丐の生活は古代より印度に行はれざるにあらざれども、釋迦の定めたるこの制度は、印度或は世界の僧院制度の嚆矢なりとす。

僧尼はこの制度に從ひて一所に起臥し、財産を共有し、同種の教團の下に生活せり。

然れども僧尼以外また數千の俗弟子即ち居士あり、これその妻子或は財産を棄つることなく、依然その階級を保ち、而かもその大教師の深遠なる教理を學び、高尚なる道德律を認むるものとす。而してこの居士等が實に教徒の中堅にして、僧尼の如きは比較的少數なること論なきのみ。

釋迦諸方に遊びてその教を說くこと前後四十五年、その間に新歸依者を得、僧尼及び居士の戒律を定む。この時、摩揭陀王頻比沙羅逝きてその子阿闍世(Ajatasatru)王位に登り、釋迦の世の尊敬を受くるを見てこれを優遇せり。釋迦已に老ひてその死期の近づけるを感ずるや、その弟子阿難(A'nanda)に告げていはく、予今や老衰せり、予は予の路を經過し、老年に達せり、予は將さに八十歲ならんとす、阿難、卿これを以て爾後自ら光明たれ、自ら庇蔭たれ、他の庇蔭を求むる勿れ、固く眞理を執りて光明とせよ、固く眞理を執りて庇蔭とせよと。

釋迦は貧窮なる鐵工の招に應じてその家に至り、幾許もなく病を獲て逝けり。傳ふる所によれば、その將さに逝かんとするや、樹木時ならざるに花を着けて紛その頭上に落ち、嘹亮たる音樂空中に起れりといふ。されど、釋迦この時その弟子を顧みてこれに謂ていはく、阿難、かくの如きはこれタッタガタ(Tathágata)[如來]の當さに尊重せられ、崇敬せられ、神聖にせらるゝ所以にあらず、されど、常に大小の義務を果し、正業を行ひ、教訓を實踐する善男善女は、當さにタッタガタを尊重し、崇敬し、神聖にし、且つこれに服從するものなりと。釋迦はこの教を說きて逝けり、實に前四七七年なりとす。而して釋迦の說法は有名なる佛教の經典三藏(Pitaka)に存す。

經藏(Sutta Pitaka)に收めらるゝ著述は、釋迦の言行を錄するものと稱せらるゝ、而

してその最古の著述には釋迦の言あり、その間往々弟子の言を交へざるにあらざれども、その教理及び訓戒に關する釋迦の言その全部に散見す。

律藏(Vinaya Pitaka)は僧尼の戒律を收む。而して釋迦は始めてその教をベナレスに說きてより四十五年間在世せしが故に、その自らこれに收むる戒律の大部を定めたること疑なし。然れども、その死後また精密なる許多の戒律を生ぜり。たゞ律藏には兩者の間に區別をおかざるのみ。

論藏(Abhidhamma Pitaka)は諸世界に於ける生活狀態、元素、万有の原因等種々の問題に關する議論を收む。思ふにその大部は釋迦の死後、その建設せる教理の上に起れるものならん。

傳ふる所によれば、釋迦の弟子五百、その師の逝ける年を以て、當時の摩揭陀の首府ラジャグリハ(Rajagriha)(王舍城)に會して第一回の結集を催し、その記憶に存するその教を合唱せりといふ。これ文字の使用及び印刷術の未だ開けざる世にありて、經文を傳ふる唯一の道なりとす。

その後百年を經て前三七七年に至り、佛教徒の間に異說を生じ、諸派の一致すること能はざるもの十點あり。こゝに於て第二回の結集を開きてその爭點を定めしが、その多數はこれに服せずして分離し、こゝに上座部と大衆部との二派を生じ、その爭論年と共に盛なり。ネパル、チベット、支那及び日本の北方佛教徒は即ち分離派即ち大衆部の流を汲むものにして、錫嵐、緬甸及び暹羅の南方佛教徒は即ちその反對派上座部を代表するものとす。

この後百餘年にして、摩揭陀及び北部印度の阿育迦(Asoka)大王は、前二四二年の頃、第三回の結集大會を開き、一千の僧侶これに列して經文を合唱せり。この頃、大王の子(或は甥)摩哂陀(Mahinda)は錫嵐に赴きて佛教を傳へ、その後前八八年に及び、從來記憶によりて傳へられたる經文は、錫嵐に於て始めて記錄せらるゝに至れり。これ即ち今日に存する三藏なりとす。

錫嵐の三藏は、忠實に釋迦の教理及び訓戒を現はすものなり。印度人は數百年間記憶によりてその古代の學問及び經文を傳へ、吠陀の如き古代の著述をその子孫に傳ふるに、一言一句誤なからんことを期し、印刷術進歩して書籍の廉價なる今日に於ても、なほその古代の經文を學ぶに口によるの風あり。されば、釋迦の教が、

前二四二年の大會に於て定められ、その後前八八年、錫嵩に於てパリー語を以て錄せらるゝに至るまで、その弟子によりて合唱せられ、數百年間、記憶によりて忠實に傳へられたるが如き、怪むに足らざるのみ。これ一部の學者が南方の經典を以て、忠實なる佛教の記錄とすべき所以なり。

北方佛教徒の著述は一般に後代の編纂に屬し、その所說釋迦の根本的教法を去ること遠し。而して印度以外の諸國民が、これ等の著述によりてその教を傳へたるは言ふまでもなく錫嵩島民の佛教に歸依したる後の事にして、支那の如きは第四世紀に初めてこれを傳へ、日本また第六世紀にこれを傳承せり。故に或一部の學者は釋迦の根本的教法を知らんと欲せば、錫嵩の南方經典によらざるべからずとなすはこれが爲めなり。而して印度の印度人は佛教を棄てゝより日已に久し、これを以て印度には佛教の經典存せず。

釋迦が動物屠殺を要求する吠陀の儀式を排し、その難行苦行を以て無益なりとせるは前已に述べたり。然れども、釋迦は決して舊宗教を排斥して別に新宗教を起さんとしたるにはあらず、その意たゞその國民の宗教を改革して、その根原的純潔を恢復するにありしのみ。故にその佛教を說くや、自らこれを以て高潔なるアーリア種の根原的宗教を說くものなりと信ぜり。佛教の主なる教理を檢すれば、その印度の古宗教にいてたること明かならん。その僧院制度は、婆羅教徒の尊崇せる、隱者の生活にいてたるものにして、印度に僧院制度の成れる後、數百年間、婆羅門教の隱者は佛教の僧尼を以てその一派に過ぎずとなせり。來世の應報を說く羯磨(Karma)の律の如きも、またウパニシャドの靈魂輪廻の思想にいて、婆羅門教の哲學系統すらその眞理なるを承認せり。その涅槃(Nirvāna)の教理に至ては、ウパニシャドの宇宙靈魂に合すといふ思想に異らず。加之、婆羅門教の神ブラーマ、インドラ等は、一般に佛教徒の信ずる所にして、その說によれば、これ等の神は人と同じく、幸福なる涅槃に向ひて進むといふ。涅槃は即ち佛教徒の天なり。

これによりてこれを見れば、世界三大宗教の一と稱せらるゝ佛教は、實にその主なる教理を婆羅門教に採れるものにして、その數百万の歸依者を得たる主としてその涅槃を宇宙万有の上におきたるによる。佛教徒の信ずる所によれば、涅槃は神、天人、及び人の生をかえて達せんとするものにして、その大なる天人もこれに及

ばず、その高き、神もこれに若かずといふ。故に一生にしてこれに達せる佛陀は、神人の共に尊敬する所なり。實に佛陀は佛教徒の尊敬崇拜の中心にして、宇宙万有はその一生に達せる涅槃に達するために、世界を異にし、生活狀態を異にし、事情を異にして、奮闘するものとす。これ佛教徒の佛陀を以てその生活の模範とし、その宗教の理想とする所以なり。佛教徒はその同胞兄弟を愛し、その目的を同しうして奮闘する神を認め、また幾たびか生をかえて殆ど佛陀の狀態に達せし菩提薩埵(Bodhisatva)を尊敬す。然れどもその究竟の目的は、高尚、偉大、清淨、神聖これに及ぶものなき佛陀の狀態に達するにあり。故に佛教の涅槃は宇宙万有の上にありて、各自精勵によりて達し得べきものとす。而してこれ即ち佛教の信仰の高尚なる所以なり。

以上述べたるが如く、佛教は自力によりて涅槃に達するを以てその目的とす。而してその眞理とする所のもの四つあり、これを四諦といふ、第一、苦、即ち人生は苦なり、第二、集、即ち種々の慾望は苦の源なり、第三、滅、即ち慾望を滅すれば苦もまた滅す、第四、道、慾望を滅して苦を斷つの道は八正道を修するにありといふものこれなり。八正道とは第一正見、第二正思惟、第三正語、第四正業、第五正命、第六正精進、第七正念、第八正定にして、第一は正しき信仰を有するをいひ、第二は正しき目的を有するをいひ、第三は虚妄の語なきをいひ、第四は不正の行なきをいひ、第五は正しき生活をなすをいひ、第六は專心一意正道を勵むをいひ、第七は正道を修してまた他念なきをいひ、第八は沈思冥想移らざるをいふ。而してこの道は一方に於て慾望よりきたる苦を去り、他の一方に於てまた嚴酷なる苦行を不必要とするが故に中道の名あり。自力修行の律は精密なれども、こゝにはたゞ佛教の原理を述ぶるに止めんのみ。

涅槃は佛教徒の天なり、而してこの天に達することを得るは自力修行によるものとす。その旅行を終えて悲哀を去りたるもの、あらゆる方面に於て自由を得、あらゆる繫縛を脱したるものには苦あるなし。

彼等は正道を修すると共に去る。彼等は家にありては幸福ならず、故を以てその湖を棄つる鵠の如くその家を棄つ。

眞智識を得て自由となれるもの、平安を得たるもの、平安なるはその思想なり、平

安なるはその言行なり。(Dhammapada)〔法句經〕

佛教徒の涅槃は現世に於ける神聖幸福の狀態にして、來世に於ける歡樂喜悅の狀態にあらず。その經典はたゞ反覆涅槃に達するの道を說くのみ、來世生活の希望に關しては何等の說く所なし。故に佛教徒の見る所は涅槃なり、涅槃以上はその見る所にあらず。かの天上の快樂を想像し、來世の賞罰を豫想して、その情慾を滿足せしめんとするが如きは佛教徒のなさゞる所なり。佛教徒の希望は涅槃にあり、涅槃は即ちその精勵の究竟目的なり。

涅槃の狀態に達すること能はざるものは、再び世界に生れきたりてその慾望と職分の責を有す。佛教徒はもと靈魂の存在を信ぜざれども、婆羅門教の輪廻說を信ず。その說によるに、肉體死するも羯磨即ち行は死せず、その善惡に從ひて他の生活を生ずと。これを以て、敬虔なる佛教徒は、皆その生活狀態の前世の行により て定めらるゝことを信ぜり。然れども若し靈魂にして存在せずとせば、何を以て已に死せるものを新たに生れたるものに當つるや、佛教徒これに答へていはく、人死するもその羯磨は死せず、生前の思想、行爲、言語長へに存すと。

以上は主なる佛教の教理なり、然れどもこれその多數の教徒を引接し、由て以て諸國民を統一せる抽象的教理にあらず。佛教の多數の教徒を得たるは、實にその思想及び道德の卓越せるにあり、佛教は道德上の訓戒、古傳說及び譬喩に富み、その ダンマパダは、全篇無私、寬仁、愛憐、慈悲を說けるものとす。左にその格言二三を擧げん。

五　怨に對するに怨を以てすれば怨滅びず、愛を以てすれば、怨滅ぶ、これその自然なり。

五一　色ありて香なき花の如く、言行一致せざるものゝ言は美にして實なし。

五五　檀香木或はタガラ(Tagara)の花、蓮或はヴシキ(Vassiki)の花の香よりも芳しきは善行の香なり。

一四一　裸體となるも、頭髮を編むも、汚穢に在るも、斷食するも、地上に橫臥するも或は塵埃を拂ひ、或は靜坐するも、慾望を滅ぼさゞるものは淸淨なること能はず。

一八三　罪を犯すことなく、善を行ひ、心を淸淨にせよとはこれ佛陀の教なり。

一九七　吾等をして吾等を怨むものを怨むことなく、幸福なる生活をなさしめよ、吾等をして吾等を怨むものゝ間にありて、これに拘ることなく生活せしめよ。

二二三　彼をして愛を以て怒を滅ぼさしめよ、彼をして善を以て惡を滅ぼさしめよ、彼をして寛仁を以て貪慾を、眞實を以て虛僞を滅ぼさしめよ。

二五二　他の瑕疵を知るは易し、然れども己の瑕疵を知るは難し、人はその憐人の瑕疵を求むること粃を篩ふに異ならず、然れども己の瑕疵を隱すこと、ほ騙子の賭博に骰子を隱すが如し。

こゝに釋迦の山て以てその弟子に愛憐及び慈悲を敎えたる無數の譬喩を說くは難し。故にその一例としてたゞ憍薩羅の王子デガヴ(Dighāvu)の譬喩を擧げん。

カシ王ブラーマダタ(Brahmadatta)は大國の君主にして、財寶、軍隊、車馬に富めり。然るに憍薩羅王デギチ(Dighiti)は小國の君主にして、財寶、軍隊、車馬、皆これに若かず。

史上屢見るが如く、富强なるカシ王は貧弱なる憍薩羅王の王國を奪へり、憍薩羅王乃ち遁れて潛匿するの所を求む。憍薩羅王、子あり、デガヴといふ、長じて丁年に達せり。

その後、憍薩羅王デギチ、その潛匿せる所を發見せられて死に處せらる。時にデギチその子を顧みてこれに告げていはく、愛見デガヴよ、怨は怨を解かず、愛見デガヴよ、怨は怨を解くと。

デガヴは森林に赴きて號泣し、その父の仇を報ぜんがために、遂にカシ王の馬丁となれり。

一日デガヴ黎明に起きて歌ふ。カシ王その聲の美なるを聽いて大に感じ、その憍薩羅王の子なるを知らずしてその侍者となせり。

その後、カシ王デガヴを隨へて獵す。デガヴ故らにその車を徑路に驅り、部下の衆をしてこれに合すること能はざらしむ。疲れたる王は遂にデガヴの膝を枕として眠れり。

デガヴこれを見て好機逸すべからずとし、その父の仇を報ずるの意あり、思へらく、敵は父母の王國、軍隊、車馬、財寶、倉庫を奪へり、彼は父母を殺せり、予の仇を報ず

べき時は今なりと。こゝに於てその劍を拔けり。

然れども、その父を思ひてその最後の訓戒に想到せり、いはく、愛兒ヂガヴよ、怨は怨を解かず、愛兒ヂガヴよ、愛は怨を解くと。孝なるヂガヴはその父の最後の訓戒に背くこと能はず、遂にその劍を鞘に收めぬ。

王は惡夢を結べり、而してその醒むるや、ヂガヴこれに告ぐるに實を以てす。王これを聞いてその寛容に感じ、乃ちその王國、軍隊、車馬、財寶をかへし、且つこれに妻すにその女を以てせり。

佛陀はこの譬喩を結びていはく、噫、僧侶よ、これ笏を持し、劍を把る國王の柔和忍辱ならば、噫、僧侶よ、卿等は更にその光明を世界に輝し、その教理及び訓戒に從ひて宗教的生活をなし、柔和忍辱ならざるべからずと。

長老スニタ(Sunita)の實話はまた、佛教の種姓の別に苦めらるゝ印度の民を救ひ、遂にアジア全部の賤民を濟度したることを明かにす。由てこれを左に擧げん。

長老スニタいはく、予は微賤に生れ、貧窮なりき、予は落花を掃ひて以て口を糊せり、衆予を賤み、予を視ること甚だ輕し、予は常に自ら卑うして衆に尊敬を表せり。

偶〻予は佛陀の僧侶を率ゐて摩揭陀の大都市に行くを見。予の職業をすてゝ、悲しくこれを拜せんがために走れり。高貴これに比するものなき佛陀は予を憐み、予のためにその歩を停めたり。予はその脚下に平伏してこれに近づき、予の沙門たるを許さんことを乞ふ。時に慈悲溢るゝが如き佛陀は予に謂ていはく、噫、沙門よ、來れと。これ實に予の佛門に入れる初程なり。

以上の簡單なる譬喩及び實話を見れば、アジア諸國民を教化せる佛教の、いかなる宗教なるかを知るに足らん。

第四期　佛教時代（摩揭陀の隆盛　三二〇—四〇〇年前）

第十七章　摩揭陀帝國

印度史上の新期節は、アレクサンドル大王と時を同うせる旃陀羅笈多の時代にその端を發す。旃陀羅笈多は一時大王の陣營にあり、大王の印度を去れる後、摩揭陀の王位を奪ひ、プンジャブ及び西北諸州をペハルに併せ、ギリシア人のために征服せられたる領土を恢復し、初めてインドス河よりペハルに至る北部印度の全部を

統一せり。そのセレウコスと和してその女を娶り、その朝廷にギリシアの使節メガステネスを留めたることは前已に述べたり。

メガステネスは五年間(前三一七―三一二年)印度にあり、その記錄の今日に存するものを見れば、旃陀羅笈多の權力及びその政治制度を知るべきものあり。これによるに、當時その任命にかゝる六部の官吏ありて都市の治に任じ、その第一部は古來より印度に發達せる工業を監し、第二部は外客の接待に意を用ゐ、これに宿舍を供し、その風俗を視察す。第三部は出生と死亡とを調査してこれに課稅し、第四部は通商貿易を監察し、度量衡を檢査し、また季節の產物の賣買を監督す。第五部は製造品の賣買を監し、第六部は一切寶品の價格を定む。

地方にはまたその治に任ずる官吏ありて、河流を管理し、土地を測量し、大溝渠の導水口を監視して灌漑に不公平なからしめ、また獵師を賞罰するの權利あり。その外諸種の稅を徵し、樵夫、木匠、鐵工、礦夫等の職業を監督し、且つ道路を開き、里程標を建つ。

軍隊の官吏はまた六部に分れ、その第一部は艦隊を掌り、第二部は牡牛を役し、武器を運搬し、糧食を供給す。第三部は步兵にして、第四部は騎兵なり。而して第五部は兵車、第六部は象を管理す。

アーリアン(Arrian)の記錄は、その精密なる點に於てメガステネスに勝るものあり。これによるに、當時の步兵はその身長に等しき弓を有し、これを地上に置きて抑ゆるに左足を以てし、長さ三步に當る矢を發つ。而してその銳利なる、楯、胸鎧の類ありと雖も、これに當ること能はず。また殆んど身長に等しき牛皮の楯を有し、或は投槍を以て弓に代ふ。その劍は長さ三キュビットを越えず、雙手を以てその敵に打擊を與ふるに用ゆ。騎兵は各、二箇の槍と楯とを有し、馬を御するには轡を以てせずして、その口に應じて作れる圓形の革を以てす。

軍紀は嚴肅にして、非戰鬪員に害を加ふることを禁ず。メガステネスいはく、他の諸國民にありては、戰時に田野を掠め、これを荒野となすを常とすれども、印度に在りては、農夫を以て神聖犯すべからざる階級となすが故に、耕作に從ふものは、その近隣に戰爭あるも危險を感ずるが如きことなし。戰爭には兩軍の戰士たゞ互に相殺戮するのみ、これを以て農夫は悠々その業に從ふことを得。加之、戰士は敵

の都市村落を燒き、或はその樹木を採伐するが如きことなしと。

印度の一般風俗につきても、メガステネスはまたこれを賞讃せり。いはく、印度の民は質朴節儉にして幸福なる生活を送れり。彼等は獻供の場合を除きて酒を飲まず、その飲料は米より造れる液體にして、食物は主として野菜を雜え炊きたる米飯なり。その法律及び契約の簡單なるは、訴訟の稀なるを以て知るべし。彼等は依托品に關して法庭に訴へ、或は印鑑及び證書を要求するが如きことなく、たゞ互に信用を以て事を處するのみ。一般に家屋及び財産を保護せず、これその誠實を證するものなり。眞と善とは一樣にその尊ぶ所なりとすと。

旃陀羅笈多は前二九〇年を以て死し、その子頻頭沙羅(Bindusara)これに繼ぎ、約三十年間統治せり。されどその事蹟明かならず。頻頭沙羅の子阿輸迦は、大王の稱あり、その父王の世に烏弦那の副王たり、勇敢なる君主としてその名を顯せり。而してその學揭陀及び北部印度の王位に登れるは、前二六〇年の頃なりとす。

阿輸迦はその祖父旃陀羅笈多の建設せる大帝國を繼ぎ、また當時の迦餒伽、即ち今のオリッサ及びベンガルを征服してその領土を擴張せり。この征服は、北部印度の宗教及び文明の直接影響を印度の東海岸に及ぼしたるものとす。他の諸國は實際阿輸迦のために征服せられたるにあらざれども、その主權を承認せり。カブル(Kabul)、カンダハル(Kandahar)、デカンの如きこれなり。而してこれ阿輸迦の告示文によりて知ることを得べし。

然れども阿輸迦帝國の大なる所以は決してこれにあらず、大王の名の印度及びアジアの全土に布くは、その宗教に熱心なるとその治の公平仁慈なるとによる、而してこれその大王の稱ある所以なり。旃陀羅笈多の北部印度征服は、ローマのヨーロッパ及びアジア征服に比することを得、蓋し、遠國の民有力なる同一君主を戴き、同一文明の影響を受くるに至れるに於て相等しければなり。而してこの諸國民統一は、即ち新宗教弘布の道をひらきたるものにして、阿輸迦大王の佛教を以て印度の國教となせるは、恰かもかのコンスタンチヌス(Constantinus)大帝の基督教を以てローマの國教となせるに似たり。

阿輸迦は當時北部印度に行はれしパリー語の告示十四ヶ條を、その領内の岩石に刻せり。この種の岩石の發見せられたるもの、インドス河畔に一、ジャムナ河畔に

一グジラトに下オリッサに二あり。而してその告示なるものは、(一)動物屠殺を禁ず(二)人畜のために施療院を設立す、(三)毎五年に佛教の祭典を擧行す、(四)廣く宗教上の恩惠を告ぐ、(五)宗教上の大臣及び使節を任命す、(六)民人の社會的及び家庭的生活を定むるために、道德上の教師を任命す、(七)宗教上の一般寛容を宣告す、(八)敬虔なる遊戯娯樂を勸む(九)宗教的及び道德的教育の普及を勸む(十)眞宗教宣傳の眞榮光を讃す、(十一)宗教的教育の普及の、最良の慈善なるを述ぶ(十二)道德を說きて不信者を改宗せしめんとする大王の希望を宣告す、(十三)大王のベンガル征服及びギリシア五王と締結せる條約を述ぶ、(十四)以上十三ヶ條の告示を概括す。

告示第十三條は、大王と時を同うせるシリアのアンチオコス(Antiochos)、エジプトのプトレマイオス(Ptolemaios)、マケドニアのアンチゴノス(Antigonos)、キレネのマガス(Magas)、エピロス(Epiros)のアレクサンドルに關係あるが故に、歷史上最も重要なりとせらる。大王は以上の諸君主に使を遣はし、その結果に滿足を表していはく、神の嬖者(大王自ら神の嬖者と稱す)の使を遣はし、その宗教の義務を說かしめたる所、民その宗教及び宗教的教訓に歸依せんと。かくの如く、佛教の勢力は大王の熱心によりて、前第三世紀にギリシア、エジプト及びシリアの遠國に及び、その地に諸宗派を生じ、且つ博愛、無私及び隱遁の思想を傳播せり。かくて佛教の傳導師がシリアにその教を說きてより二百年の後、多くの點に於て佛教と一致する基督教は北部パレスチナに起れり、歷史上の大變化か常にその先驅を有するが如く、佛教が最初の基督教に影響せることは疑ふべからず。

大王はまたその晩年に六ヶ條の告示を石柱に刻せり。この種の柱にして世に發見せられたるものデリーに二、アラハバドに一、北部ペハルに二、中央印度に一あり。而してその告示は皆六ヶ條より成れども、デリーに發見せられたる一石柱には八ヶ條を刻す。今その要を擧ぐれば、(一)宗務官吏に命ずるに、熱心と敬虔とを以て事に從ふべきをいひ、(二)宗教の博愛、慈善、眞實、清淨なるべきを說く、(三)修行及び罪業消滅の法を教ゆ、(四)政府の官吏をして人民の宗教々育に當らしむ(五)動物屠殺を禁ず、(六)その臣民に仁なるべきを宣言し、諸宗派の遷善を希望す、(七)その告示の衆を正道に導かんことを願ふ、(八)その公共事業を擧げ、且つその民衆に遷善を命ず。

第八條の一節を見れば、大王がその領土を擴めて印度の東海岸に及ぼし、またそ

の教を世界に傳へんがために傳道師を送りたると共に、その領民の物質的幸福を忘れざりしことを知るに足る。いはく、予は官道に沿ひてニアグロダ樹(Nyagrodha)を植え、人畜に庇蔭を與へたり、予は園外に芒果樹を植えたり、予は半クロサ(Krosa)毎に井を鑿ち、また人畜のために無數の休息場を建てたりと。而して實に敬虔なる大王は前二二二年を以て死せり、實に釋迦のその教をベナレスに說きてより三百年の後なり。この三百年の間に佛教は印度の國教となれり。旃達羅笈多の王朝は、印度にてこれをマウリア(Maurya)王朝といふ、蓋しその母ムラ(Mura)の名にとれるなり。而してマウリア王朝は、阿輸迦大王の死後約四十年にして亡び、プシパミトラ(Pushpamitra)といへるもの、前一八三年の頃、新たに一王朝をひらけり。プシパミトラはマウリア王朝の部將にして、インドス河畔にバクトリアのギリシア人と戰ひたりといふ。その子アグニミトラ(Agnimitra)は印度の文學に名あり、大戲曲家カリダサ(Kálidása)の一戲曲の主人公なり。プシパミトラ王朝は百餘年摩揭陀に統治し、次いで短期なるカーンヴ王朝(前七一—二六年)これに代はれり。

この時北部印度の王家已に衰へ、印度の全土にその權力を振ひし摩揭陀帝國は、有力なる君主の來りてその領土に君臨するを待てり。これより先きアンドラ人は南部デカーンに勃興し、その名漸く世に顯はれしが、こゝに至て摩揭陀にきたり、諸方を征服して四百五十年間(前二六—後四三〇年)その權力を振へり。傳ふる所によれば、アンドラ人は第一世紀にグジラトを失ひ、第三世紀の頃これを恢復せりといふ。而して第五世紀にアンドラ人の權力衰ふるに及び、摩揭陀は佛滅後一千年間、その占有せる地位を失ひ、遂に印度諸州の首領たる能はざるに至れり。

アレクサンドル大王以來、印度の西境には外敵の襲來絶えず、バクトリアのギリシア人はインドス河を渡りて印度人と交通し、その諸王は時にその諸州を征服してインドス河の東に及び、彌隣陀(Menander)の如きは西部印度の全部を征服してガンガ河に至れり。佛教徒の記錄によるも、メナンデルは佛教の哲學者龍樹(Nágárjuna)と議論を上下したりといふ。然るに前一二六年の頃、バクトリアのギリシア王國は、ツラン種の大月氏の滅ぼす所となり、その民相率ゐて印度にきたれり。

この後大月氏はまた印度にきたり、その王丘就却(Huvishka)は第一世紀にカシミルを征服し、その繼承者迦膩色迦(Kanishka)は印度人の所謂サカ(Saka)紀元をひらけ

り、サカ紀元は七八年にその端を發す。迦膩色迦また兵を率ゐて諸方を征服し、大にその領土を擴めてグジラト及びアグラに至り、また北方佛教徒の大會をひらきてその經典を定めたり、然れどもその事業として今日に存するもの、僅かに三藏の註釋に過ぎず。迦膩色迦の死後、その大王國分裂し、カシミルは再びその名を知られざるに至れり。

迦膩色迦カグジラトを征服せるは前に述べたり。然るにその死後幾許もなく、ナハパナ(Nahapana)ペルシア地方よりきたりてその地にシァー王朝をひらき、ナシク(Násik)の洞穴に誌銘を禁せり、その好んで公共事業を起せるはこれによりて知ることを得べし。この王朝のルドラ・ダマン(Rudra Daman)また興味ある誌銘を殘せり。これによるに、王は旃達羅笈多の創建し、阿輸迦時代のギリシア諸侯ッシァスバ(Tushaspa)の再建せる橋を修繕せりといふ。グジラトのシァー諸王と摩揭陀及びデカンのアンドラ諸王との間には屢々戰爭あり、ルドラ・ダマンはアンドラ王サタカルニ(Sátakarni)と戰ひて勝てることを誇れり。されば後の誌銘は、運命の潮流一變して、マガダ王ゴータミプトラ(Gautamiputra)のグジラトを征服せることを記す。シァー諸王の王朝は、アンドラ諸王の王朝と殆ど時を同うして第五世紀の初に亡べり。第四世紀及び第五世紀に、白フン人は旋風の勢を以てアジア及ヨーロッパを蹂躙せり。然れどもその印度に於ける歴史は後章に於てこれを述べん。

第十八章　建築及び技藝

今日世に存する印度建築の最古の標本は佛教時代に屬するものとす。これより先き、その建築に石材を用ゐたるものは、都市の外壁、橋梁及び堤防の類に過ぎず、王宮及び官衙の類また石材を以て建築せられたるものなきにあらざれども、この種の標本は今日世に存せず。印度教徒はヴィシュと神殿を造營し、偶像を彫刻することを知らざりしが故に、石造の宗教的建築物は、佛教時代に至りて初めて起れりといふも不可なからん。

佛教印度に傳播するに及びて、その建築術頓に發達せり。佛教の僧尼は、その僧院制度に從ひて宏大なる僧院内に共同生活をなせしが、漸次その富と權力とを增すに及び、石材を以て僧院を建築するの風を生ぜり。僧俗の間にはまた、崇拜のた

めに一堂に會するの習慣あり、次てこの習慣は石造の寺院を必要とするに至れり。加之聖場巡拜は佛教の一特徴なり、而して所謂聖場なるものは大なる墳丘にして、その周圍には精緻なる彫刻を施せる石柵あり。これ等は印度建築の發達を促したるものとす。佛教は印度教の滅ぼす所となりてより日已に久しと雖も、前第三世紀以後七百年間に成れるその墳丘、柵、寺院及び僧院は、印度建築の最好標本として今日に存す。

墳丘及び柵最古の聖場中、その最も有名なるものはバルート(Bharhut)(アルラハバドとジャバルプル(Jabbalpur)との間にあり)の墳丘及び柵にして、前第三世紀の造營にかゝるものとす。その墳丘は今見るべからずと雖も、柵の一半はなほ存す。この柵はもと長さ二百七十五尺ありて、四箇の門を有し、門の梁には象、獅子、鰐の彫刻及び佛教古傳説中の光景を現せる浮彫あり、これ即ち今日世に存する印度彫刻の最古の標本に數へらるゝものとす。左にこれに關するファルガッソン(Fergusson)博士の説を引用せん。

吾等印度彫刻の曙光をブッダ・ガヤ(Buddha Gaya)及びバルートの柵前二〇〇—二五〇年に見るに、その意匠全く獨創的にして毫も外國の影響を受けたるの痕なく、少くとも印度に於て、その思想を表はし、明にその説話を傳ふるに足るものなるを見る。その巧に象、鹿及び猿の如き動物を現はせる、世界の彫刻よくこれに及ぶものなし。植物の類またかくの如く、その彫刻の精密華美稱するに足る。人間の圖また吾等の美とする所とその標準を異にすと雖も、よくその性質を寫し、その群をなす所にありては、巧にその動作を表はせり。要するにその端正なる、その有意的なる、そのラファエル(Raphael)以前の彫刻なるに於て、世界恐らくはこれに勝るもの少からん。

次にサンチ(Sanchi)の大墳丘につきて述べんに、中央印度にボパル(Bhopal)と稱する小王國あり、その領内東西約四里、南北約三里の地に、五群乃至六群の墳丘ありて、二十五種乃至三十種の標本を包容す。サンチの大質丘は即ちその最も有名なるものにして、その基礎の高さ十四尺、圓頂閣の高さ四十二尺、基礎よりその頂點にいたる直徑百六尺あり、その内部は堅牢にして煉瓦より成り、外部は切石を以て包まる。墳丘を繞る柵は圓形を成し、その直徑百四十尺あり、精緻なる彫刻、石の柱を連結す

る石の横木をおほへり。墳丘に至る四箇の門は、印度建築の標本中その最も美麗なるものにして、これに關するフェルガッソン博士の說また引用するの價値あり。

四箇の門即ちトラナ (torana) は、その前後兩面、精緻なる彫刻を以て蔽はる、而してこれ等の門たる、その後方の柵と密着して建てるが故に、その表面これがために隱蔽せらるゝことなし。その彫刻は一般に佛陀の生涯を表現す……またジャタカ (jātaka) 即ち古傳記にその材をとれるものあり、釋迦牟尼の完全なる佛陀に達するまでに經過せりといふ五百生間に起れる事實を述ぶ。その古傳記の一たるエッサンタラ (Wessantara) は、北門の下の梁の全部を占め、今日錫蘭の經典に存するが如き奇異なる事實を綱羅す……他の彫刻は包圍、交戰及び勝利を表現し、また他の彫刻は男女の燕飲及び戀愛を描寫す。

サンチの大墳丘は阿輸迦大王の世に築かれたるが如し。されどその柵は年と共に加えられたるものにして、その誌銘によるも、幾多の篤信家の寄進にかゝることと明かなり。而してその門は第一世紀に建てられたるものなりといふ。

最後にアマラヴチの墳丘につきて述べんに、その地はもとキストナ河口の附近にあり、アンドラ國の首府としてその名を知らる。而してその墳丘は第四世紀に屬すといふ。

中央の墳丘は今見るべからず、然れどもその柵なほ存し、裝飾を以て塡めらる。外柵はその圓徑百九十五尺、內柵は圓徑百六十五尺、その間には勤行行列に用ゆる通路あり、外柵の柱脚は動物及び童子の腰線を以て飾られ、その內側は更に精緻なる彫刻を施さる。內柵は佛陀の生涯或は古傳記中の光景を表はし、その彫刻また精緻を極む。

この外、印度には墳丘及び柵の見るべきもの少からず、然れども已にバルート、サンチ及びアマラヴチの標本を見れば、佛教時代の墳丘及び柵を知るに足る

寺院　佛教寺院の特色は、その岩を鑿ちて造りたるものなるにあり、ヨーロッパ寺院の外觀は高尙にして、一見その特異を知るに難からざれども、佛教の寺院はもと岩を鑿ちて造りたるものなるが故に、その正面を除けば外觀なるものを有せず、その彫刻及び內側の結構を知らんとするものは必ずその洞穴に入るを要す。

佛教寺院の今日に存するもの、十中八九はボムベー領にあり、これその寺院を鑿

つに適せる岩のボムベー領に多きによる。

西部ガトには西紀前に成れる五箇乃至六箇の寺院あり。この洞穴に遊ぶものは、その石材建築の、漸次木材建築の風を帶びきたれるを見るべし。前第三世紀に屬するバジャ(Bhaja)の洞穴の柱の著しく內方に傾ける、洞穴の桶に支えらるゝ、皆これ木造の屋宇に見る所なり。

前第一世紀に建てられたるカルリ(Karli)(ボムベーとプナ(Puna)との間にあり)の寺院は、この種の建築中最も完全なるものなり。ファルガッソン博士いはく、この寺院は上壇或は半圓頂閣に限らるゝ本堂及び側堂より成り、その結構甚だ初期の基督教寺院に似たり。その內部は奥行百二十六尺、幅四十五尺七寸あり……本堂と側堂との間には三方に各々十五本の柱ありてこれを分ち、その柱は各々高き柱脚、八面體の柱身、富贍なる彫刻を施せる柱頭飾を有す。柱頭飾の上には二頭の象あり、各々跪きてその背に男女の像を載す。されど時には女像のみなることあり。要するにこの種の裝飾としては他に勝るものとす。而してその上には一般に半圓形の屋根あり……內部は實に莊嚴雄偉にして、光線を入るゝの方法また完全

なり。光線の內部に入るものは高き一箇の窓よりし、四方に散ずることなく、直接に祭壇或は他の重もなる場所を照し、他の場所をして比較的暗黑ならしむ。加之側堂と側堂との間には密接して立てる圓柱あるを以て、その提財益々有效なるを致すと。

佛教寺院の建築は、第一世紀の頃已にその完全に達し、その後また改良せらるゝ、たゞ益々修飾的となれるのみ。後代の佛教寺院に見るが如き佛教は、その形式甚だ第六世紀以後の印度教に似たり。

僧院　佛教の僧院はその寺院の如く、また岩を鑿ちて造りたるものとす。その最初期の洞穴はその規模甚だ小にして、僅かに一隱者のその中に個居し、默想に日を送るが如きものなりしが、その後僧房及び會堂を有する大僧院成るに至れり。オリッサには虎洞の如き小洞穴の標本あり、而してその虎洞の名あるは、その門、猛虎の口を開きたるの狀あるによる。然るにその後また大洞窟の岩に鑿たるゝあり。而してこれ等大小の洞穴は、皆ウダヤギリ(Udayagiri)、カンダギリ(Khandagiri)の二丘に散在し、前第一二世紀の頃に成れるものなりといふ。

ボムベー領の聖市ナシク(Nasik)には、亦もなる僧院三あり、ナハバナ(Nahapana)、ゴータマプトラ(Gautamaputra)、ヤヅヤスリ(Yadhyasri)の僧院これなり。ナハバナ僧院の諸銘によるに、これ第一世紀の頃に統治せるシャー王朝の祖ナハバナの義子の造りなるものにして、その中央には四十尺平方の堂あり、三方には十六箇の僧房、他の一方には六本柱の廊下あり。ゴータマプトラの僧院は、第三世紀の頃、アンドラ王ゴータマプトラの建つる所にして、その結構全く前者に同じ。ヤヅヤスリの僧院は第五世紀に屬し、六十尺に四十五尺の堂及び二十一箇の僧房あり、またその聖殿には、彫刻を施せる二本の柱と多數の從者を隨へたる佛陀の巨像とあり。

然れども佛教の僧院中最も興味あるものはアジャンタ(Ajanta)の洞穴なり。この洞穴は第五世紀に屬するものにして無比の價値を有す。これ他の僧院に見るべからざる一種の壁畫を有するによる。

アジャンタの第十六號の僧院は、廣さ六十五尺、長さまた六十五尺ありて二十本の柱を有す。その兩側には十六箇の僧房あり、中央には廣大なる堂あり、前面には廊下、後面には聖殿あり、壁は皆佛陀の生涯或は尊者の古傳記中の光景を表はせる壁畫を以て蔽はる。その圖は自然に適合し、人物の顔は愉快にしてその感情を表はし、畫中の女子また溫良優柔、よく印度美人の特色を現はせり。然れども近來これを寫寫するために彩色を加ふるあり、且つイギリス遊歷者の疎放なる、これを破毀して顧みざるの風あるを以て、印度繪畫の好標本たるこの壁畫も、これがために汚されたること少からず。

印度人は技藝を賤むの風あり、故にその建築、彫刻及び繪畫を以てギリシア人に比するに、到底その敵にあらず。その種姓制度は智者天才を技藝界より奪ひ、一切の手工を以て劣等なる種姓に屬すとなせり。その製作偶々巧緻なるものなきにあらざれども、一としてギリシア技藝の高尚なる審美學的性質を有するものなきはこれによる。蓋しプラクシテレス(Praxiteles)或はフェイディアス(Pheidias)は、印度の劣等なる階級のよく生む所にあらざるなり。

第十九章　風俗及び法律

理論時代の印度人が、その社會生活の律を編纂してダルマ・スートラとなせるは

前に述べたり。然るに佛教時代の印度人は、スートラ即ち格言體を棄てゝ流麗なる韻文體を取り、古來のマヌの法典を改作して、當時の習慣に適合せしめたり、これをダルマ・サストラ (Dharma Sástra) といふ、法律の義にして、實に印度の標準的典法なり。

新種族の印度化してその社會の分子たるに及び、印度の種姓は頓に增加せり。而してマヌはまたスートラの筆者の如く、婆羅門、刹帝利、吠奢、戍陀羅を以て世界種族の根原とし、新たに印度社會の分子となれる種族の起原を說明するにこの原則を用ゐ、チャンダラ、カイバルタ及び印度化せる他の土著を以て四姓の雜婚にいでたりとせり。加之外國の民その限界にきたるに及び、またその原則を擴張してその止に及ぼし大膽に說きていはく、南部印度の達羅毘陀人、カブル人、バクトリアのギリシア人、ツラン人、ペルシア人及び支那人は、刹帝利の墮落せるものなりと。

種姓の原則の妄に擴張せられたることとかくの如し、然るにその實際に行はるゝや、大に智識の進步及び技藝の發達を阻害せり。當時種々の產業は舊によりて吠奢及び戍陀羅に屬せしが、その階級甚だ蔑視せられたるを以て更に振はず。而してこの種の弊風は、中古ヨーロッパに於てまた見る所なれども、ヨーロッパに長藝家及び農夫は、數百年の後、奮然奴隸の境遇を脫せり。獨り印度に於ては、種姓の制度その暴威をふるひて遂に今日に及びたりき。

マヌク法典中、國家の統治に關するものは見るに足る。これによるに、政府はその歲入を國王の所領に仰ぎ、課稅によりてこれを塡補す。家畜の繁殖及び金の增加には百分の二の稅を課し、地租としては土地の產物の百分の六、八、或は十二を徵し、また鑛山、製造場及び倉庫の利益を收む。而してメガステネスのいふ所にまれば、都市村落には官吏ありてこの種の歲入徵收に任じ、農業、商業及び製造を奬勵せりといふ。マヌまたこれに附加していはく、國王は一〇村の長、十〇村の長、二十〇村の長、百〇村の長、千〇村の長を任命すと。而してこれ等の官吏の義務は、犯罪を禁じ、住民を保護するにあり。然れども印度には古來より一種の村落組合ありて、村民間の爭論を裁決し、その部內の事件を處理し、近來に至るまで絕らず。その間もとより王朝の亡ぶあり、首長の倒るゝあり、國內の形勢舊の如くならずと雖も、この組合制度は綱りその瓦解を免れ、よくその命脈を維持したるものとす。

農業及び技藝の古代に發達せることは、ギリシア人の記する所によりて知ることを得。メガステネスいはく、印度には肥沃なる大平原多く、河流縱横にその間を流る。加之土地の大部は灌漑の便に富むが故に、一年に二種の禾穀を生ず……穀物に加ふるに、許多の穀は河流に富む印度の全部に產し、また種々の豆、米及びポスボルムと稱する植物あり、食用に供する他の植物また多く野生す、動物の食料に適する他の產物に至ては枚擧に遑あらず。故に印度には決して飢饉の憂なく、また食物の供給に一般の缺乏を感ずるが如きことなしといふも不可なしと。

メガステネスはまた印度の風俗につきて說く所多し。而してその所謂七姓は容易に印度の四姓に當つることを得。その哲學者及び助言者は即ち婆羅門の二階級にして、宗敎を學ぶものと政府に立つものとをいふのみ。その農夫、牧人及び工匠は、耕作、牧畜及び製造に從ふ吠舍及び戍陀羅なり。而してその兵士は刹帝利にして、その監守は國王の侍僕をいふに過ぎず。

印度の敎育制度は前已に述べたり、その男子、幼にして父母の膝下を辭してグルの家に寓し、その學成りて家にかへり、妻を迎へ、一家を管理することまたこゝに說くを要せざるべし。而してメガステネスの言ふ所またこれに同じ。いはく、見童は多年師の監督を受く、而してその後の師は、學問識見前の師に勝る……三十七年間修學の後、各男子はその家にかへり、平和なる生活を送り、美麗なる麻紗を纏ひ、その指及び耳に金の裝飾を着け、且つ肉を食ふ、然れども平生使役する動物の肉を食はず、また羔の類を禁ず。多數の妻を迎へ、子の多からんことを願ふと。

メガステネスはまた印度人民の裝飾を好むことを述べていはく、その風俗の一般に質朴なるに反して、彼等は裝飾を好み、その上衣に金細工を施し、寶石を裝ひ、また花を飾りたる麻紗の衣服を着くと。ストラボ(Strabo)また印度の華美なる宗敎的祝祭に關する記事あり、依て以てその風俗と技藝の進步とを知るに足る。いはく、その祝祭の行列には金銀を以て飾れる、許多の象あり、四頭の馬及び數頭の牡牛數十臺の車を牽き、これに從ふもの、盛裝せる隨從の一隊あり、黃金の皿、鉢オルガイゲ(Orgpie)寶石を飾れる卓子、椅子、印度銅の酒杯及び洗盤、金の刺繡を施せる衣服、水牛、豹、獅子、羽毛或は音聲の美なる無數の鳥をさへぐと。

然れども、この種の行列は佛敎徒の例をひらきたるものにして、以前には人民一

般にその家の壇邊に祭壇を設け、その神及び祖先の靈を祭れり。而してマヌの說く所またスートラの筆者の說く所に同じ、たゞその異なる所はマヌの法典の往々佛敎の感化を受けたる跡あるのみ。古代吠陀の信奉者たるダルマ・サストラの筆者は、佛敎徒を目して不信者となし、且つ印度敎徒の佛敎徒に倣ひて神殿に偶像を崇拜し、祝祭を營ぐるを責め、口を極めてその僧侶を罵れり。然れどもその抗爭遂に効を奏せず、印度敎は佛敎の通俗なる崇拜の儀式を採用して、行列、巡禮、神殿の祝祭及び偶像崇拜その要素となり、第五世紀(或は第六世紀)には、古代吠陀のインドラ、アグニ、ヴルト及び他諸神の崇拜また衰ふるに至れり。佛敎徒はブッダ(佛)、ダルマ(法)、サンガ(僧)の三位一體を信じ、新信者皆僧侶となるに當りて、先づこの三寶にその信仰を表白するを例とす。而して近代印度敎徒のブラーマ、ヴシヌ及びシヴの三位一體を信じ、これをその諸神の首位に置くはこれに同じ。

この宗敎的變化は近代印度敎勃興の條に說くべし。然れどもこゝに佛敎が印度正敎の上に及ぼせし影響を略述し、且つマヌの地位を定むること必要なり。マヌは實に古代吠陀の印度敎、その神及びその儀式を主張せる最後の學者にして、近代印度敎の三位一體及び偶像崇拜を認めず。然れどもその繼承者に至ては全くこれに反す。

マヌの定めたる結婚の儀式はスートラの筆者の定めたる所に同じ。寡婦の再婚は全くその禁ずる所にあらざりしも、その習慣を認めざりしは爭ふべからず。而してその著述を見れば、當時再婚の風印度に行はれたるを知るべし。マヌまた女子の妙齡に達せずして結婚することを承認せり、これによりて當時一般に早婚の風ありしを知るに足る。蓋し外敵の襲來と時代の騷亂とは、有害なる早婚の風を助長せしが如し。而してこの習慣は、印度の獨立を失ふに及び、一の宗敎的義務となれり。寡婦の焚死を認むるサチの儀式に至ては、マヌの法典に何等の記する所なし。

マヌの法典は全部十二卷あり、二千六百八十五の對句より成る。而してその七百五十六の對句より成る二卷は、通常世にいふ法律を包含し、今日なほ印度裁判官の典據として尊重する所のものなり。

マヌは當時の法律を十八部に分たり。